
彼女は、生きている

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は、生きている

【Nコード】

N9503W

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

幽霊に対して、ほとんど万能ともいえる霊能力をもつ女子大生、安藤静香。そんな彼女がある日、道端で女の子、遠野沙織を拾う。寄る辺のない沙織を拾って一緒に住もうとするが、同居人からは大反対を受ける。それは静香が秘密にしていることと関係している……

基本コメディ。ややシリアス。明るい話を目指していますが、暗い時は暗いです。

プロローグ

よく、考えることがある。

生きることって何だろう。

そして死ぬって何だろう。

私はずっとそのことそのことを考えていた。

生まれてきた時から、何てことは言わない。生まれてきた時は、生きるの知らないぐらい死という概念を知らなかった。生きることに疑問なんて持たなかったということと同様、死ぬなんてことは考えもしなかった。

けれども、彼女は違った。

最初は同じだったはずなのに、違くなった。

彼女は、生きることの大切を知ると同じくらい死に近いところにいた。

幽霊。

この世で唯一の、死を体感した存在。

私は彼女が生きていると思っていた。彼女自身がそれを信じ切れなくて、私は彼女の生を信じ切り証明しようと躍起になっていた。

けれど。

それは、全部昔の話。

これから語られることは、私自身は何ひとつ語ることはない、ひと夏の思い出。

そんな昔話だから、何から始まるかなんて決まっている。

それと、彼女の終わりも。

人がいつかは必ず死ぬように、幽霊の終わりなんて、結局のところひとつしかないのだから。

かわいい女の子なら拾いませう(前書き)

サブタイトルは適当です。

かわいい女の子なら拾いましょう

生きている。

目が覚めて、真っ先にそう思った。

生きている。そんな当たり前のことに口元がほころぶ。意識が暗転した瞬間、もう目覚めないかもしれないと覚悟していただけない、嬉しくてならなかったのだ。

しかし、目に入った周囲の光景に違和感を覚えた。

ここはどこだろう。

自分はいまここに立っているが、ここはどこなのか、そもそも意識のなかったはずの自分がなぜ立っているのか。前後の記憶がない矛盾だらけの自分の状況を、いぶかしんだ。

けれども、事情もわからずきよきよと見なれぬ風景に目をやっていた時間は、そう長くなかった。そんな不審は太陽にかざした自分の手を見て取り払われたからだ。

それに気がついて、愕然とする。そんな馬鹿なと混乱するが、一瞬前の記憶から納得もする。そう。そうか。そういうことか。そうやって段階的に自分の状態を認めて、涙がこぼれそうな衝動に襲われたが、ぐっと口をひき締めてこらえた。

そんなのは、知っていたではないか。

やっぱりこの世には都合のよい奇跡なんてものではなくて、あるのはバカみたいな必然だけだった。

道端で女の子を拾った。

暑い。

と、そんな言葉がわたしの頭の中を埋め尽くしている。大学進学で東京にきてか二回目の夏だけれども、都会の夏は、粘つくような不愉快な暑さがあるから嫌いだ。

たまには、帰省をしようかな。田舎に戻ったほうが過ごしやすいに違いないし、たまには一人娘として顔を出すぐらいの孝行はしないといけない。

そんなことを思いながら歩いていると

「……おや」

わたしは道の少し先に女の子を発見して、ふと足を止めた。

見つけたのは、少し珍しい女の子だった。

女の子、といってもその表現には年齢の幅が広い。もう少し正確に表すなら、その子はわたしと同じ年くらいだ。たぶん一回り年下の十代半ば、うーん……わたしの視たところ、ずばり高校一年生かな。

「あれは……」

ともあれ、わたしはしげしげとその珍しい女の子を観察する。

一言で言うと、仔猫みたいな女の子だった。

小柄な体に、きりっとした吊り目がちな瞳。腰まで届いている黒髪は、手入れが大変だろうに艶やかに広がっていた。間違いないの綺麗なかわいこちゃんなんだけど、なんとなく仔猫に似ている印象を受けてしまったのはその態度のせいだろう。

電柱の陰にいたから、平然としていればわたしでも気付かなかつたに違いない。でも道の端に立っていて、あからさまに慣れておらずきよときよととしているものだから目立っていた。辺りを警戒しているようで、自分の状態に困惑している。つよがっているのにいまの状況に慣れていないのがまるわかりな様子は、世間知らずの仔猫にそっくりだった。

そこに立っている女の子のことなんてもちろん何にも、それこそ名前だつて知らない。しいていえば、今日の朝にここを通った時には確実にそこにいなかったことぐらいだろう。

そんな見も知らず縁もゆかりもない女の子なんて、見過ごそうとすれば簡単にすれ違った。

でも、彼女はちょっと珍しい女の子なのだ。

「うーん」

わたしは思案顔で腕組みをした。悩みの内容は至極簡単。

話しかけたい。

しかし話しかけられない。

その相反するふたつが原因だ。

話しかけられないのは、気恥ずかしいからとかそういう理由ではない。これでもわたしは物おじしない性格だ。どれほどのものかといえ、とある大好きな親友から「あんたは拳銃を突きつけられても怖がらないだろうし、実際撃たれても弾丸ぐらいじゃ貫通しないぐらい図太い神経してる」と吐き捨てられたことがあるぐらいだ。いつもだったら、電柱の陰にいる彼女と同じような珍しい子を見つければ、初対面だろうと構わず迷わず話しかける。

だけれど、いまはいつもとは違い、話しかけられない訳がある。

「むっつ」

さつきから何回ひとりであっているだろう。我ながら奇行なのは自覚しているけど、悩んでしまう。

普段となにが違うかというところ、いまのわたしには大好きで素敵な親友と、とある約束事があったのだ。約束自体はムリヤリされたものだったしわたしは納得なんてちつともしていなかったけれども、約束した相手はとつてもとつても大事で一緒にいたらアイラブユーと叫びたくなるぐらい大好きな大親友だ。

彼女に話しかけるのは、その親友との約束に反してしまうことになる。わたしが世界で一番愛している親友との約束なのだ。そう簡単に反故にしているのか。

ちよつぱり迷ったけれども

「うん。やっぱいいよね」

そう独りごち、結局は女の子の前に立った。うん、わたしの親友ほのちゃんも天使的にやさしい女の子だから許してくれるよ、と自分に言い聞かせて、にっこり笑顔を作る。

「こんにちは」

「へ？」

挨拶をすると、女の子はびっくりとしてわたしの顔を見た。

「家に来ない？ 今なら出血大サービス、シェア代ゼロ円です！」

人に話しかけられるなんて、思いもよらなかったんだろう。満面の笑顔で手を差し出すと、女の子はびっくりしたように目を見開いた。

「え、なんで」

「ね」

気の強そうな瞳を揺らして戸惑う彼女の手を、わたしは何の遠慮もせずにくいと引つ張る。羽毛よりも軽い彼女は、その力だけでふわりと宙に浮いた。

「そんなところにいないで、おいでおいで。遠慮しないの」
「え、ちよ、まっ」

抵抗なんて、戸惑いなんて斟酌せずに引いて歩く。連れ込んでしまえばこっちのものだ。ふわふわ浮いてくれるものだから、楽チンなことこの上ない。

「ところで君、名前は？」
「え……遠野」

ひっぱりながら聞くとぼろっとこぼすように教えてくれた。ただ、名字で止まってそれ以上は口を閉ざしてしまった。

「そっか遠野ちゃんっていうんだ」
「……」

話しかけても、今度は口を閉ざしたままだ。
頑な。

ファーストコンタクトで心を開けなかった証拠だ。ちょっと残念だけど、まあいっか。

仔猫みたいな女の子。
そして幽霊の女の子。

そんな半透明な遠野ちゃんを、わたしは道端で拾った。

かわいい女の子なら拾いましょう(後書き)

連載というものが初めてなので、一話一話の分量がいまいちつかめないうつ。ううん、これでいいのかな……？

きちんと自己紹介をしましょう

わたしが住んでいるマンションは、そこそこ家賃が高い。お風呂とトイレ付きの1LDKの部屋で、玄関はオートロック。全体として見れば、一人暮らしと家族で住んでいるところの比率が半分半分という、そんなマンションだ。

うちはあまり裕福ではないから本来ならもっと安いところに住むべきなのだ。けれども、一応わたしも女の子である。大学進学に合わせた上京の際、親友とのルームシェアをするということでは料金の折り合いをつけているのだ。

そんなわたしの素敵な住処に引つ張り込むも、遠野ちゃんはずともすんともくすんとも反応してくれなかった。

いや、反応してくれないわけじゃあないんだけど

「えーっと」

「……」

ちょっと声を上げただけで、無言の遠野ちゃんがぎろりと睨んできた。視線に圧力を込め、黙れと無言で脅迫してる。

連れ込んだらどうにでもなるといっものはちよっぴり浅はかだったみたいだ。むしろ無理やり連れてきたのが悪かったのか、ご覧の通り態度がやたらとげとげしい。

「とりあえず自己紹介しようよー！」

まあ、わたしはそんな細かいことは気にしないけど。

はきはきとした口調で元気で明るく愉快的トークを始める。

「ほら、やっぱりコミュニケーションの基本は会話だよ」
「……」

無視！ けどもわたしはめげないよ！

「ということでもまずは自己紹介だね。わたしは安藤静香。大学二年生の二十歳、法学部の法律学科です！ ぴちぴちの女子大生だよ！」
「……」

むづ。やっぱり反応がないなあ。ぴちぴちとか、自分で言ってるだけだなあ。反応ないと恥ずかしいんだけどなあ。それでもわたしはくじけず語りかけた。

「名字だけ知ってるっていうのも中途半端だね。遠野ちゃんの名前は？」
「……」

「どこに住んでたの？ 一軒家？ マンション？ はたまた段ボール？」
「……」

「猫派、犬派？ ちなみにわたしは断然猫派だよ。かわいいよね、猫！」
「……」

完・全・無視！

時折ジョークを混ぜて展開させるわたしの質問に、ふてくされてそっぽを向いている。会話をしやるものかと単純に意地になっるのが見え見えだ。

ふふん、そうきますか。でもね。喋らせるのなんて簡単だよ。自慢じゃないけど人の神経逆立てる会話をするスキルに関して、わたしは半端じゃないんだから。

「ところで遠野ちゃん」

かちちと会話の方向を転換する。

「わたしムリヤリ遠野ちゃんを家に引つ張り込んだけど、これって犯罪かなあ。法学部生としてちょっと心配だなあ。未成年者略取って何歳ぐらいまで適応されるのかな。やっぱり未成年の二十歳まで？ それとも女の子で十六歳、男の子で十八歳、みたいに男女で違ったりするのかな。うーん、遠野ちゃん、見た感じまだ高校生だね。わたしやっぱり犯罪者？」

「……っ」

びくつと眉が動いた。

うん、あんまり気は長くないみたいだ。この女の子の沈黙を破るのに、あと一步とはいわずとも、二歩ぐらいかな。

さらに揺さぶる方向を変えてみようか。

「まあでも、そんな些細なことはこれからすることを前にしてみれば気にすることじゃないね。さてさて遠野ちゃん。世間的にも白い目で見られる未成年者略取なんて犯罪に手を染めてまでわたしが遠野ちゃんをここに連れてきた理由、わかる？」

「……？」

「幽霊つてね」

微かに眉をひそめた遠野ちゃんを確認して、内心ほくそ笑む。

わたしはもったいぶって台詞を切って、ペロりと舌舐めずりをしてみせた。

「実はとってもおいしいんだ」

「……っ!？」

あ、もの凄い動揺してる。

「幽霊つてね、一口にちぎって頬張ると、口の中でするつととけるの。水みたいであって、霧のようでもあって、砕いた氷のようでもあって、でもしっかりした感触がある触感はある類がない至上的なものだよ。肝心の味はというと、とてもこまやかで、その上品な甘苦さは高級なチヨコレイトに似ているの。それぞれ、幽霊によって微妙に味わいが違ってね。その違いを探すのが、楽しみなんだあ」

ゆっくりと唇を引き上げ三日月につくる。怪しげな笑みを口元にたたえ、わたしはずいっと遠野ちゃんに顔を寄せた。

「さて遠野ちゃんはどんな味がぐぎゃうん」

わたしの顔面に遠野ちゃんのパンチが炸裂した。

「い、いたいよう!」

「うるさいわよっ!」

殴られた顔を推さえて訴えるも効果はない。いつそ恐怖心をあおってしまったようで、遠野ちゃんはめちやくちやに暴れ始めた。

「近づかないでどっかいきなさい変態鬼畜悪魔人でなし!」

「と、遠野ちゃん! ウソウソ食るとか冗談だから髪ひっぱんないで! ひっかかないで痛いよひどいよわたし女の子だよ傷できたら……うぎゃー! 噛みつかないでわたしおいしくないよう!」

きちんと自己紹介をしましょう(後書き)

やっぱり一話一話が短いですかね……うーん？

しっかり状況説明をしましょう

「何なのよあなたは！ 訳わかんないのよ！」

ひとしきり暴れて落ちついた遠野ちゃんはそういつて大声を上げた。うん、暴れ終えただけで落ちついてはないね。すごい暴れたのに、まだ怒る気力が残ってるなんてすごいね。

「うっ……」

対してわたしはといえば、遠野ちゃんに髪ひっぱられあちこちひつかかれ噛みつかれた結果、ぼろぼろだ。ひどい男に食い荒らされてばいされた後のようならずたのぼろぼろだ。

「遠野ちゃんたらひどいよ……おちゃめなジョークじゃないかい」
「本気で命の危機を感じたわ」

じとつとした目つき。ちっともわたしのことを信用していないようだ。

「いや命の危機って遠野ちゃん。そりや会ったばかりだからわたしのことなんてよく知らないだろうけど……本気でわたしが幽霊を食べると？ そんなハンニバルだとも？ 常識で考えようよ」
「ともかくっ」

おや、強引にごまかされちゃった。

「あなたは何なのよ。人をいきなりひっぱってきて。そもそも何で

あたしのことが視えているのよ？ 声が届くのよっ？ 触れるのよ！？ 他の人はみんな素通りしていったわよっ！？」

遠野ちゃんはあれでも我慢して黙っていたんだろう。わたしの言葉攻めにうっぶんがたまってたのか随分とお冠のご様子だ。堰を切ったようにしゃべりだした。

ちよつと浮いて、腰に腕を当てる。そうやって怒ってるのはちつとも怖くなくてむしろ微笑ましいんだけど、遠野ちゃんにその自覚がないんだと思う。威嚇してるのに、むしろうりうりとなでくり回したくなっちゃうあたりが、仔猫が毛を逆立てるところにちよつと似ていてかわいい。

ただ、いったん落ちついてもらわなければ。

「おや？ 自己紹介したんだけど……それでは改めまして。わたしは安藤静香だよ。幽霊に対し、視れる話せる触れるすばらしき霊能力者なのさ！」

「は？」

遠野ちゃんの目が、すつごい胡散臭いものをみる感じになった。

「なにそれ？ あんた頭大丈夫？」

そう続けた遠野ちゃんの顔は、押しかけのセールスマンから「これは幸運を呼ぶ壺ですっ」という口上を聞かされたときみたいな表情にそっくりだった。

「病院へ行った方がいいんじゃないの？ もしくはもう手遅れかしら？ 末期患者だったら、感染するかもしれないから近づかないでくれるかしら」

「な、なんたる差別！ そして、侮辱かな！」

とつてもひどい言い草だ。わたしは遠野ちゃんを視て、遠野ちゃんと話して、遠野ちゃんに触れているのに、それを承知で罵るなんてなんてこと。幽霊になつたくせして遠野ちゃんは常識にとらわれ過ぎだ。

「珍しいんだよ！ 幽霊を視れるだけとか、声が聞こえるだけとか、そういう中途半端な靈感の人はちらほらいるけど、触れる人はすごい少ないし、なにより視れる話せる触れるの三点拍子揃ったスーパーでパーフェクトでビューティフルな靈感を持った人ってあれだよ！ 人間国宝なんだからね！」

必死の主張を遠野ちゃんは、はんつと鼻で笑った。

「あーはいはいよかったわね、人間国宝さまさま。すごいすごい珍しい、わーぱちぱち。で、それよりなんであたしを家までひっぱて来たのかしら？」

「うっ、バカにされてる……」

おざなりすぎる拍手に、わたしはよよよと泣き崩れる。

「なんてこと……これは名誉棄損だよ。損害賠償を請求するきゃん
っ
っ」

「だまりなさい珍獣」

わたしの泣き落しに対し、遠野ちゃんが空中でくるつとまわって軽やかなかかと落としを披露した。体重がない幽霊の蹴りのわりに、勢いが乗っていて痛かった。

「くっくっくっ」

かかとがヒットした頭頂を押さえてうめく。痛い。これは傷害罪に値するよ。断固抗議しないと。

わたしは拳を振り上げて雄々しく反抗した。

「ぶったあー！ 遠野ちゃんがぶったあー！」

「ええいうるさいわね！ あんた年上でしょうがつ。なによその駄々っ子は！ もうちよっと弁を立てなさいよ！ ていうかそんなことよりさっさと質問に答えなさい！」

むう。もうちよっとおふざけを続けたいのに。遠野ちゃんの沸点は低すぎる。

「だって……わたしは幽霊を見かけたら家に引つ張り込むようにしてるもん」

遠野ちゃんに余りにも余裕がないものだから、仕方なくそこそこ真面目に答える。

同性で同年代の幽霊に限っての話ではあるけれども、わたしは拾うことにしている。

「は？ 何ですよ？」

「なんていうか、ポリシー？ ううん違うな。習性かな？ ほら、女の子が野ざらしだとやっぱりかわいそうだからさ」

「あたしは犬猫か。ていうか、それ、答えになってないわよ」

あらら。ぼやかしについてくるとは、意外なほどに遠野ちゃんは聡い。

「うんうん、遠野ちゃんは仔猫みたいにかわいいよ。それに遠野ち

やん、あそこから動けなかったでしょう？ 意外と困ってたんじゃないの？」

「む」

遠野ちゃんは、凶星を付かれて鼻白む。

気が付かれてないと思つてたのかな。

幽霊は、その場所から動けない。幽霊が現れる場所は、死んだ場所というわけではなくて日本全国ランダムに飛ばされる。東京で死んだのに幽霊になった出現場所が沖縄、なんてこともざらにあるみたいだから奥が深くて訳が分からない。まあ、国内と言つのは決まつているようだけれども。

そして、幽霊が動ける範囲はせいぜい半径五メートルぐらい。

「それが、幽霊としての呪縛」

「なによ、呪縛つて」

「遠野ちゃんを縛つてる鎖のこと」

「鎖？」

「遠野ちゃんには、視えないかな」

実際、目の視かたを変えると遠野ちゃんが鎖でがんじらめにされているのがわかる。いまは部屋の床から何十本と伸びた鎖が遠野ちゃんの行動範囲を決めている。それが幽霊の遠野ちゃん自身にすら見えていな呪縛だ。

あの鎖は、幽霊が人間の体と触れている間だけは消える。だから幽霊を動かすには、生きている人間が引っ張らないといけない。とはいえ、普通の人は幽霊に触れることはできないのと同様、あの鎖にも触れることができない。

だから幽霊を動かす際には触れる霊能力者が必要なのだ。

「
ということだね、わたしが引っ張らないと遠野ちゃんはこの

部屋から出れないの。だから行きたいところあったら言ってね」

一通り説明すると、遠野ちゃんの顔が曇った。

「え、なによその一方的な関係は。外出の度にあんたなんか頼むなんて、あたしのプライドが許さないわよ」

「え、なににその態度。まだ会ったばかりなのに遠野ちゃんヒエラルキーだとわたし格下なの？ 何で？」

わたし仮にも遠野ちゃんより年上なのに。遠野ちゃんの人付き合いの判断基準がどうなっているか気になるところだ。

「ちなみに幽霊単体でも動ける子もいるけど、それができるのはよっぽど特殊な子だけだよ。遠野ちゃんには無理かな」

「決めつけないでよ。やってみなきゃ分からないわよ」

「ねえ、遠野ちゃんってわたしのこと嫌いなのかな？」

強情な遠野ちゃんにちょっと泣きそうになる。腕をあげて体のあちこちを調べているようだけど、どうしたって遠野ちゃんには無理なのだ。呪縛たる鎖を見ることもできないだろう。

無駄と忠告するより自分で悟った方が納得するものだ。話もきちんと逸らしたことだし、模索する遠野ちゃんを置いてわたしは携帯を取り出してメールを作成する。

送り先は、ルームシェアをしているほのちゃんだ。

遠野ちゃんを連れてきたのはわたしの独断で勝手な行いだ。同居人であり大親友でもあるほのちゃんはいま大学に行っていて留守にしているけれども、事情を説明しないわけにはいかない。

『幽霊をひろったの』

急ぎだから短くても仕方がない。かちこちぱちつと手早くメールの文面を打ちこんでほのちゃんに送る。返信はすぐさまきた。

『しばらく家を出る』

たったの一行だった。

「……何が起こったのよ？」

いつの間にか後ろから携帯を覗き込んでいた遠野ちゃんが、メールを見て慄いていた。

「一行で絵文字もなくそれって……ガチ過ぎて怖いわ……。内容からして同居人からだろうけど、ケンカでもした？」

「なに言ってるの遠野ちゃん？」

いまのメールの内容を見てなんでそんなことを思うのかさっぱりわからない。これは簡素ながらもほのちゃんらしさを出しているいつもの文面だ。

わたしは携帯を閉じて、えへへと笑った。

「いつも通りだよ。もう。幽霊がいたら帰らないなんて人見知りなんだから。ほのちゃんたら照れ屋さんっ」

「いや、どんなポジティブシンキングよ。それ妄想ちゃんだと思われてるんじゃないの？ 無理ないわね、それは。幽霊拾ったとか電波なメールきたら、あたしだったら縁切」

「ていや」

「るぶっ」

台詞の途中でびすつと遠野ちゃんにチョップを入れた。幽霊に対して、視れる話せる触れるのわたしからすれば、遠野ちゃんに突っ込みを入れるぐらいちよちよいのちよいだ。

「いつ……ったいわねえ！ あんた何するのよ！」

「ほのちゃんとわたしの仲も知らないくせにいい加減なこと言わないで！」

おでこを押さえてうめき睨んでくる遠野ちゃんの視線に真っ向から向かい合う。借り暮らしになる分際で、何を言うのかこの子は。遠野ちゃんはちよつと生意気みたいだ。

ぶんすかしながらわたしはもう一回ほのちゃん宛てにメール作成する。

『家をでて大丈夫？ 宿のあてあるの？ ご飯とか食べれるの？ 心配だよ、ほのちゃん。幽霊付きになっちゃうけど、いつでもうちに戻ってきてね。ねえほのちゃん、そういえばさ、昔に（中略）ということだし、わたしもほのちゃんがいないとさみしいよ。だから帰ってきてよほのちゃん』

わたしの天にもとどかんばかりにあふれる想いを伝えるため、絵文字やデコメをふんだんに使う。画面を華々しくあしらった長文メールを三分かけて書き上げ、ぽちつと送信。

「ぶつ」

一仕事終え、息を吐く。

まったく。縁を切るなんて、わたしのほのちゃんに限ってそんなバカなことあるわけじゃないかい。ほら返信もこんなに早く…。

『ごめん。充電器がなくなって、なのに携帯のバッテリーがなくて電源が切れそうなの。だからもうしばらく返信できない。わかる？わかるね？ 私の言わんとしたいことの意味、わかるね？ わかったらしばらくメール送ってくるな。絶対に』

「……………」

「……………」

遠野ちゃんとわたし、二人して黙りこむ。

このメールの原因になっている自覚があるのだろう。後ろから携帯を覗き込んでいた遠野ちゃんは気まずそうな表情でこっちをうかがう。

「えっと……………」

「……………ほのちゃんからこんな長いメール来たのとっても久しぶり！」「こいつ喜んでる!？」

気まずげだった遠野ちゃんがドン引きした。

「キモっ！ なんだあんた変態なのか!? 罵られて嬉しいとか女!? まさか実在したとは！ 男子の妄想にのみ巣食う存在だと思ってたのに！」

「んん？ どうしたの遠野ちゃん？ ほらほら、このメール見てよ。この長いメール！ 文面からにじみ出る素のほのちゃん！ えへへ、嬉しいな。そしてほのちゃんたらかわいいな。よし、間違っても削除しちゃわないように保護プロテクトかけなきゃ」

「いやあんたがいいなら別にいいわよ……………キモいけど、別にいいわよ……………」

遠野ちゃんが心配して損したとばかりにため息をつく。それから

携帯の画面を指差して疑問符。

「……ていうか、こんなメールのやり取りがいつも通りとか……。あんとその子って、ほんとに友達なの？」

「えいや」

わたしとほのちゃんとの間にある、かけがいのない友情を疑うなんて何てことを。

横にあった半透明の足を蹴飛ばすと、遠野ちゃんは幽霊のくせにスコーンと転んだ。

しっかり状況説明をしましょう(後書き)

一日一話更新)

愛ある電話をかけましょう

「遠野ちゃん、わたしちょっと出かけてくるからね」
「もちろん大歓迎。二度と戻ってこなくていいわよ」

ひとしきり取っ組み合いをした後、両者笑顔でそんな会話を交わし、わたしは遠野ちゃんを部屋に置いて外に出た。

夏の夜といっても、まだそんなに暑くない。この辺りは人気がない割には治安がいいから、夜でも散歩をするには向いている。

いやあ、まだ出会ったばかりなのに遠野ちゃんとは打ち解けたなあ。なかなか楽しいトークだった。最終的には肉言語になってたくらいだからね。

遠野ちゃんも人見知りしない子だった。初対面の年上に向かってあんな過激な冗談の数々を飛ばせるなんて、右ストレートや左フック、果ては回転蹴りを繰り飛ばすなんて、遠野ちゃんってばほんとにいい度胸してるよねえ……！

「遠野ちゃんめえ……っ。いつか誰が家主か思い知らせてやらねば……！」

こめかみに血管を浮かばせながら、怨嗟を漏らす。

ま、このマンション分譲じゃないから正確に言えば家主わたしじゃないんだけどね。家賃的な意味で言っただけのちちゃんと半分こで払っているし、わたしが家主と言い張るのは厳しい。

だから、ここは二人で遠野ちゃんに詰め寄らねば。

わたしは、携帯をとりだして電話をかけた。

番号はもちろん、大親友のほのちゃん。

呼び出し音。出ない。留守番サービスにつながる。切る。リダイ

アルボタンを押す。呼び出し音。出ない。留守電サービスにつながる。切る。再度リダイヤル。呼び出し音。出ない。留守番サービス。切る。リダイヤル。呼び出し音。出ない。留守番サービス。切る。ぼちっとリダイヤルのボタン。

繰り返しトウルル、トウルル、としつこく待つこと数十回。

そうして待てば

「もしもし」

ほら、出てくれた。

諦めたような嘆息と一緒にだされた、冷やかな声。さすがはクルビューティーの頂点たるほのちゃんだ。らしいそれにちよつと笑う。

「ほのちゃん。こんばんは」

それ見たことか遠野ちゃんめ。わたしとほのちゃんが縁切るなんて、そんなことはあり得ないんだよ。

「なに。何か用、電波っ娘。何十回も電話かけるとか、ウザい。ス
トーカー？」

わたしの挨拶を軽やかに無視して繰り返された、先制攻撃の超絶不機嫌な声。常人ならば、それだけでごめんなさいと無条件に謝つてしまいそうな声音だ。

でも。

そんなものでわたしの笑顔は崩れないんだからね、ほのちゃん。

「えへへ。ただいまわたし発信の電波をほのちゃんが受信中です」

「じゃあね。来世では出会わないことを祈ってる」

「にやわあつ。ちょ、ちょち待ってほのちゃん！」

冷静かつ本気で通話を切ろうとしたいけずなほのちゃんを慌てて引き留める。

「何？ 何か用があるの？」

「えっと… そうだつ。電池が切れそうだったんじゃないの。充電器はどうしたの？」

「見つかった。ベッドの下を掃除したら出てきた」
「そっか」

流れるような口調で返ってきた答えに、ひっそり笑う。声に出したら、嘘が下手くそなほのちゃんはまた怒って電話を切ってしまうかもしれないから、笑みをこぼすのは表情までだ。いつの間にか帰ってきてたなんて気が付かなかったよ、何てからかいは間違っても言わない。

やっぱり、素直じゃない。そこがほのちゃんの魅力のひとつなんだけどね。

「ねえ、ほのちゃん。やっぱり帰ってこないの」

「ねえ。メールで送ってきた幽霊、どうなった」

……………あれ？

わたしの質問とは微妙に関係ない質問が返ってきたよ？ えっと、無視された？ わたしの質問スルーですかほのちゃん。いや、ほのちゃんだったらいいんだよ、無視しても……………ぶっちゃけ、慣れてるから……………。

「遠野ちゃんならまだいるよ。良い子だよ」

「まだ今日会ったばかりのくせに、なにが分かるの」

電話越しの声色がいら立った。高校時代にツンとした言動と冷やかな美貌から氷の薔薇には棘しかないと言われていたけど、ほのちゃんの感情の振り幅は、実は大きい。

「しず」

「なあに？」

ほのちゃんは、わたしのことをしずって呼ぶ。静香のしず。いつものところそう呼ぶ人は他にいないから、『しず』はほのちゃん専用の愛称だ。

「今度幽霊と関わったら、絶交するって言ったよね」

ずばっと本題をついてくる。

「うん」

「ごまかさずに、認める。確かにそんな小学生みたいな約束をさせられたよ。」

「でも」

「でも、何。このあんぽんたん」

電話越しからでも伝わる気迫に、さしものわたしもうぐっ、と言葉を飲み込む。

そりゃ怒るよね。機嫌も悪くなるよね。

こないだは、ほのちゃんも被害者だったもんね。

視れるだけのほのちゃんを、わたしのわがままに付き合わせた拳句があれだったものね。

「ごめんね、ほのちゃん」

「謝るな、バカ」

「うん。ごめんね」

「アホ。ドジ。マヌケ」

「うん」

ほのちゃんの罵りも、甘んじて受けとめるよ。

わたしのせいだもの。ほのちゃんを傷つけちゃったのは、わたしのせいだもの。だから、ほのちゃんのことを全て受け止めて見せるよ。

「電波っ娘。おたんこなす。ノータリン」

「うんうん」

「天然もどきの空気の読めないエアブレイカーの会話殺し」

「う、うんうん……？」

「幽霊以外には人間のしぼりカスぐらいにしか対人スキルを持ち合わせていない社会不適合のゴミくず」

「え、えつと……ほのちゃん……？」

あの、その……ちよ、ちよつとひどいんじゃない……さすがに言い過ぎじゃあないの、かな？

「の」

「の？」

バカでアホでドジでマヌケで電波っ娘でおたんこなすでノータリンで天然もどきの空気の読めないエアブレイカーの会話殺しで幽霊以外には人間のしぼりカスぐらいにしか対人スキルを持ち合わせていない社会不適合のゴミくずの、えつと、わたしいま涙目だよほの

ちゃん。表情笑顔で目元は涙目だよ？

「そのあんたがとりつかれて殺されそうになったのって、何回？」
「……………」

いっぱい。

「えへへ」

笑顔のままこぼれそうになった涙を、空いている手でそっとぬぐう。

「たいしたことじゃないよう」

答えは口に出さず、代わりにそう言って笑う。

だって幽霊が人にとりつかうとするのは、当然のことだから。

幽霊はとても不便だ。幽霊のままじゃあ大して動けない。人と触れない、話すこともできない、どころか気が付いてもらえない。

それはとつてもさびしい。

だから、人と話したくて、触りたくて、視てもらいたくて、幽霊は人にとりつかうとする。

でも、普通の人に幽霊はとりつけない。それは自然の摂理で、絶対の決まりだ。こっちから触れないということは、幽霊だつてこっちに触れないっていうことと同義なのだ。

だから幽霊がとりつけるのは、こっちも幽霊に触れる人間に対してだけだ。視れるだけじゃあだめ。声を聞いて話せるだけでもだめ。視れる聞けるでもだめ。あくまで、触れる人。幽霊に触れる人にも、幽霊は触ることができない。そして、幽霊がとりつくことができる人もまた、幽霊に触れる人だけなのだ。

そして積極的に幽霊と関ろうとする、視れる話せる触れるのわた

しにそういう機会が多いのも当然の流れなんだよ。

「……なにがたいしたことじゃないの」

でもほのちゃんの声は、震えてた。理性と感情がのがせめぎ合っているのが表にでた。

おかしいな。ほのちゃんがそんな感情で苦しむ必要はないのに。全部、わたしのせいなんだから。わたしが自分勝手にやってることなんだから。わたしが幽霊に関わるのは、誰よりも何よりも、自分の為にやってることなんだから。

「大丈夫だよ。遠野ちゃんはずごく良い子だよ」

「私に除霊ができれば、幽霊なんか見た瞬間に被うのに」

「うづん。ほのちゃんは、そんなことをしないよ」

忌々しそうな口調でそんなこと言っても、わかっている。

「やさしいもん、ほのちゃんは」

「うるさい。そんなわけないっ」

照れ隠しでもなんでもない、叫び。それが、わたしの胸にさくつとささった。

ほのちゃんはやさしい。それに間違いはない。

でも、やさしいからこそその行動というものがある。やさしいからこそ出てくる言葉もある。やさしさからくる行動の結果は、決してやさしいだけではない。

「ほのちゃん」

「だまってろっ」

ほのちゃんの一喝。それにずどんと揺れたのは、まだ立て直しきれてないわたしか、それともどなったほのちゃんの心のほうか。

「しずは視れるどころか話せて触れて、それでもって被えるくせに、なんでそれをしないの」

「……だって、かわいそつだもの」

被つと殺すと、何が違うかわからないんだもの。

「それでもっ」

わたしの言葉に、異を唱える。いつもは尖ったツララみたいに冷やかで固くみせているほのちゃんの感情が、ざばんつと波打った。

「幽霊と友達でいたいなんて、いままで成功したことなんてないくせにっ。出会って、話して、仲良くなって、なのに幽霊は、かってな我がままですずを裏切る！ 殺されそうになってるんでしよう？
それで、被ってるんでしよう！？」

うん。

「だったら最初で被え！ 見た瞬間に被え！ 仲良くなって被うなんて、なおさら辛いだけなの！ 仲良くなったのに裏切られて、仲良くなったのに被わなくちゃいけない。そんな重荷をわざわざ背負わないでっ。それでも被えないっていうなら、もう無視してっ。しずは、生きてるの！ だから幽霊なんかと関わらないで！ そうしても、しずは生きていけるもの！」

ほのちゃんが真正面から真っ直線に感情の波をぶつけてきた。
だから。

わたしは一言だけ返した。

「わたし、霊能力者なんだもん」

姿が、見えるんだもの。声が、聞こえるんだもん。手を、握れるんだもの。そこに、いるんだもん。わたしがここにいるように、彼女らもここにいるんだ。

だったら、それはね。

そこにいてもいいはずなんだよ。

「……」

一瞬の、間。それが重なる、数秒の沈黙。ほのちゃんが怒ったのか呆れたのか、でも絶対納得していないのだけは分かる、ほんのちよつとの時間。

それは短かった。

「しず」

ほのちゃんが、わたしの愛称を呼ぶ。

「なあに、ほのちゃん」

「の」

「の？」

またもや付け加えられる連用修飾語の『の』。
なんだろう。

きょとんと首を傾げると、電話越しに一拍、大きく息を吸う気配。
そして

愛ある電話をかけましょう(後書き)

最後まで書ききってあるので、基本毎日投稿します。

このペースだと、三十話も行かないぐらいで完結かな？

喜びを身体で表現しましょう

幽霊に対し、視える話せる触れる、そして被える。

その四点揃った霊力を持った、人間国宝級の霊能力者。

それがわたし、安藤静香。

幽霊の性質なら、大抵のことは知っているけれども、ひとつだけ伝え聞きながらその事実を確認したことがないものがある。

「さて遠野ちゃん。大事な大事なことを聞きます。とーっても大事なことなので、一回しか聞きません。心して答えちゃってね」

ぴしつと一本人差し指を立てると、遠野ちゃんはうろんげに顔をこっちに向けた。

「あんたがいちいちふざけてるようにしか見えないのはなんでなのよ」

「そんなことないよ！ 真面目だよ！」

「嘘つけ。ていうか帰ってこなくていいっていったわよね。なんでここにいるのよ。納得する答えがないなら、あたしの右ストレートが火を吹くわよ」

「ひどいっ。ていうかここはわたしの家だもんっ」

訴えるも偏見による一太刀でばっさり。さらには悪口で傷口を広げてきた。こっちは至極真剣大真面目なのに。やっぱり遠野ちゃんは生意気だ。

それでも本当にシリアスな話なのだ。言い返したいのをぐっとこらえて、わたしは遠野ちゃんの目をしっかり見据えた。

「遠野ちゃんは、生きたい？」

「……なにかしら、その質問？」

遠野ちゃんの目が、暗く光る。

「あたしは、もう死んでるわよ？」

たった一言放たれたそれは、決して強い口調ではない。それでもぼそりと呟かれた言葉は低く、威嚇するような呪詛だった。生を見せびらかすな、と、そんな気持ちがこもっていた。

「死んでる、か」

けれどもわたしはそんな威圧に押されはしなかった。ちつつち。怖くなんてないよ。この間にほのちゃんと一緒に食べた季節限定イチゴと焼きマシュマロのスペシャルパフェのようにあまあまでベッタベタな反応だよ、遠野ちゃん。

わたしと新米幽霊の遠野ちゃんとは、年季が違うのだ。

「遠野ちゃん。死んでるってなんだろうね」

真正面から遠野ちゃんの怨念がこもった視線を受け止めて、わたしはそれでも笑顔を崩さない。

「遠野ちゃんは、いまそこにいないの？」

遠野ちゃんは自分を死んでいるといった。

けれども。

死んでいるって何だろう。

生きているって何だろう。

わたしは、いまそこにいる遠野ちゃんをすつと指差す。

「ねえ、遠野ちゃん」

わたしはいま、遠野ちゃんのことを見ている。遠野ちゃんと話している。遠野ちゃんは動いて、わたしと手を握ることだってできる。そんな遠野ちゃんが、死んでいるって言えるのだろうか。

幽霊。

「幽霊は、生きているのかな。それとも死んでいるのかな」

遠野ちゃんの暗い感情に染まった目が、揺らいた。

遠野ちゃんは、幽霊が死んでいると確信していたのだろう。それは、そうなのかもしれない。人は、死んだからこそ幽霊になる。

でも、わたしの答えは違う。

わたしにとって幽霊というものは。

「幽霊はきつと生きているんだよ。死んでいるんじゃないの。死に続けているわけでもない。幽霊は幽霊として生きてるの。少なくとも、わたしにとってそれは間違いないの。ううん。違うかな。間違いないと思いたいし、証明したいの。だから聞いたんだよ。遠野ちゃんは幽霊でも、幽霊のままでも生きたい？」

再度わたしは問いかける。

視てもらえるのは稀で、話せる人はごくわずか。触れる人は極少で、三点揃っているのなんて国宝級の低確率。そんな範囲でも、ううん、もつともつと狭い交流しかできなくても。

例えば自分が幽霊でも。

それでも生きたいの？ とそう訊いた。

わたしは遠野ちゃんの目をそらさずに見つめる。遠野ちゃんは、

それにうるたえて視線をおろした。

「あ、あたしは……」

遠野ちゃんは、迷っていた。答えたくない。意識したくない。幽霊になったいまと幽霊になる前、その差を考えたくない。少し前まで確かに生きていた頃のプライドがある。

それでも。

遠野ちゃんは葛藤の末、下唇を噛んでうつむいて

「……生きたい」

しがみつくように、そう言った。

「そっか」

わたしはぱあつと顔を輝かせた。

もし違うって言ったなら、生きたくないって言うなら被ってあげた。幽霊になるのはランダムだ。自殺をした人も殺された人も事故死の人も病死の人もすべからず幽霊になる可能性があるし、幽霊にならない可能性もある。死ぬ前にどんなに幽霊になりたいと切望したって確実に幽霊になれる方法なんてないし、また幽霊になりたくないって願おうが生きる意思に関係なくひよっこり幽霊になって現れる。

だから、たまに生きたくないって幽霊も現れる。

幽霊になんてなりたくなかったって、もう幽霊でいたくないって訴えられることもある。

遠野ちゃんが、死んじゃった経緯は知らない。きつと話したくないはずだ。わたしから聞く気も、ない。

でも生きたいんだ。

生きたかったんだ。

「ならさ」

両手をとる。わたしが触る遠野ちゃんの手の温度はひんやり冷たく、感触を例えるなら水を圧縮したような手触りだった。断じて人の体温でも感触でもない。

その手触りに、わたしは思う。

視た瞬間、被え。ほのちゃんの言うことは、正しい。道理で、常識で、霊能力者の中では倫理ですらある。

ほのちゃんには教えていけないけれども、被うというのは後天的な習得が可能だ。わたしはちょっと特殊な事情でそれを手にいれたけれども、触れる人はみな被うのを修行して習得する。幽霊を見た瞬間、声を聞いた瞬間、肌で感じた瞬間被って自らの身を守る。

だって、そうしないと危ないから。

生に焦がれる幽霊が、人に危害を加えようとするのは珍しくない。実際わたしは、何度も危ない目にあつた。だから触れる人は自衛の為に幽霊を被う。視れるだけや聞こえるだけの人ですら、幽霊を見つければ被うという人は少なくない。

それが、世のため人のため。間違つたつて幽霊を移動させたり、ましてや自分の部屋に引つ張り込んだりはしない。

それでも、わたしは遠野ちゃんの手をぎゅっと握る。温かくない。その手触りは皮膚の感触ですらない。

幽霊。

遠野ちゃんは、幽霊。

それでも。

「いつしよに暮らそ、遠野ちゃん」

わたしは、笑う。歓迎するように祝福するように、にっこりと。

遠野ちゃんは、わたしの事がうらやましいみたいだった。羨んで

いた。生きていることに嫉妬していた。微かな憎しみも垣間見えた。でも、だからなんだというのだろう。

わたしの笑みに、遠野ちゃんもつられたように笑ってくれた。

「しかたないわね。そこまでいうんなら、一緒に暮らしてあげるわ」
「ありがとう、遠野ちゃん」

あべこべな気がしたけれど、礼を言っただけで受け入れた。

「ねえ遠野ちゃん」

「なに……安藤、だったわよね？」

「えへへ、静香でいいよ。名前で呼んで？　ちなみに遠野ちゃんの名前は？」

わたしは幽霊に対して、視れる話せる触れる被えるの四点揃った霊能力者、安藤静香。

誰よりも彼よりも幽霊に慣れ親しんだわたしだけでも、伝承で伝え聞いていながらも目にした事のない現象がある。

「沙織。遠野沙織よ」

「へえ、素敵な名前。でも遠野ちゃんって呼び続けるね。こっちで慣れちゃった」

「別にいいわよ、どっちでも」

わたしは、幽霊が成仏するところを見たことがない。

幽霊と出会った回数はとても多い。何人も、何十人も幽霊と視線を合わせて声を聞き、語りあって手を握った時間の長さは全国にいる霊能力者のそれを全て合わせたって対抗できる自信がある。誇れるどころかけなされることに違いないけれど、わたしはそれでも胸を張れる。

でも、それでも幽霊が成仏するのを見たことがない。

出会いは様々でも、終わりはみんな一緒だった。たくさん幽霊と出会ってきたはずなのに、過程はどうあれ最後はみんな一緒だった。

みんな、被われて消えた。

成仏するということが、生きることが充実して、この世の中に満足し、心安らかに、思い残すことなく消え去るということならば、きっとそれは最高の形だろう。

けれどもわたしはそれを見たことがない。見たという人に出会ったこともない。そしてこの世に何の未練もなくなるなんてことがあり得ると思えない。

成仏というのは伝承で聞くだけの、一種の伝説だ。

ならば。あくまで幽霊のままに在り続けるのもまた選択肢のひとつだと思う。わたしは、被いたくない。わたしが自分から幽霊を被うことをしてはいけない。だからそちらを選び取る。

幽霊に体はない。体がない限り、幽霊は不変だ。わたしの知る限り、死んだその時から被わない限りはこの世にあり続ける。

幽霊と暮らす。それぐらいがどのくらいの付き合いになるか知らないけれど、いままでだと、長くてせいぜい半年ぐらいしか持たなかったのだけれども。

「えへへー」

ぎゅっと遠野ちゃんに抱きつくと、

「うわっ」

彼女はじたばたと抵抗した。

「ちよっ、このっ、調子にのるな!」

「遠野ちゃんたら、かーわーいーいー」

嫌がる遠野ちゃんに頼ずりをしてじゃれつく。きゃあとかぎゃあとかそんな感じの悲鳴が上がったけれども気にしない。

間違っているのは知っている。

人は愚かとわたしをなじるかもしれない。

それでも。

遠野ちゃんと長い付き合いになれるなら、それでいい。批判も糾弾も受け入れて、わたしはわたしのしたいようにする。

幽霊と、友達になる。

幽霊が人間と変わらないことを、生きていると証明してみせる。

例えばそれが常識から外れていようと、大好きなほのちゃんとのいさかいの種になろうとも、どんな艱難辛苦が降りかかろうとも、他の誰でもないわたしがそれをしなくてはいけないのだ。

その理由は、わたしが幽霊と友達になりたいと思ったのは

「まじで離れるこの変態！ うすうす気づいてたけど、あんたそっちね！ このガチ百合ひつつくんじゃないわよ！」

「は？ そんな趣味ないよ。こうやって抱きついてるのも、遠野ちゃんの微妙なサイズの胸に顔をうずめて頼ずりしてるのも、隙あらばあちこちぺろぺろしてるのもただのスキンシもうにゃあああああ！ いたいよ遠野ちゃん目を突こうとするとかどんな神経してるのっていうか常識疑うよ！？」

「うつさい黙りなさい！ 自衛よ！ 純潔を守るためよ！ あたしの初めてはちゃんと好きな人にあげるのよ！」

「なにその乙女回路！？ 遠野ちゃんそんなキャラなの！？」

まだ、ひ・み・つ。

喜びを身体で表現しましょう（後書き）

ひと区切りつきましたー。

動きがないのは仕様です。最初から最後まで動きなく、説明、説明っ、説明！です。

幕間 愚かな子供（前書き）

ややきつめの描写があります。

人死に的なものがダメな人は、飛ばしてください。読まなくても物語上そんな不都合ないです。

幕間 愚かな子供

「しにたくないしにたくないしにたくない」

彼女の手が、ぐいぐい首を絞めつけてきた。彼女の顔は、のっぺらぼうみたいに真っさらだった。目も口も鼻もついてるのに、ちっとも表情がついてなかった。つるんとしたお面のようで、けれども見ようによっては般若の面のようでもあった。

「しにたくないしにたくないしにたくない」

声にもちっとも抑揚がなくて、それが一層不気味だった。地獄の餓鬼の怨嗟のようだった。ほのちゃんが、やめるおるとか叫び声をあげて彼女を取り押さえようとしていた。けど、視えるだけのほのちゃんの手は虚空を通りすぎるだけだった。

「しにたくないしにたくないしにたくない」

わたしの頭がだんだんぼおつとしてきた。視界がぐにやりと歪んだ。苦しいのも、よくわからなくなってきた。懐かしい感覚だった。わたしはそれを体験して知っていた。ほのちゃんがとうとうぺたんと床に崩れ落ちた。しず、しずううって子供みたいに泣きじゃくり始めた。

「しにたくないしにたくないしにたくない」

彼女の声が、不意に止まった。わたしが彼女の腕を掴むと、とたんに力が弱まった。もともと、力関係は絶対的にわたしのほうが強いから当然のことだった。所詮、彼女はただの幽霊でしかないのだ。

血の巡りがもとに戻って、頭に血液が送り込まれ意識が鮮明になった。

「しず」

ほのちゃんの声。さっきみたいな泣き声じゃない。涙声だけど、ほっとしている。それで、どこか他人ごとだったいまがはつきりと自分のものだと感じられた。うん。わたしは生きている。大丈夫だよって印に、わたしはほのちゃんに力強く頷いてみせる。

「しにたくないしにたくないしにたくない」

わたしが彼女に向き直ると、彼女は後ずさろうとした。でも、がつちりと腕を掴んでいるわたしの手がそれを許さない。許すわけにもいかない。それは、そうと決めたことなのだ。

彼女はびくりと体を震わせ、はつきりとおびえた。

「しにたくないしにたくないしにたくない」

彼女は唱え続ける。死にたくない。それは彼女の何よりの望みで、叶わない願い。彼女は、幽霊である彼女は何よりそれを願って、そして叶えようとしている。

ただ、それは。

「わたしだって」

「しにたくない」

腕を掴む力は微塵も緩めず、そっと彼女の頭に手を置く。

ほのちゃんが、はっと目を見開いた。幽霊の彼女は首を振っておびえた。

今回は、きつとうまくいくと思ったんだけどなあって、わたしはそれだけ思った。

「わたしだって」

「しにたくない」

わたしは知っている。叶えてはいけない願いなんかない。願うことも許されない願いなんてない。死んだ彼女が死にたくないと思うのは当然で、生き返りたい彼女がわたしを殺そうとするのも仕方がないことではあるのだ。

けれども。

「わたしだって」

「しにたくない」

けれども。わたしは幽霊が好きだけれども。幽霊の気持ちはよくわかるけれども。目の前の彼女のことだって大好きで、彼女の気持ちもよくわかるのだけれども。

ただ、それでも。

「わたしだってね。死にたくは、なかつたんだよ？」

「しにたくないしにたくないしにたくなかつたあ！」

だからわたしはこの体を捧げることにはできない。ごめんね。彼女の上げる叫び声に斟酌せず、首にかかっている手を引っぺがす。せめてこれが彼女の救いになりますように。

口の中だけで消え入る身勝手を、そつと呟いた。

そうしてわたしは彼女をこの世から消した。

ほのちゃんは仲が良かった彼女の名残の燐光を呆然と見ていた。わたしは、自分の行いに無言で涙を流していた。

前回拾った幽霊とわたしとほのちゃんとの最後の光景が、それ。

幕間 愚かな子供（後書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。感謝です。

これからも一日一話更新を心がけます。

憂鬱にため息をつきまじよう

ほのちゃんに会えなくなつて、そろそろ一週間になる。

「はあ」

わたしは携帯を片手に、ため息をついた。

ほのちゃんからの連絡はまるでない。それはもう、とんと。一切欠片も。まったく、ない。思ひ出の品でさびしさを紛らわそうにも、ほのちゃんの私物も、服から化粧品まできれいさっぱりなくなっている。

「ふう」

あの後、引越し業者が来て大方の物をさらっていったのだ。もちろんその際にほのちゃんの行き先を聞いたのだが、守秘義務を盾に教えてくれなかった。……しかし、なぜ引越し業者のお兄さんは、まるでストーリーカーをみる目でほのちゃんへの愛を語るわたしのことを遠巻きにしていたのだろう。

「はふう」

ほのちゃんはわたしよりちょっと早く前期試験が終わっている。一応補講とかもあるんだけど、出てないみたいだ。大学の補講は試験に関係ない講義が多いから、出席に関してよほど厳しくない限り出ないのが普通だ。

ほのちゃんがいなくなつてから何度も携帯を駆使してるんだけど、連絡もつかない。ほのちゃんにいくらメールを送ろうが返ってくるのは『届きませんでした』というケータイ会社からの知らせのメ

ール。それがたまること三ヶタ。電話にいたっては留守電どころか『電波の届かないところにく』とお決まりのメッセージだ。絶対につながらないんだ。

これはやっぱり、ほのちゃん、わたしの携帯……ちゃ、着信、拒否、にしているのかなあ……。

「……さっきからため息がうるさいかと思えば、なにいきなり涙目になってるのかしら、あんたは」

「あ、遠野ちゃん」

もうちょっとで涙腺がどばつと決壊しそうになっていたわたしに話しかけてきたのは、こないだから同居しているふよふよの浮遊幽霊、遠野ちゃんだ。不審げな目でわたしを遠巻きにしている。

わたしは慌てて涙をふく。泣きそうになっているところを見られるなんてちょっと恥ずかしいけど、四六時中部屋にいる彼女に対してはプライバシーも何も無い。お互い様だけどね。

「これはね、思い出し泣きだよ」

もしやほのちゃんがわたしの番号を拒絶してるのではという想像をしただけでも悲しくて悲しくて涙がにじんじゃったんだよ。ということも伝えたかったんだけど

「は？」

どうも言葉が足りなかったみたいで、遠野ちゃんがまた訳のわからないことをこのノータリンが、という顔になる。そのくせめんどくさかったのかそれ以上は追及してこなかった。

「はあ」

「ウザいわね……」

わたしは、ため息をもうひとつ追加。遠野ちゃんの文句は聞こえなかったことにする。

ほのちゃんと会えなくなつて一週間ということは、遠野ちゃんがここに来て一週間ということでもある。

日が経つにつれ遠野ちゃんの対応がずさんになってきた気がする。というか、だんだんバカにされている気がする。ううん、より正確にはだんだんバカだと認識されてる気がするんだな。

なんでだろう。理由もないのに人をバカ扱いするのは、良くないと思う。

でもここで文句をつけたら、ほのちゃんと連絡のつかないさみしさを紛らわす八つ当たりだと勘違いされそうだ。

だから当たり障りのない話題を振った。

「ねえ、遠野ちゃん。遠野ちゃんって、着信拒否つてどういう相手にする？」

「んー？ 着信拒否なんてめったにしないけど……そうねえ。ストーカーじみたうざいやつにするかしら。たまにいるのよ。男でも女でも、変な勘違いしたバカが。まあ少なくとも友達には冗談でもないわね。あとあとの関係がほんとにこじれることもあるし」

へえ、そうなんだ……やっぱり、そう、なんだ……。

「それよりも静香。あたしちょっと行きたいところがあるんだけど……って、どうしたのよ、いきなり窓開けて。換気？ あたしは関係ないけど、冷房かけてるぐらいなんだから、外、暑いでしょう？」

確かにこの世界の大半と隔絶されている遠野ちゃんには関係ないけど、七月も後半になるとちょっと暑いなあ。蝉もみんな鳴きは

じめてるしね。湿度も半端じゃないから、冷房効かせてひんやりした室内とは不快指数が大違い。

「ちょっと……逝ってくるの」

「はあ？ 行ってくるってそれでなんで窓を……っておいやめないさいここ四階だあんた浮かべないんだから窓から落ちたら死ぬでしょうが！」

「とーめーなーいーでー」

虚ろな表情と無気力な声で窓枠に足をかけて推定落下秒数一秒弱ぐらいのスカイダイビングに挑戦しようとしたわたしを、遠野ちゃん在必死の形相ではがいじめにしていた。

憂鬱にため息をつきましょう(後書き)

男性だったら心の底からうざい主人公です。いや、いくら女の子でも許容範囲外か……？

健全なケンカをしましょう（前書き）

お気に入りをしていただいた方、評価を入れてくださった方、目を通していただいた方、ありがとうございます。

健全なケンカをしましょう

「千歳に行きたい？」

珍しく遠野ちゃんがしてきた頼み事は、無茶ぶりだった。

「そうよ」

遠野ちゃんが傲岸に頷く。

シヨックから放心状態になっていたわたしも遠野ちゃんのおかげで自分を取り戻して落ちついたのだ。そうしてから、頼まれことというには高圧的な態度で言われたのがそれだったんだけど

「えつと何で？ ていうか千歳ってどこさ？」

「あんたバカ？ そんなことも知らないの？」

え、いやごめん。地理的に千歳って常識なの？ わたし悪くないはずなんだけど、遠野ちゃんの蔑みの視線を受けるとなんか申し訳なくなってきたんだけど。

「石狩支庁の千歳市。札幌の二つ隣の市よ」

「おお」

ポンと手を打つ。

石狩支庁と言われてもぴんとこないが、札幌といわれればそれが北海道にあることぐらいはすぐにわかる。そう考えれば千歳っていう地名もなんとなく聞いたことがある気がする。

「千歳って北海道なんだ！ 観光したいの？ 北海道といえば……カニ！ カニでも食べたいの？ うん、カニはおいしいよね。それとも流氷でも見たかったりして？ うーん、見たことないけどきれいで壮観だろうね！」

「アホかあんたは！ 千歳とカニが関係あるわけないし、流氷が見えるわけないでしょう。そもそもいまは夏だこのポケ女！」

「あつ」

適当に言っているのはバレバレなようで、すぐさまツッコミが入った。

だが叫んでから一転、遠野ちゃんは不安そうな表情をのぞかせた。

「……というか、うすうすここが千歳じゃないとは感じてたから頼んだんだけど、あんたが千歳も知らないってことは、もしかしてここって北海道ですらないの？ 何となく都会っぽいから札幌か小樽辺りだと勝手に思ってたんだけど……」

「うん、幽霊になる場所はランダムだからね。ここは東京」

「東京!?!」

遠野ちゃんが目をむいて叫ぶ。それからさっきまでわたしが飛び出そうとしていた窓に飛びついた。

「うそつ。だって東京タワーが見えないわよ！ スカイツリーもないじゃない!」

「あ、うん……。ここ、中野区だから……」

どうやら景色を見て確認したかったみたいだけど、とんちんかんな言葉にわたしはあいまいに頷くしかなかった。もしかして東京だったらどこでも東京タワーが見えると思ってたのかなあ……。スカ

イツリーが一望できると思ってたのかなあ……。勘違いにもほどがある。

でも、さっきわたしが叫んだ時、遠野ちゃんも同じ気持ちだったのかもしれない。北海道だったらどこでもカニが獲れると思ってるのかっ、みたいなの……。今度、千歳がどこにあるか地図で調べてみよう。

「内地の……しかも東京……？」

まだ呆然とした様子の遠野ちゃんが呟く。内地ってまた耳慣れない……。なんかいちいちカルチャーショックを感じるなあ。

「えっと、それでなんで千歳に行きたいの？」

シヨックを受けているところに悪いけれども、聞かなくては話が進まない。

実のところ、別に聞かなくても理由はわかる、けれども、それでもやっぱり遠野ちゃんの口からはっきり聞かなくちゃね。千歳って、きつと遠野ちゃんの……

「千歳……？」

……。おや？ なんか語尾にはなマークが付く感じに語調が上がったような気がする。窓にとりついてるから表情は見えないけど、遠野ちゃんを取り巻く雰囲気からと変わったような……。気のせい？

「遠野ちゃ……っわっ」

確認するために呼び掛けて思わず飛びのいてしまったのは、振り

返った遠野ちゃんがびつくりするぐらい眼をぎらんぎらんさせていたからだ。

「ふふ、ふふ、ふふふ」

慄くわたしに対して、遠野ちゃんは退かない媚びないこつち見ない。あらぬ方向を見上げて、わたしがたじろぐぐらい不敵で気持ち悪い笑い声を上げている。

「と、遠野ちゃん？ 千歳は？」

頭大丈夫？ と聞かなかつたのはわたしがいきなり人を罵ったりしない常識を持つ人間だからだ。

「はっ、千歳？ なにそれ？ どの田舎よ千歳？ 何が鶴は千年にちなんで千歳よ。ぶちゃっけ長寿の町っていうわけでもないしね。そんな所に行ってなんかいいことあったっけ？ 千歳の自慢なんて水道水に日本名水百選のなんちゃらの名水をひいてるくらいじゃない！ ねえ、そんなもんだろっか！」

「え、いやそのわたしは良く知らないけど……」

いけいけの遠野ちゃんにたじたじと押される。

同意を求められても困る。というか、水道水に名水百選をひいてるなんてすごい。東京の水なんてあれだよ？ 水道水なんて浄水器ないと飲めないなんて言う人もいるくらいアレな水なんだよ？

「それも完備してない！ たいした施設も観光地もあるわけでもない！ ようするに良いとこなんてないのよあんなとこ。それに比べてこの大東京の東京！」

遠野ちゃんは窓をバツクにぱつと両手を広げる。うん、せめて大都会っていつてね。バカっぽいから。

「見よこのビル群！ 遠くの景色を遮るのが木や山じゃなくて高層の建物というこの驚き！ わーわー、たっかい建物多い。ああいうの摩天楼っていうの？ すっごいわぁ！」

「あつちは新宿だからねえ……」

「新宿!？」

「うわぁ……。遠野ちゃんのテンションが、ぱないよ……。ついていけないよ……。」

自分の行動範囲限界をいっばいまで使って窓から身を乗り出す。大はしゃぎの遠野ちゃんに、げんなりため息をついた。

見よも何もここはわたしとほのちゃんの部屋だから見慣れ過ぎて驚きなんかないよ。

そりゃわたしも東京来たばっかの時ははしゃいだけど、ここまでじゃなかった。というか、いまだき東京来ただけでここまでテンションあがる子とかいるんだなあ。

いっそ感心してしまいそうだ。ほのちゃんとか、もっとクールだった。東京ドームを初めて見た感想が冷やかな「なにあのバカでかいテント」という一言だったもの。あの時のほのちゃん、カッコよいつたらなかったなあ。

幸せな思い出に浸っていると、遠野ちゃんが肩を掴んでがたがた揺さぶってきた。

「ねえ静香！ 新宿っていえば……アルタ前！ アルタ前に連れてって！」

「う、え、え、え、遠野ちゃんストップ！」

がしつと遠野ちゃんの腕を掴んで止める。

千歳はどうしたんだろう。ていうか、新宿と聞いてアルタ前が真っ先に思い浮かぶのもどうかと思う。女子高生なら原宿の有名どころに興味に向くのが普通だと思うんだけどなあ。

「遠野ちゃん、目をキラキラさせてるとこ悪いんだけどアルタ前なんか良いことないよ。あそこらへんは汚いし臭いしうるさいし人多いし危ないんだよ」

なにせほのちゃんいわく、あそこは『人波にさらわれて打ち上げられた汚物の集積所』だもの。

「なんていうか、あそこは人を選ぶんだよ。ダメな人は行っても何ひとついいことないの。そして癒しのスポットを挙げれば近くに猫カフェがあるぐらいだよ。そもそも遠野ちゃん、何しに行くつもりなのさ」

あそこは待ち合わせの名所であって、少なくとも見て楽しむ場所じゃない。ショッピングもできない幽霊の遠野ちゃんが行ったってしょうがないのだ。

諭そうとしたけど、遠野ちゃんのがまま加減をわたしは見誤っていた。

「いいの！ 見に行きたいだけだつて！ 東京記念にこの目に焼き付けておきたいだけなんだつて。パリでいう凱旋門みたいなものよ。べつにいまのあたしは幽霊なんだからいいじゃん。そもそも普通の人からは見えないんだから危なくなんてないじゃない！」

なんだろうね、このやる気はどこからくるんだろうね。

「わたしが危ないのっ。あそこ嫌いなんだよ。もうあの辺り行って

ホストの人に話しかけられるのとかイヤなの！ ものすつごいこわいんだからねあれ！ 特に夜中のあの辺りは危なくて近寄れないよ！ 歌舞伎町こわーい！ はんたーい！

「いまは朝よ！ 十時よ！」

「油断はできないんだよ！」

二人して、むむむつと睨みあう。どちらもゆずる気がないのは明白だ。

遠野ちゃんはふわつと浮いて玄関前を陣取った。

「静香が連れ出してくれるまで、ここに立ちふさがってやる！」

「遠野ちゃん、この部屋の出口はひとつじゃないんだからね！」

けれどそれしきでわたしが折れるはずもない。びしっ指差したのは、わたしがさっきまでどこかへ逝こうとしていた窓だ。

「はあ！？ やっぱアホなのあんたは！ 潰れトマトにでも変身する気！？」

「アホじゃないよ！ 人間その気になれば四階から飛び降りても平気だもん！」

「こんつのクソバカが……！ はんつ。そんな言うならやってみろ！ 今度こそ止めてあげないわよ！」

「なに言ってるの！？ そんなのやるわけないでしょ！ 常識で考えなよ遠野ちゃんたらばかなの！？」

前言をあつさり翻すと、ぷつちんと何かが切れる音が聞こえた。

「ざっけんなさつき飛び降りようとしてたバカのどの口がほざくかああああー！」

売り言葉に買い言葉。デッドヒートの末、先に限界がきたのは意外に気が短い遠野ちゃんだ。

ふふん、勝った。

うん。勝った、のは良いんだけど

「あんたがさつきやってたことでしょうかがこの警級バカがあ！ケンカ売ってんだろ、ああ！」

「うわあ……」

あまりの剣幕に、思わず後ずさってしまふ。勝ったのは良いんだけど、怒りのあまりか口調が変わってる。ちんぴらみたいでちょっと怖い。しかも遠野ちゃん、すぐ手が出るからなあ。

吠えた遠野ちゃんに、わたしは却って冷静さを取り戻した。ここは年長のわたしが大人にならないとね。それに、大声出し過ぎて少しご近所さんの耳目が気になってきた。普通の人には、わたしが一人で騒いでいるようにしか聞こえないのだ。

部屋で一人怒鳴ってる。

イコール大迷惑な変人。

わたしは即座に顔の前で両手を合わせた。

「ごめんね遠野ちゃん。わたし、講義あるから行ってくるね。単位はしっかりとらないと。今度、中野ブロードウェイにでも連れて行ってあげるから、アルタ前は勘弁して」

「知らないわよ。どこよブロードウェイって。せめて東京タワーとかなえないの？」

「いや、東京タワーで遊ぶのはお金がかかるんだよ？」

ちなみにあの赤い鉄格子、上にあがるエレベーターに乗るだけでも八百円かかる。

「はあ……まったく役に立たないドアホウめ。大学生のことなんてよくわかんないけど、単位なんて落としちゃいなさよバーカ」

ぷっちんと何かが切れたよ。

「……ふ」

遠野ちゃんたらまったく可愛いなあ……人が下手に出てみればつけあがつちゃってえ……！ こっちにもいろいろと事情があるんだからね！ お財布事情とかお財布事情とかお財布事情とかの！ さすがにぴきつときたわたしはゆらりと遠野ちゃんに近づく。

「ふ、ふ、ふ」

「む、なによ」

「遠野ちゃん、わたしのことちょっとなめすぎ」

ずっと顔を近づけてもちつともたじろがないのは立派だけど、忘れていくのかな。わたしはこれでも霊能力者。スーパーでパーフェクトでビューティフォーな霊感を持った、類稀なる霊力の持ち主なんだからね。

はつきりいって、霊能関係でわたしにできないことなんてないって言ったって過言じゃないんだよ。

わたしはとん、と遠野ちゃんの額を指で突いた。

「あ……」

「おやすみ、遠野ちゃん」

それだけであっさり崩れ落ちた。わたしは宙に浮いた遠野ちゃんをお姫様だっこの要領で抱き上げる。軽い。というかそもそも重さなんてない。それが幽霊というものなのだ。

遠野ちゃんの顔を見る。もちろんケガなんてさせてない。わたしのスーパードパーフェクトでビューティフォーな霊力でちよつと眠らせておいただけだ。

ひよいとのおぞきこんだその寝顔は、まったくもって安らかだった。すやすやと寝息を立てている。

「むづ……かわいいなあ」

不思議、もしくは卑怯だ。遠野ちゃんが仔猫みたいなのがままな目を閉じると、とたんかわいらしさが倍増する。ちよつとなでなでしたくなってきた。

「でも、ほいね」

それでもさっきの言い合いの腹立たしさがいくらか残っていたので、遠野ちゃんはそのまま部屋の真ん中にぱーんと投げた。

健全なケンカをしましょう(後書き)

話はまだまだ動きません！

ところで随時編集してはいますが、文章の細かいところを直しているだけです。

友人と楽しい会話をしましょう(前書き)

新キャラ登場。

友人と楽しい会話をしましょう

「へえ、千歳ってこんなところにあるんだ……」

わたしがいま開いているのは観光用のパンフレットだ。駅で無料配布されていた北海道特集。その中に千歳の案内も載っていた。

二時間目の講義が終了して学生食堂で食べながら千歳という場所について学んでいた。おもに旅費とかの面について。

「ていうかなにが大した施設がないとか言ってるんだらう遠野ちゃん。空港あるじゃん。そうとう立派じゃん。けど、ううん。飛行機代はたっかいなあ、やっぱり……あ、ていうか海に面してないんだ千歳。それじゃあカニとれないよね。流水が見れようはずもないね」

ぶつぶつ呟きながらページをめくる。

北海道って四方が海に囲まれているから水産関係の印象が強かったけど、考えてみればあれだけ広いんだから海に面してない町のほうがずっとおおいに決まってるよね。

そうしてわたしがパンフを見ながら食事を終わると、そのタイミングで話しかけてきた人がいた。

「やつほー、静香。それなんのパンフだ？」

「おやや、あやちゃん」

ほくほく湯気の上がる麻婆豆腐を乗せたトレイを持って話しかけてきたのは、去年語学で同じクラスだったあやちゃんだ。きれいに染まった髪が素敵で、明るくて楽しい子でたまにうつつういしい子だ。じつはあやちゃん、都内のある神社の娘なのだけれども、そこから

へんのらしさというものをまるで感じさせないあかぬけた現代っ子である。

「北海道旅行のパンフだよー」

「北海道？へえ、いいな。わかってるね、静香は。私も旅行に行くとしたら北海道がいいと思ってたんだ。海外はそろそろ新鮮味がなくなってるさ」

うんうんと頷きながらあやちゃんが向かいの席に着く。

わたしはちよつと苦笑した。快活に言うのがあやちゃんらしい。

「でも静香。あんた乃ノとケンカ中だろ。なんで旅行計画なんて立ててんの？」

「え？」

乃ノというのは、ほのちゃんの名前だ。

あやちゃんとほのちゃんも友達なのである。だからわたしとほのちゃんがとつても仲良しっ、なのはもちろん知っているんだけども

「なんでケンカ中ということまであやちゃんをご存知で？」

首を傾げる。わたし、ほのちゃんとケンカしたなんて思い出したくもないから遠野ちゃん以外にはそのこと話してないんだけど。

「んー？まあなんていうか乃ノも子供みたいなところがあるからさ」

そんな答えではぐらかされた。

もともと陽気な性格のあやちゃんだけど、どうもわたしとほのちゃんのケンカというネタが楽しいらしく、にこにこ表情が明るい。

あいかわらず感心するぐらい、いい性格している。

「うーん……？」

でも口ぶりから察するに、ほのちゃんから直接聞いたみたいだ。ということば。

「あやちゃん、ほのちゃんがいまどこにいるか知ってるの!？」

「あいかわらず乃ノ関係だと神がかって察しいいよな……うん、ご明察。ちなみにな。嚴重に口止めされてんだ。あと、乃ノがいるのは私んちの神社じゃないから」

がばつと身を乗り出すも、先を制される。

「あつあつ」

ほのちゃんの口止めは、それはそれは強力だ。ほのちゃんがあの冷やかな美貌と絶対零度の声で「言うな」と脅して話したら、それは決して広まらない。口止めされた人間の口は凍りついたように閉ざされる。口が水素ガスでできているあやちゃんですら例外ではない。

「うっ……そろそろほのちゃんに会えないとさすがに我慢の限界が……。こうなればほのちゃんの意向を無視してでも……。わたしの力をもってすれば……。あれをああしてちょちょいとすればどうでも……」

「あっはっは、なに計画してるか知らないけどやめとけって」

豪快に笑ってあやちゃんが、うなだれていたわたしの頭をばしやし叩く。

「いたい、いたいよあやちゃんっ」

「いやいや、このバカな頭は叩かなくちゃなおらないからさ」

ひどいつ。からつとした口調で残酷なことを言つてのける。絶対わざとだ。なんでわたしの周りにはこんな口の悪い子ばかりなんだろう。

けど、うん……冷静になってみると、いま思いついたことをやっちゃったら辺りが大騒ぎになってほのちゃんの怒りが吹雪く気がするよ。

「ていうか静香は相変わらず気色悪いくらい乃ノが好きだな」

「うん、ほのちゃんがわたしの事を思ってくれているぐらい、わたしはほのちゃんが大好きだよ」

なにせほのちゃんはわたしの生きるための道しるべなのだ。光なのだ。希望なのだ。

「へえ」

むんと胸を張るわたしに、あやちゃんがるほど笑顔で頷く。

「意外とたいしたことないんだ」

「はうっ」

あやちゃん言葉は、思いのほか胸の深いところにくさつと刺さった。

「く、くそっ、なんてことをっ」

わたしは涙目であやちゃんを睨む。

「あやちゃんっ。わたしがほのちゃんを思う心は小宇宙より大き
いんだからね！」

「いや、なんだよ小宇宙って。おおきいんだか小さいんだかよくわ
からない例えにするなよ」

「ふん、なにさっ。あやちゃんなんて、あやちゃんなんて友達より
男を選ぶ薄情者じゃんかっ。そんなあやちゃんにわたしとほのちや
んの友情が理解できるもんか！ わたしたちのことなんてほっとい
て彼氏と沖繩にでも行っちゃえばいいんだー！」

「そう？ じゃあお勧め通り今度の夏休みに行ってくるわ。いやあ、
やっぱ彼氏と行くんなら海だな」

「うわああああん、あやちゃんなんて彼氏とわかれちゃえええ！」

「あっはは、相変わらずからかうとおもしろいな、静香は。北海道云
々なんて嘘なのに。ま、あんたもいい加減彼氏ぐらいつくれよバカ
静香ー」

「あやちゃんなんて沖繩にでも行って帰って来なくていいよバカあ
あああ！」

人の悪いにやにや笑いを浮かべて余計な注進いれてくるあやちゃ
んなんか置き去りにして、わたしは次の講義に向かって駆け出した

友人と楽しい会話をしましょう(後書き)

名前のあるキャラはこれで打ち止めです。

そうやって手を合わせるのは偉い。礼儀と行儀は違うという見本だ。

合わせていた手をおろし、あやちゃんはわたしと視線を合わせた。

「で、静香さ。合コン行かない？」

「行かない。行くわけないじゃん」

コンマゼロ秒でわたしは断る。

だって考えるまでもない。

「ほのちゃんのいないお酒の席なんて、なにが楽しいの」

「……静香。思考の方向が、ちよっと気色悪いんだけど」

あやちゃんが、こいつばつちいと言わんばかりの表情になる。夜道に歩いている時に不運にもゴキブリが足元を通りすぎた時のような感じた。腕をさすってるから、鳥肌も立っているのかもしれない。すごい失礼だよ、それ。

「別に気色悪くないよう。わたしはほのちゃんラヴっ、なだけっ」

「テラキシヨす……！」

すごい失礼だよっ、それ！

「まったく静香は」

憤然と頬をふくらますわたしの抗議に、あやちゃんはむしろ「ダメだこいつ」と言わんばかりに嘆息した。

「ほのちゃんほのちゃんほのちゃんって……なあ静香。お前が安くない消耗品の化粧品を買って、毎朝それなりの時間をかけて鏡と向

き合っているのは何のためだ？ わざわざ毎月ファッション誌を買っておしゃべりするのは誰のためだ？ その他諸々の美容に費やしている時間と労力と金は外見をよく見せるため、ひいては男を釣るための投資でしようがよ！」

「違うよほのちゃんのためだよ！」

「さすがに嘘だと信じてるから！」

む、ほんとなのに。クールビューティーの頂点たる美少女……いや、ほのちゃんも二十歳だしそろそろ美女といふべきかな。とにかくそのほのちゃんと並んでも見劣りしないように、日夜努力を重ねてるんだよ。

しかし待てよ、とわたしは腕を組んで考える。あやちゃんはほのちゃんの居所を知っていたんだ。ならば

「まあでも、ほのちゃんをひっぱって来てくれるっていうんなら行ってあげてもいいけどね」

「はんっ。人数合わせがさえざるなカス」

おや手厳しい。自分の役に立たないと判断するや否やまよわず手のひら返して切り捨てるその態度。もう尊敬に値するよ、あやちゃん。

わたしは自然にできた握りこぶしを眺めながらあやちゃんに聞く。

「あやちゃん。そろそろあやちゃんのこと殴っていいかな」

「ダメに決まってるんだろバーカ。それにそもそも飲み席に乃ノみたいなサービス精神のないやつ呼べ

るか。盛り下がる。ほら、静香。もう用ないからとつとと講義にいきな。時間ないぞ」

しかも身勝手だ。

天上天下を唱えた仏陀だってここまで不遜ではなかっただろう。これ見よがしに腕時計を見ながらしつしと手を振るあやちゃんをジト目で睨む。

「それじゃあ行ってくるけど……あやちゃん彼氏いるんだから合コンとかやめようよ。怒られるよ?」

「私は楽しんで飲みたいだけさね。それを結婚するわけでもないのに、たかが彼氏に管理されるなんてまっぴらごめんだ。私らまだ学生だぜ? 合コンぐらいで目くじら立てる奴とは付き合わないからだいじょーぶ」

んー、それはちょっと理解できない。もしほのちゃんがわたしに黙ってひとりで男の子がたくさんいる飲み会に行ったら……わたし、泣くよ? 人目を気にせず脇目もふらず何に憚ることもせず、大泣きするよ?」

「……う。何か怖気がする……」

あやちゃんが両腕で体を抱いてぶるりと震える。わたしはちょっと苦笑した。怖気って……まったくあやちゃんたら。こういう時は寒気っていうものでしょう。

「どうしたの? 風邪?」

「いやもつと……なんというか無自覚でありながらも迷惑極まりない精神的攻撃? にさらされているような奇妙な感覚が……いや違うな。これは気がついたら部屋の中にゴキブリがいた時の……!」

「? とりあえず、お大事にね」

わけのわからないことをぶつぶつ呟きはじめてたあやちゃんを置いて、わたしは今度こそ講義に出かけようとして

「あ、ちょっと待った」

再度あやちゃんに引き留められた。

「……なにかな？」

いい加減、本気で遅れそうなんだけど。

ジト目で振り返るけれど、あやちゃんにはちつとも効いた様子はない。こちらの都合も感情もお構いなしな平然とした様子で聞いてくる。

「そっといえば、また珍しいのを飼い始めたんだって？」

「……同居といってくれないかな、あやちゃん？」

眉をしかめて訂正する。周りに人がいる学食だから単語を選んだんだろうけど、飼うっていう表現は、人権無視もいいところだよ。法学部生として、相応しくないにもほどがある。

でもその話題だったら付き合わないわけにはいかない。わたしは深々とため息をついて、あやちゃんの正面に座りなおす。

「けど、やっぱり知ってたんだ」

「そりゃねえ」

あやちゃんは言外の意図を察して頷く。当然といえば当然だ。あやちゃんは、家出をしたほのちゃんの行方を知っていた。ならばほのちゃんが家を出た経緯を知っていたって不思議ではない。

あやちゃんも、幽霊と関われる人間なのだ。

視れる、聞こえる才能を生まれながらに持つ、神社の娘。熟練した霊能力の業を身につけた彼女は、わたしと違って幽霊との共存な

んて露ほども望んでいない。あやちゃんは幽霊を見たら被うつ、正しい姿の霊能力者だ。

だから、わたしとあやちゃんはその価値観だけをぶつけ合えば敵対関係にあってもおかしくはない。
でも

「首つつこんで来るきはないんだよね？」

確認するために聞く。わざわざうちに乗り込んで、遠野ちゃんを除霊したりはしないんだねと、その確約が欲しかった。

正直、彼女を敵に回すのは厳しい。

だけれども、おそらくあやちゃんは何もしないだろうということ
は分かっていた。あやちゃんは、前回だってなにも言わなかったの
だ。わたしとほのちゃんが幽霊と一緒に住んでいることを知って
いても「ふうん」と一回頷いただけだった。

「別に。わざわざそんなことしないよ。静香はこりないな、とは思
うけどね」

答えは案の定だが、やたら興味なさそうに、つまらなさそうに言
うその態度がちょっと気になった。

あやちゃんにしては不自然なほど素っ気ない反応だ。ある意味素
直すぎるとも言える。

「……………どしたの？」

「別に」

「……………ほんと、どしたの？ 変だよ？」

「うっさいアホ。死ね」

わたしのいぶかしげな視線に、あやちゃんが顔をしかめて無意味

な暴言をぶつけてきた。

「お望みの通り、関わる気はないよ。まあ、むしろ静香がなんでそんなに関わるうとするのか、その理由はちよつと興味があるが……それを探ろうとするほど無神経でもないしね」

詮索したのが気に入らなかつたのか、あやちゃんが珍しく、そしておそらくはわざと無神経にわたしの傷をえぐってきた。

わたしがぎゅつと机の下で手のひらを握つたのに、あやちゃんは気がついたかどうか。Sつ気たつぷりの彼女は、嬉しそうに意地悪い笑みを浮かべた。

「それに何より、私が関わる理由がないんだよ」

こういうとき、彼女は容赦ない。人を傷つけるのをためらわないこの要素は、見習うべきかどうか悩ましいところだ。

「だって、静香は失敗した時、ちゃんと責任もって始末をつけられるだろ？ 遅かれ早かれ除霊するんだつたら、私が出張る必要もないよ」

前回の幽霊との顛末を知っている彼女は、獰猛に笑ってそう言った。

同居人と現実的な会話をしましょう

大学の授業を終え、特に寄り道もせず帰宅する。幽霊の遠野ちゃんも、何も出来ることがない。テレビは付けっぱなしにしておいたけれど、さぞ暇を持て余していることだろう。早く帰って相手をしてあげなくては。

「ただいまー。遠野ちゃん、ひまして、た……」

そうしてマンションの扉を開けたら、ずんと気迫あふれる遠野ちゃんも不動明王の如く立ちふさがっていた。

「しいーずうーかぁー？」

「……」

ぱたん。

わたしは無言で扉を閉めた。そのまま鍵を差してがちゃりと回す。

「あ、ちょっと待てこら何で閉めた。開けなさいよアホ！ カス！」

施錠は外出の基本だから、すっかりしないとね。遠野ちゃん、どうせ部屋から出られないんだけど、こっちのほうも心理的にも安心だし。

さーてと。わたしは頭の中で今後のプランを組み立てる。大学の講義は当然終わっている。とりあえず、このままどっか行こう。図書館かそこらで時間を潰して、泊まれるところは……お金もないし、ちょっと危ないけどカラオケか漫画喫茶かな。あやちゃんちは神社だから乗り込むのは無理だけど、他の友達の家にお泊まりするのも

いいよね、うん。

……遠野ちゃん、どのくらいの間あの体勢で待っていたんだろうなあ。

「ちよ、マジでどっか行く気？ くつそ、人が出れないと思ってえつ。おい、こおんのクソアマあ！ 逃げる気が臆病もん！ こつちは朝から話したいことがあったんだよチキン！ それを無視しやがって！ 煮立った油に放りこまれてから揚げにされてえのかあ！ てめえはケンタッキーの化身かこのエセ白人！ カーネル・サンダーズに変身するのかあ！？」

扉の向こう側から口調どころか人格変わっちゃったみたいの意味不明の怒声が聞こえるけど、わたしマクドナルド派だし、どうせ遠野ちゃんの声はご近所には聞こえないからいいや、ほつといて。近所迷惑にもならない。

わたしがそう判断して踵を百八十度返し

「クソチキンが！ そんなんだから同居人にも逃げられるんだよ！」「逃げられてないもん！」

さらにプラス百八十度踵を返す。

結果的にくりりと三百六十度回転したわたしは、鍵を開けて扉を開けて遠心力の残る勢いそのまま部屋に入った。

「なんてことをいうの遠野ちゃん！ アルプスの山々に咲くエーデルワイスのように可憐で気高いほのちゃんが逃げるなんて姑息で卑怯なマネするわけないでしょう！」

扉を開けてすぐのところにはいた遠野ちゃんの一步詰めよる。それに気圧されたのか、遠野ちゃんは浮かんだまますると後ろに下

がった。

「あいつかわらずキツモいわね……！ ふんつ。じゃあ愛想を尽かされたと言ひ換えてやるわよ！」

「そんなこともないもん！ ほのちゃんとわたしの間にある愛は日本の国家予算どころか日本国民が負担している国債の総合計よりも大きく膨れ上がってるんだからね！ 無限大で無尽蔵だもん。そのうち日本列島ぐらいじゃ支えきれなくなるんだから！ 病める時も健やかなる時も、死が二人を分けてもなおこの愛が尽きるわけがないんだからね！」

「どーだか！ あたしの見る限り随分一方的に見えるけど？ てか、その主張、なんか日本の将来が不安になるからやめなさいよ！」
「なにおう！」

条件反射で鍵を閉めチェーンロックをかけて、わたしは後退する
遠野ちゃんを追って詰め寄る。女の子の二人暮しになってから、施錠には人一倍気を使っているのだ。

つて、あれ？

わたしは、はたと足を止めた。気がつけばわたしは靴を脱いで部屋の中に入っていた。

いつの間に。条件反射のなせる技だ。

「ふっ」

遠野ちゃんが勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

ふむ。これは……もしか、誘い込まれた？

「バカだバカだとは思っていたけれども、こんな簡単にひっかかるとわね！ なんて単純な脳みそと行動パターン。きつとシワがないつんつるてんなのね！」

「な、なんたる頭脳プレイ！」

しかたない。はめられたのならば潔く諦めて部屋に入ろう。

「いや、頭脳プレイとか恥ずかしいから。あんたがアホなだけだから」

「冗談だよ。それにアホじゃないよう」

ほのちゃん以外にアホと言われても納得できない。つんつるてんの意味も正しく理解してない遠野ちゃんに言われたらなおさらだ。

それより大声を上げたせいでちよっとのどが渴いた。コップに水道水を注いでのどをうるおす。

遠野ちゃんのまえでは彼女の生存欲求を刺激しないように配慮している。彼女には食欲もないけれども、食べ物を楽しみたいという欲求はあるのだ。

その一環でこの部屋の中ではできるだけ飲食物をとらないようにしているんだけど、いまはいいや。

「けど、ほのちゃん本当にどこにいるんだろう」

「脈絡がない上、あんたそればかりよね……」

遠野ちゃんが心底呆れたというように息をつく。そんなの仕方ない。わたしを構成する成分の半分はほのちゃんに対する思いでできているんだから、どうしたって話題が偏ってしまう。

「そういえば聞いていなかったけど、その『ほのちゃん』ってどんな奴なの？」

「うーん」

わたしは二杯目の水を注ぎながら、ちよっと宙を見つめた。万の

言葉を尽くし、千の修辞で飾ったところでほのちゃんのすばらしさを言い表せるとは思えないけど、しいていえば

「すつごく美人で可愛くて、綺麗で世界で一番素敵な子」

「へえ、そんなかわいいんだ」

「うん」

「通りすがっただけで目を奪われちゃうぐらい、男なんて一目でころっとおとされるぐらい？」

「うん！」

「ふうん、じゃあ……」

「うん？」

わたしはコップを傾けて水を口に入れつつ、意趣返しとばかりに含み笑いをしている遠野ちゃんのを言葉を待った。

「どっかそこらで適当な男でもひつつかまえて、そいつん家にも転がりこんでいるんじゃないの？」

「ぶばふわあ！」

わたしの口から遠野ちゃんに向かって水が盛大に噴射された。

「……なにするのよこのドアホウ」

通り抜けたとはいえ水をかけられたのが気に入らないのか、無然とした様子の遠野ちゃん。

しかしわたしはそれどころではない。

「とどほとつとつげほづほぐふうほちゃちゃがおるつとつー？」

「むせてんの？ まあいいわ。早く謝罪しなさい土下座しなさいこのアホ」

「ただあだだからほっほのほっちんおおとと!?!」
「……静香? 日本語しゃべりなさいよ。はい、いち、に、さん、
せーの」

「そんななあなおそわけつがあるはああずががないからろ!」
「……………安藤静香? いい加減になさいよ。実はむせてないでし
よっ?」

「わたたしいをおおいてれほっほっばおついていくわけがあ!」
「……………」

「でもっつほのうちやああんがだまああさされてるんじゃ!」

「静香のばーか」

「うるさいよ遠野ちゃん!」

いまのなに!? 脈絡なく悪口言われたよ!?

「ちよつと水を口から噴射されたからってなに!? 実害ないんだ
からどうでもいいでしょう!」

「いいわけないでしょう! あんたが吐きだしたのが体を通り抜け
たかと思うと気分悪いのよ!」

「そんなことより!」

「そんなことだとう!?!」

ようやく立て直したわたしは、遠野ちゃんにかみつかんばかりの
勢いでまくしたてる。

「ほのちゃんがおおおとこのこのようだなんて! わたしにほっ
ぼつとおいておおおとこなんて! そんなわけがあるっははずがな
くなかるうんだからね!」

「ああ、まだ落ちついてなかったのね。静香。落ちつきなさい。日
本語が正しいようで、なにひとつ正しくないわ」

「なに落ち着きをはらってるの遠野ちゃん!?! 日本語の文法なん

て！ 意味が伝われば！ どうでもいいの！ そんなことより！
ほのちゃんが！ わたしをほっばいて！ 彼氏をつくったりなんて
！ しないんだから！ ということはようするに！ 悪い男にだま
されて！ 歌舞伎町であんなこんなで！ それでわたし達に助けを
求めて！」

「はい落ちつきましようねー。息を吸ってー。吐いてー。はい、い
ち、に、さん、はい！」

殴られた。

いちにのさんはいで殴られた。

「……遠野ちゃん、なんで殴ったの？ 鼻って急所だから、いたい
んだよ？」

「いや、テレビにガタがきたらとりあえず叩くわよね？」

ずきずき痛む鼻の頭を押さえるわたしに対し、遠野ちゃんは涼し
い顔だ。

年上に対して、何て態度だ。わたしは目を三角にして尖らせる。

「薄型テレビ世代がなにを言ってるのかな？」

「あたしが子供の頃はまだ箱型だったけど……うん、ごめん。あま
りにもキモかったもんだから」

「うん、そうやって最初から素直に謝ってれば……あれ？」

おかしいな。謝られてるのに罵られている。というか、あやちゃ
んと同じようなことを言われた気がする。なぜだろう。誰もかれも、
どうしてわたしをそんな不適切に評するんだろう。

「それより静香。今日の朝の事なんだけど」

「遠野ちゃん。ほのちゃんの話題を『それより』なんて言っちゃダ

メだよ」

「だまりなさいキモ星人。人の話聞け」

何度もいうけど、わたしキモくない。

「んん？ まあ聞くけど……朝の事って、まだ怒ってるの？ それとキモ星人ってなにさ」

「違うわ。別にもう怒ってないわよ。そしてあんたがキモいのが悪い」

「わたしキモくないよう。それと、アルタ前も嫌だよ？」

「そつちでもないわよ。それといい加減認めなさいよ。じゃなきやその変質的なキモ病は治せないわよ？」

「じゃあ……」

いい加減しつこいなあと思いながらも遠野ちゃんの要望を察する。というか、違うといいなと思ってわざと後回しにしていたのだ。

「千歳のほう？」

「そつよ」

あ、頷いちゃった。

「遠野ちゃん、あの、言いくいんだけど……」

「なに。大学はそろそろ休みになるはずよね？ 時間がないなんて言い訳聞きたくないわよ」

反論してみる、とばかりに遠野ちゃんが睨んでくる。

うーん。

確かに遠野ちゃんの言う通りではある。わたし安藤静香は暇人の代名詞と言ってもいい文系の大学生だ。その気になれば時間なんて

いくらでも都合がつくんだけど、人間にはもつと必要不可欠なものがあるのだ。

気まずくなるから言いづらけれど、言わなきゃいけないよね。

「ごめん……リアルに、お金が無いの」

「へ」

遠野ちゃんが目点になる。

遠野ちゃん、多分一人暮らしとかしたことないんだろうな。わたしは遠野ちゃんから目を反らし、ぽつりぽつりと事情を話す。

「えっとね……いつもはほのちゃんと家賃を半分こしてるんだけど……。今回ほのちゃんが出ていっちゃって……。今月分の家賃、わたしがひとりで負担したの。予定の倍の出費だったから……。いま貯金がすつからかんで……。だから旅行は……。ましてや北海道は、ちよつと……」

実のところ、今月は水道を止められるんじゃないかと恐々としたぐらいだったのだ。毎日テレビつけっぱだから、地味に電気代も上がってたし。食費も大分削った。おかげで図らずともダイエットを成しえたけどね！

「あ、でも一カ月待って？ そうすれば何とか旅費稼げると思うから！」

ちょうど夏休みだし、頑張れば一カ月で十五万は稼げる。大学から奨学金ももらってるし、実家からの仕送りも含めれば、生活費をさっぴいても何とかなるはずだ。遠野ちゃんと一緒にいる時間は減っちゃうけれども、そこは目をつぶってもらおう。

そう思ったのだけけれど

「……いいわよ」

遠野ちゃんは、ふいと顔をそむけた。

言葉面だけでは判断しにくいけれども、その台詞には肯定ではなく否定の意味がこもっていた。

「え、遠野ちゃん？」

「やっぱりいって言ってるのよ。別に、そんなに行きたいわけじゃなかったし。はんつ。そうよ。千歳なんて別にいきたくないわよ。

どこの田舎さ千歳！」

「でも、遠野ちゃん……」

「だーかーらー、別にいいって言ってるのよ！」

顔をそむけたまま、遠野ちゃんは強引にわたしの言葉を断ち切る。それから一転、くるりとこちらに顔を向ける。

「それよりさ！」

笑顔を向けて、言葉を弾ませます。

「アルタ前いこー！」

その態度はいままでにないくらい明るく、どこまでもバレバレのカラ元気だった。それに、わたしは少しだけ目を細める。

遠野ちゃん。

そんなに、強がらなくてもいいのに。

「ほら！ こっからアルタ前なら歩いて行けるからお金もかかんないでしょ。さ、そうと決まれば明日さっそく行くわよアルタ前！」

明るい口調に奔放な振る舞い。そういった無遠慮ともとまれるわたしに対する態度は、けれどももきつとわたしの負担になりたくないという遠野ちゃんなりの気遣いなのだろう。

けれども、遠野ちゃんは勘違いをしている。気を使ってるようで、それは方向性が違っている。だから、はっきり言っただけよう。残酷でも、言わなくてはいけないことはある。いまがそれだ。遠野ちゃんの思い違いを正してやらなくてはならない。

わたしは薄く微笑んで、答える。

「いやだから、アルタ前は行かないって言ってるじゃん」
「空気読めこのアホウ！」

遠野ちゃんの突っ込みチョップがわたしの頭に炸裂した。

同居人と現実的な会話をしましょう（後書き）

ふた区切りめ

宣言通り進行は最後までゆっくりです

幕間 触れる子供

わたしは昔よく転ぶ子供だった。

なにもないところでけつまづき、誰もいないのに何かに背中を押されてバランスを崩し、人が自然に通りすぎるところで何かにつかつた。わたしはそれがなにだか知らなかった。けれども転ぶたびにどんくさいとからかわれるのが嫌で、悔しくて惨めになった。見えないそれは嫌な障害物だった。わたしの人生に立ちふさがる邪魔ものに見えた。目に映らないそれを、わたしが大嫌いになったのは自然の流れだと思う。

けれども、たったの一人だけそれを笑わない女の子がいた。

それ、ゆーれいよ。

一人だけ笑わなかった女の子は、わたしのぶつかったものをそう評した。

わたしはそれまでそれが何か知らなかったから、幽霊だなんて聞かされてびっくりした。けれども彼女は当然のようにそういった。

みえないの？ ……ふしぎ。それでもさわれるんだ。

私はさわれないのに。彼女はそう言って微かに笑った。

私はみえる、あなたはさわれる。そのふたつを合わせれば、ゆーれいと友達になれるかもね。

彼女、帆村乃ノが手を差し伸べて提案したその瞬間。

きつと、それが全ての始まりだった。

幕間 触れる子供（後書き）

……いや、これはさすがに短いですね。

友達らしきものを迎えましょう

大学の夏休みは長い。高校の夏休みは一カ月。社会人の夏季休暇は、長くてせいぜい一週間。その間にいる大学生はというと、なんとビックリ二か月もある。

けれどもその半分の一カ月が過ぎてても、わたしの脳内にほのちゃんの新規情報が更新されることはなかった。

ほのちゃんは相変わらず戻ってこず、わたしは遠野ちゃんと仲良く口ゲンカしたり、日雇いのバイトをやたらめったら入れてほのちゃんがいない淋しさを紛らさそうとしたり、ゼミの研究にいつになく打ち込んだり、ほのちゃん成分の不足から発狂しそうになるも遠野ちゃんに叩かれて正気に戻ったり、あやちゃんが彼氏とけんか別れしたらしいというのを風の噂で耳にはさんでざまみろと思ったり、そんな日々が過ぎ去っていった。

そんなある日、わが家に訪問所が訪れた。

十 十 十

ピンポンとドアのチャイムが来客を知らせた。

「へえ……」

それに真っ先に反応したのは遠野ちゃんだった。

「意外。この家ってチャイム鳴るのね。新発見のびっくり不可思議
よ」

「……あのね、遠野ちゃん」

わたしはぴくぴくつとこめかみをひきつらした。

遠野ちゃんという言葉はいちいち否定から始まる。揚げ足取りなんて序の口、今回もピンポンとチャイムが鳴っただけだというのに訳のわからない難癖をつけてきた。

「いまだきチャイムがついてないマンションがあるっても？」

「いやだってあんた友達いないじゃない」

すごく失礼な勘違いを断言された。

「それなのに家のチャイムが鳴るなんて、これは……宅配便？ セールス？ コソ泥？ 強盗？ 殺人犯の出現？ それとも呪い？ 怪談？ 心霊現象？ 魑魅魍魎の百鬼夜行？」

「なに不吉なこと言ってるのかな。てか、わたしにだって友達ぐらいいるよ！ なによりもまず、ほのちゃんという大親友が！ その他にも！」

「なによ……あたしに悪魔の証明を吹っ掛けないでよ。そういうの無茶ぶりって言うのよ？」

「吹っ掛けてないからね！？」

悪魔の証明。ようするに、存在の証明できないモノは逆説的に不在も証明できないという矛盾を表す言葉だ。どこまでわたしに友達をいないことにしたいのだ、この子は。

「あのねえ、遠野ちゃん」

まったく、とわたしは腕を組んだ。

遠野ちゃんはわたしに対して何だかいらぬ勘違いをしているようだ。少しお説教が必要だろう。

「遠野ちゃんはいつもいつもことあるごとにわたしの人間性に多大なる問題があるようなことを言うんだから。特にわたしがほのちゃんへの愛を語る時にはかのG様が出現した時のような顔になるのはいったいなんでさ。今回だってドアのチャイムが鳴っただけで友達がいないなんて言いがかりをつけてきて。わたしには、世界一素晴らしい親友であるほのちゃんという存在がいるんだからね。友達といえばほのちゃん、ほのちゃんといえば友達というぐらいにわたしにとってほのちゃんは友達であってその友情はかけがえなく確固たるもので……おや？」

くどくどと説法をたれる途中で、わたしはたと気がついた。

ほのちゃん「友達」インターホンを鳴らす。

頭の中ではちっとそんな等式が出来上がる。

「あれ待てよそうとなればもしやこのチャイムを鳴らしてるのはほのちゃん!？」

「ぜってーねえわ。ほのちゃんとやらのはよく知らないけど、それは絶対ないわよ」

ジト目になってなぜか断言する遠野ちゃんはほっぴいて、わたしはインターホんに飛び付いた。

「もしもし! もしかしてほ」

『やつほー、静香』

わたしの呼び掛けへの応答。それはインターホン越しでもわかるその明るくて緊張感の欠片もない気の抜けた声で、やたらとフランクな態度だった。そう。ほのちゃんの正反対を地で体現している性格、といえばわかりやすいだろ。

間違いなくあやちゃんだった。

「……なあんだあ」
『なんだとはなんだ！ 友達来たんだからさっさと開ける！』

友達らしきものを迎えましょう(後書き)

ようやく折り返しの半分経過！。なのに主人公はなんのアクションも起こしていません。

友人と友人を会わせましょう

「おっす、しーず」

「そうだよね冷静になってみればほのちゃん解錠の番号知ってるんだからわざわざチャイム鳴らすわけないよねほのちゃんの訳がないんだよねううほのちゃんどこいつちゃったのさほんとに淋しいよう」

「おーい、どうした静香。まるでキシヨい成分が集められて結晶化したかのような変態になってんぞー？」

改めて挨拶をして来たあやちゃんが、入ってくるなりなんかやたらと失礼なことを言った。

「激しく同意だわ。一体全体、何をどうしたらここまで純粹にキモくなれるんだか見当もつかないわよね」

しかも遠野ちゃんが同調しちゃった。

遠野ちゃんの声が普通の人に聞こえない。それは彼女だって承知のはずだ。だから遠野ちゃんにしてみれば、それはひとりごとのつもりだったのだろう。

だがその台詞に、あやちゃんは反応した。

「あ、おたくもそう思う？ ええっと遠野だったっけ？ 私、千野綾瀬。よろしくさん」

「うえっ？」

あやちゃんに話しかけられた遠野ちゃんがうろたえる。聞こえないと思っていた声を聞かれ、話しかけられないと思っていた人間に話しかけられたのだから当然の反応といえる。

「あははっ、私、神社の娘だから視えるし聞こえるんだ。残念ながらこの変態と違って、触れないけど。おたくがここにいるっていうのは、乃ノから聞いてたよ」

「え、神社……？ それならなんとなく納得できるような気が……でも乃ノって誰……？」

遠野ちゃんの反応にあやちゃんは愉快そうに笑っていた。どうやら遠野ちゃん存在はほのちゃんから聞いたらしいけど……会話の中に明らかに遠野ちゃんではわからない固有名詞をポンポン出してる。あやちゃんはそうやって人を困らせるのが好きな困った子なのだ。

でも、それを足がかりにしてちゃんとコミュニケーションをとる。

「乃ノっていうのは、ほら、『ほのちゃん』のことだよ。乃ノの本名は聞いてない？ まあ、静香の奴はほのちゃんとか呼ばないからな」

戸惑う遠野ちゃんにマシンガントークをぶつけていく。最初はあたふたしていた遠野ちゃんも、徐々に受け答えが滑らかになっていった。

「……」

このふたりが仲良くなっていくとか、嫌な予感しかしないよ。

「いいんだよ遠野ちゃん。全然らしくないって突っ込んで。この茶髪のエセ巫女がつて罵っていいんだからね」

「うっさいな静香は」

「そうよ、うるさいのよ静香は」

息ぴったり。とりあえず阻もうと会話に割り込んでみたら、あっさり撃墜された。

すごい意気投合ぶりだ。ちっとも勝てる気がしない。いまでも顔を見合わせて「グッジョブ！」とか親指を立てあっている。

「てか、あやちゃん何しに来たのさ……」

そう呟くが、虚しいぐらい無駄な問いかけだった。

「でさー、そんときの静香ったらな」

「あはは、マジでバカなのね！」

わたしのもつともな疑問は、二人の楽しげな会話に入る込むことなく打ち消された。

自分の弱点を把握しましょう

自分の家だつていうのに疎外感を味わうことしばらくで、二人の雑談は終わった。

「さてと」

「終わったの？」

「ああ、まあな。で、だ」

こほんと、あやちゃんがわざとらしく咳払いをする。そうして顔を上げたあやちゃんは、大変愛想のいい笑顔を浮かべていた。

……なに、この怪しい顔は。

「静香。今日は頼みごとがあるんだ」

「ノウ！」

即答。要望の内容を聞くまでもなく、わたしはしかめっ面して体の前でバツテンをつくった。

「私はまだなんも言ってないぞ」

「ノウ！ ノン！ バツテン！」

わたしは断固拒否の姿勢を崩さない。腕を交差させたまま、首をきっぱり横に振る。

だってあからさまに怪しい。あやちゃんの態度が、怪しすぎる。

そもそも基本的にあやちゃんの頼み事は断るようになっているのだ。大学に入ったばかりの時すっかりあやちゃんの依頼を受けたことが

あった。それ以来、あやちゃんは霊能関係の依頼をわたしのもとへ持ってくるようになったのだけれども、その大半が除霊の依頼だ。わたしは、除霊はしないようにしている。

「静香。とりあえずオーケーしなさい。あんたには拒否権も人権もないのよ」

「ダメ！ 遠野ちゃんは内容も知らないくせにやたらと薦めないの！ それと憲法によって日本国民にはすべからず基本的人権が尊重されてるよ！」

何で遠野ちゃんから頼んできているかしらないけど、ダメなものはだめだ。

わたしは、積極的に除霊をすることは絶対にしないと決めている。最初にうっかり受けた依頼は、人間の幽霊の除霊ではなかったから解決しただけなのだ。

「くそつ。遠野、静香の奴やたらケチだぞ。内容も聞いてくれないなんてひどい！」

「あいつのケチは今に始まったことじゃないわ。何とかごり押ししていかないと！」

「はいそこのふたり聞こえてるから！」

ていうか、なんであの二人はこの超短期間で異常なぐらい仲良くなってるのさ。巫女と幽霊が仲良くなるとか、おかしな話だよ。

そもそも、あやちゃんはわたしの幽霊を拾うという行いを良くは思っていないかったはずだ。彼女は、幽霊を抜うのは正しいと信じているのだ。

「……ふんだ」

わたしはちよっぴり口をとがらせた。

「いくら頼んだってわたしは揺るがないよ。あやちゃん、もう帰って」

腕を組んで、ふんと顔をそむける。腹立たしさも手伝って、いつもより強めの言葉で追い返した。

「ちよつと静香……」

遠野ちゃんが咎めるような視線を向けてきたけれど、知るもんかい。

しかし当のあやちゃんはそんなわたしの態度を見て怯むでもなくにやにや笑っていた。なにか策でもあるんだろうか。けど、今日のわたしはちよつとやさつとでは態度を動かさない自信がある。

来るならこい、と睨みつける。

あやちゃんが、ぼそつと呟いた。

「乃ノの居場所」

ぐらあー！

「くくく」

手ごたえありと見て、あやちゃんがにたありと悪魔みたいな笑みを浮かべた。

「どっかなあ。手伝ってくれたら、教えてやるぞ」

「……っつ」

わたしは奥歯をかみしめた。

確かに、確かに揺れたよ。一瞬倒壊するんじゃないかと錯覚するほど心が傾いたよ。なにせわたしを構成する半分はほのちゃんへの想いでできている。行方をくらましたマイエンジェルの居場所となればそりゃ知りたい。

でも、でもっ。

わたしを構成するもう半分は幽霊に対する感情でできているんだもん。

だからわたしは耐えるよっ。信念を曲げたりは、しないよ！

「だだだだダメなものだけどオツケーだよ！」

「あははははは！」

あやちゃんがこつちを指差して、ひとりで爆笑という器用なことをした。遠野ちゃんが、気の毒な人を見る目でわたしのことを見た。

「……あんだどんだけ残念なのよ」

「……はっ!？」

わたしはいまいったい何を!?

正気にもどると、あやちゃんは目元にうつすら涙を浮かべ、腹を抱えて大爆笑していた。

「あはは！ バカだ。バカがいるよ遠野。あそこに、餌をつるしたら迷わずくわえる、釣り堀の魚並みにしか脳みそのないバカがいるよ！ ハラ痛い！ 乃ノの居場所教えるなんて、嘘なのに！」

「うっさいよあやちゃんなんてうちから出てけえー！」

自分の弱点を把握しましょう(後書き)

はい。主人公はただのバカです。

友人の頼みを受け入れましょう

「幽霊を、捕まえてほしいんだ」

さんざんに笑い終わったあやちゃんは、涙をふきふきそう切り出
した。

「捕まえる？」

疑問の声を上げたのは、ぎくりと心臓を跳ねさせたわたしではな
く遠野ちゃんだ。

「捕まえるって、どういうことよ？」

もっともな疑問だ。遠野ちゃんも、幽霊が動けないことを知って
いる。動けない幽霊を捕まえるなんて表現する必要はないし、わざ
わざわたしの手伝うことでもない。

けれども遠野ちゃんは忘れていているようだ。

稀に、ごく稀にだけれど自由に動ける幽霊がいる。

「い、言ったじゃないかい、遠野ちゃん。特殊な子なら動けるって。
だから捕まえるっていうことは、そういう子の目撃情報があったっ
てことですよ」

「そ。鎖なしのがいるんだって、このあたりの霊能者に連絡網まわ
ってるんだ」。注意の喚起と、ついでにできれば探し出させてさ。
まったくめんどくさいよな」

ちょっと舌がからまったわたしと違って、テンポよく後を受け継いだあやちゃんがすらすらと説明する。

鎖なし。

それは動けるようになった幽霊を指す言葉だ。幽霊の動きを縛っているあの鎖がなくなった、特殊な幽霊のことを指し示す。

「なんか夜にあちこちら飛びまわってたらしいよ、その鎖なし。

「ここ二、三日で『空を飛んでる女の幽霊がいた』って、視える人から目撃情報が結構あるんだ」

「へえ……」

遠野ちゃんが興味をそそられたように相槌を打つ。鎖に縛られている身として、自由に動ける幽霊というものに興味があるのだろう。けれども、わたしが聞きたいのは次だ。

ドキドキを始めた心臓に気づかれないように、儼かな表情を取り繕って聞く。

「幽霊の身元の特定はできてるの？」

「わからん」

答えはあっさりしたものだった。

「それに、わかっていようがまいが、どっちにしてもやることは変わらないし」

「そっか」

わたしはほっと息をつく。どうやらバレていないみたいだ。

「と、いうことでだ」

あやちゃんの口元がからかうように吊りあがった。悪だくみの時のいつもの表情だ。

「ま、手伝ってくれんかな？」

なんとなく嫌な予感がした。

顔をしかめるけど、残念ながら特に断る理由はない。一応、友達だし。

「……うん、まあいいよ。除霊の依頼じゃないんだし、ほのちゃんには秘密っていう条件付きでなら、いくらでも」

「あ、ごめん。人手がいるから乃ノにも手伝ってもらってるんだ」

ぶちい。

「ちょ、いきなりどうしたのよ静香。やめなさいアホ！」

「よりによってほのちゃん巻き込むとはもうこの子は懲らしめてやらないとー！」

「ああもうあんたはいつも通りキモいわね！」

拳を振り上げたわたしを遠野ちゃんが必死になってはがいじめにする。わたしは躍起になってふりほどこうとするも、絡みつくようにして止めてくる彼女をなかなかひき離せない。

「楽しいなあ、あんたらは。特に静香は、乃ノのこととなると相変わらずだな」

そんなジタバタなわたし達に、あやちゃんはうつすら冷笑を向けた。

「乃ノに手伝ってもらってるとか、嘘なのに」

あやちゃんってば、ほんといい性格をしている。

友人の頼みを受け入れましょう（後書き）

ここは特にうまく書けていないので、随時直します。

打ち明け話を聞きましょう

帰り道。

駅まで送るからと遠野ちゃんに断って、わたしはあやちゃんと連れだって歩いてきた。

駅から最短距離の大通りではなく、人気がない路地道をわざと選んで歩く。見送りというのはただ名目で、実際のところは遠野ちゃんを抜きにしてふたりきりで少し話したかっただけなので、そっこのほうが都合が良いのだ。

ここから駅まで、ちよっと遠回りをして二十分。

「いってーなー」

「うるさいよう」

顔をしかめるあやちゃんに罪悪感なんかわきはしない。あやちゃんが顔をしかめる原因となった痛みはわたしが与えたものだけど、正当なものだ。むしろその反応がいつそう腹立たしい。

「少し殴られたぐらいでなにさ」

「殴った本人がそういうこと言うなよ」

「あやちゃんが悪いもん」

「む」

あやちゃんの唇が一瞬とがってすねる。

「ま、それもそっか」

だがそれ以上は言い返さず、すぐに口元をゆるめてからからと笑

う。こつこつとところは、気持ちいいくらいさっぱりしている。

「ところで静香」

「なに？」

あやちゃんがもう暗くなった空を見る。わたしもつられて顔をあげた。

上から見下ろす東京の夜景を綺麗だと思う人はいても、下から見上げる東京の夜空を美しいと感じる人は少ないんだろう。事実仰いで見える夜空は本当に星が少なく、月も雲に隠れており、見るべきところなど何も無い。

当然、幽霊が飛んでいたりはいらない。

「鎖なし、見つかると思うか？」

「見つからないんじゃないかな」

あっさりとして、そこは正直に答える。

「鎖なしなんて、捕まんないもんだよ。幽霊だから障害物なんてすり抜けちゃううえ、空まで飛べるし地面にもぐれるんだよ。そんなもの、見つけて追いかけてようなんて無茶だよ」

どうやって追いかけるかというのだろう。結局のところ限られた地面を走るしかない人間にしてみれば、鎖なしを捕まえるなんてことは土台無理なのだ。

「それにどうにかして追いつめたって、基本的には人間より強いんだもん。だから被うのだからそうそうできない。どうしようもないよ」

「だよねえ、あーあ。人的被害が出ませんよーに」

「そつだねえ」

あやちゃんが手を組んで冗談っぽく夜空に祈る。わたしもそれに同調して頷いた。

人的被害が出かねないというのが、鎖なしの幽霊の怖いところだ。くびきから脱した幽霊は、本当の意味で自由になれる。やろうと思えば人に見てもらうことも、人と話すことも、人に触れることもできるのだ。ものすごく疲れることだし、力のコントロールは綿密に行わなければいけないけれども、努力と経験を積みれば可能なのだ。

だから彼らは人間に危害を加えることができる。万人にとって危険な幽霊なのだ。

それでいて肉体をもたない彼らは不変だ。被われない限り、もしくは他の特殊な要因がない限りは消えることもない。

「ま、でも静香がいりゃ百人力か」

「あてにしないでよう」

「いやいや期待してますよ」

あやちゃんのよいしょ攻撃に唇を尖らせる。頼られても、困るだけだ。

「でも手伝ってくれるのは意外だなー。うちは家業だし、私も視える聞こえるっていう因果な能力があるからやってるけどさ、静香は除霊が嫌いじゃん？ 万が一にも鎖なしが見つかったらどうすんの。探し出せ、捕まえる、なんて言い方したけどわかってるだろ、実際見つけたらどうなるかぐらいは。静香なら負けないだろうけどさ」

受けた理由の本体は口が裂けても言えない。

引きつけたのは、別に負けないからでも、鎖なしの幽霊が人的被害を出しかねない危険なものだからでもない。例え手強い鎖なしで

あれ除霊するだろうとあやちゃんとは間逆で、わたしは例え人的被害を出しかねない鎖なしであっても、幽霊として生きたいように生きればいいと思っっている。

わたしはその鎖なしの幽霊が、もう二度と現れないことを知っているだけなのだ。

あやちゃんと顔を合わせてなくてよかった。暗い夜道に、こっそり感謝する。わたしは空を仰いだまま、視線だけをあさつての方向に飛ばした。

「被う気は……ないから」

「ははっ。また捕まえて家に引つ張り込もうとでも？　ますます乃ノがキレルだけだぞ？」

「それは困るなあ……」

心底の弱り顔をしたのを察したのだろう、あやちゃんがもう一度声を上げて笑う。

「あっはは。でも遠野を見てると幽霊と暮らそうって気持ちもわからなくないな。あいつ、楽しいし気が合うわ。前回の奴とは会ったことなかったけど、あんな感じだったのか？」

「前の子は……」

わたしはふっと言葉を切って真っ暗な夜空に過去を幻視する。

前の子は。

もっと大人しくて、控え目で、どちらかといえばほのちゃんに懐いていて、怒鳴ることなんてことはせず、殴るなんてことはなおせず、穏やかに笑う子で、あんまり好きな言葉じゃないけど、大和撫子という表現がぴったりの女の子だった。

ただ、しとやかでいてその内に秘めたものは苛烈だった。

「遠野ちゃんとは、全然違ったよ」

俯いたわたしをどう取ったのか、ふうんとあやちゃんが頷く。

「あやちゃんはさ、幽霊を、どう思ってるの？」

「救いようのない存在」

迷いなく言い切る。

「そっか」

「そうだよ。度し難くて、救い難い」

「……そっか」

その評価は、きっと正しい。

でも……

「なあ、静香」

黙りこんだわたそを、あやちゃんは静かに見据えた。

「ちょっととある恋ばなしない？」

「え」

わたしは、珍しく真剣な表情のあやちゃんに、首を傾げた。

「ほのちゃんの話？」

「……静香は聞き役に徹してくれや。私の素敵な初恋話だ」

「へえ？」

ちょっと興味がある。いろいろと浮名を流すあやちゃんだ。その

始まりとなると、自然と関心は高くなる。

けれども、あやちゃんの顔は、ふざけた恋ばなをするにしては真面目すぎた。

「私の初恋の相手はな、幽霊だったんだ」

「……！」

わたしの目が見開かれたが、予想済みだったのだろう。あやちゃんは一瞥しただけで受け流した。

「小学校の裏手にいた幽霊で、私がそいつに気がついたのは小学五年生の時だった。背の高い、高校生くらいのカッコいいお兄さんだったよ。こっちは一目ぼれだ。まだ子供だったし、年上のお兄さんに憧れてたところもあつたんだな。私の短くもかわいらしい少女時代だ」

かつかつと、足音を響かせながら話が進む。

「人目を盗んでは会って行つたさ。楽しかったよ。向こうも喜んでくれていた。話相手ができたってね。小学校卒業して中学に入学してから、さすがに頻度は減つたけどそれでも思いが途切れることはなかったよ。あつちは、私の気持ちに気がついてたのかなあ。それはいまでもわかんないけど、仲良くやってたんだ。でも、ある日そいつこつ頼んできたんだ」

もう、殺してくれ。

「もう、ここにいたくないってさ。そう言ったんだよ。変わらないのが、つらいって。生きていないのが、つらいって。進めないのが、つらいって」

「……っ」

ずきり、と胸が痛んだ。共感が、わたしの胸を絞め上げていた。いや、とも思う。共感してはいけないのかもしれない。聞く限り、その人が味わった苦痛はわたしより遥かに深い。三年。三年だ。動けもしない幽霊が、澆刺と生を謳歌する女の子と接し続ける、その絶望。昔のわたしとは、比べ物にはならない。

「私はそいつを被った。希望通り、被ってやった。三年以上の付き合いがあった奴を、被った。そこからだな。私が幽霊を視たら、幽霊の声を聞いたら見境なく除霊するようになったのは」
「……そっか」

ずきりずきりと痛む胸を押さえながら、頷く。

なぜ人は幽霊を被うか。それは幽霊が霊能力者の一部である触れる人間にとって危険だからという理由もあるが、しかしそれだけではないのだ。

幽霊は、孤独だ。大して動けもせず、普通の人と関われないその孤独は、どこまでも深い。

だから幽霊を永劫孤独でいさせるよりかは、いつそ被ってあげたほうがずっと救いになる。わたしだって、幽霊自身から頼まれればつらくとも被ってあげている。

「私は幽霊を被うよ。遠野がどうであっても、関係ない。いままで通り、話さず、触らず、視線も合わせず被う。幽霊は、被うのが正しい」

その言葉は、正しい。

幽霊にとって、除霊は間違いなくひとつの救いなのだ。

「静香。今日、私がなんで遠野を除霊しなかったか分かるか？」

あやちゃんが、笑わずに言う。断罪するように、もしくは弾劾するように強く言葉を使っている。

「わかんないよ……」

「わかんないわけないだろ。じゃあ、質問を変えるよ。静香が今まで出会って、除霊されなかった幽霊はいるか？」

「……いない」

わかっているのだ。いままで、ひとりだっていない。ほのちゃんがかつて言ったように、わたしが幽霊との同居に成功したことはない。

「だからだよ」

即座に言葉が切り返されてくる。

「だからあんたが幽霊と一緒に暮らそうが何しようがかまわないんだよ。結局、被うんだからさ。遠野だってそうだよ。あんたは、いつか絶対に被う。あいつを、遠野沙織を、被う」

遠慮なく、容赦なくあやちゃんは言葉を降らせる。

「そういえば乃ノに、被うと殺すと、何が違うか分からないって言ったんだって？ そりゃ、そうだよ。被うも殺すも変わらない。違いないんで、ない。幽霊だって、人格がある人間なんだ。それを消す違いは、そうだな、法の中か外かの違いでしたかない。自意識をもつた人を消し去る罪悪感は、普通じゃなかなか耐えられないだろうさ。でも、それでも」

一息ついて、言う。

「静香は被えるじゃん」

確かにそうだ。

幽霊を救う術を、わたしははまだ知らない。せめて孤独でないようにと、家に引っ張り込んで話の相手になるぐらいにしか手立てを知らない。

そして、いざとなれば、わたしはためらわない。

前の子をそうしたように、その前の子も、もっとももっとも前の子もそうしたように、
そう。

最初の子をそうしたように。

殺されそうになれば、被う。それをためらったりはしない。

わたしは、自分が生きるためならば遠野ちゃんを殺せる。己の為に人を殺そうとする幽霊を、許しはしない。

……改めて思い返すと、ひどい。指摘されると、どうしようもないくらいに、ひどい。

ほんと、何てひどい矛盾だろう。

「だから、やめな、もう」

ゆっくりと紡がれたその言葉は、ひねた性格のあやちゃんらしくもなく、ほのちゃんのものによく似ていた。

「どうせ被うなら、視た瞬間被いなよ。聞こえた瞬間被いなよ。触った瞬間被いなよ。知り合った奴を、付き合った奴を被うのはさ…
…つらいじゃん」

あの日、携帯越しで叫んで訴えたほのちゃんの言葉と、形はそっくりだった。最後の言葉の重みは、同じつらさを知っている彼女だからこそだろう。

けど。

「うづん、やめない」

あやちゃんの忠告は、ほのちゃんとは違った。

それはきつと、わたしを知っているか知らないかの差。わたしがいまここに存在する経緯を知っていても許してくれる人と、知つたらきつと許してくれない人との、差。

「そっか」

あやちゃんが、ちょっと顔を上げた。

珍しく、いや、珍しいどころの騒ぎじゃない。あやちゃんのそんな表情は、知りあって初めて見た。

「何が、違つんだらうな……視れて、聞けて、触れないだけなのに、そんなに差はないはずなのに、何で……」

弱々しく顔を上げた彼女は、笑っていた。そう。確かに笑っていた。

いまにも泣きだしそうな笑顔だった。

「……私は、一回でこりたんだよ」

弱音だった。享樂的に生きるあやちゃんの、本心からこぼれた弱音。不安も悪意も笑顔の底に押し込めてみせる彼女の、それが一番弱い部分なのだろう。

「それ以上は、無理だったんだ……」
「それが普通だよ」

慰めなんかじゃない。わたしとあやちゃん、そんなに差はないのだ。むしろ人間として強いのは、明らかにあやちゃんのほうだ。だから、たぶん、その差は。わたしが懲りずに幽霊との付き合いを繰り返せるその理由は。

ほのちゃんという理解者が、いるからなのだ。

「……理由、聞いてもいいか？」

しばらくの沈黙の後、あやちゃんはぽつりとそう聞いてきた。

「なんの理由？」

「幽霊を、家に入れる理由」

口元がほころんだ。ちょっと笑みがこぼれた。拒絶したのに歩み寄ってくれたのが、どうしようもなく嬉しかった。

幽霊を、家に入れる理由。

それは遠野ちゃんにも聞かれたことで。

そして、ほのちゃんは知っていること。

それでもって、あやちゃんが知ったらきつと許してくれないことだ。

「生きたいっていう意志を知っているから、かな」

あやちゃんが困ったような笑顔を浮かべる。

「なんだそりゃ」

そりゃ、わからないよね。

でも、分からなくて、いいのだ。

幽霊を家に入れる理由。それは要するに。

「まだ秘密ってこと」

打ち明け話を聞きましょう(後書き)

うーん……こういう場面はもっとしっかりかけるようになりたい
です。

少し息抜きをしましょう

「ただいま」

「おかえり」

帰ると普通に遠野ちゃんが出迎えてくれた。それに、おやと思う。毒舌のない出迎えなんて久しぶりだ。

あやちゃんとのシリアスモードで疲れていたから嬉しいけれど、どうしたのだろう。不思議に思っただけで遠野ちゃんの顔をうかがうと、何やら笑顔で上機嫌なご様子だ。

「いい奴だったわね、綾瀬は」

どうやらあやちゃんと知り合えたことが嬉しいらしい。ほくほくと声を弾ましている。

わたしはそれに、えー、と顔をしかめた。

「何を言ってるの遠野ちゃん。あれは悪人のろくでなしだよ。マネしちゃいけない人間の代表格だよ」

「どこがよ。なっちゃんいけない人間の全日本女子代表はあんたですようが」

「そんなことないよう」

あやちゃんが大学生活を謳歌しまくっているのは認めるけど、彼女は彼女でガチでなっちゃんいけない人間の一人なのだ。まあ、たしかに交友関係広いし、あちこち旅行したりしているのは楽しそうだけど

「そうだ」

ふとした思いつきに手を打った。

「遠野ちゃんも、幽霊探しを手伝わない？」

「え、なによいきなり」

「いや、だって人を探すのに目は多いほうがいいじゃんかさ」

そう言いつつも、それはただ単純に遠野ちゃんを外に連れ出す名目だった。わたしには、鎖なしの幽霊なんて見つからないとわかっているのだ。

遠野ちゃんも、部屋にこもりっぱなしだといひ加減ストレスがたまっているだろう。なにか目的があつて外に出たほうが楽しいに決まっている。実際、突然の申し出に多少困惑しているようだけど、反対の意思はちつとも見えない。遠野ちゃんだって、外に出たいのだ。

それと。

遠野ちゃんとも、もう一歩進んだ関係になる時期だ。

「だから行かない？」

「アルタ前に？」

「だから行かないって」

そこははっきりと断っておいた。

素敵な旅行にしましょう

「おかしい」

「うわー、うわーっ、うわー！」

遠野ちゃんが目をキラキラさせて歓声を上げていた。

後ろから腕をわたしの首に回してふわふわ浮かんでいる。遠野ちゃんも呪縛のせいでわたしに触っていないと動けないから、こうやってしているのだ。たまにテンションあがって興奮した遠野ちゃんがわたしの首をぎゅって絞めるから、この体勢はちよつと嫌だ。

「おかしい」

わたしはいま一度呟いた。

耳には携帯を当てている。ここはある程度プライバシーが保てる自分の部屋ではない。人の往来が激しい場所だ。遠野ちゃんとの会話を怪しい独り言だと思われないように工作しているのだ。

わたしは視線を上げて周囲を確認する。周りを背の高い建物に囲まれ、波打たんばかりの人ゴミががやがやとうるさい。しかしいくらなんでも聞こえなかったわけではあるまいに、遠野ちゃんはわたしの言葉に取り合ってくれなかった。

「うわー、静香。あの八百屋なんか変だ。パイナップル丸ごと売ってるよ。あれ……？ やしの実？ うわっ、四角いすいかだつて！

なんでドリアンとか売ってるの！？ 東京に需要あんの！？」
「珍しいからじゃないかな？」

聞き流しつつも見上げてみればそこにあるのは何インチあるのか忘れてしまったけれども、とにかく巨大なテレビ。

よつするにここは新宿の東口を出てすぐのところ。新宿アルタ前だ。

「まあ、もういいけど……なんでこんなところ来たの？ やることないよ？ アルタの中はいる？」

この辺りが言うほど危ない場所でないことぐらいは知っている。

ただ遠野ちゃんとのやり取りで意地になっていただけなのだ。

ただ、渋谷や原宿と違って、アルタ前でやれることはない。

「いいわよ。もう満足だもん！」

「あつそう……」

げんなりしてきた。もういつそ訳がわからないといってあげようか。いまの遠野ちゃんは、ほのちゃんに会ったわたしばりのテンションだ。まともに相手をしたらダメな状態だ。

「じゃあこれからどうするの？」

「知らないわ！」

「あははは、遠野ちゃん何がしたいのさ！ 訳がわからないよ！

そりゃ外に出ようと言ったのはわたしだけどさ。もうちょっと目的を持って行動しようよ！」

「ん？ あたしが何をしたいからというか、幽霊探すんじゃないの？ そのついででここまで来たんでしょ？」

「おや」

目をぱちくり。そういえばそういう名目で遠野ちゃんを外に来ていたんだっけ。

右斜め上を見上げて、目逸らし。
鎖なしの幽霊なんて、見つからないからなあ。うまい具合に話を逸らしていかなきゃいけない。

「うん、でもどつちにしたってこんなとこにいないでしょう」

「そう？ わかんないわよ？」

「わたしは遠野ちゃんよりずっと幽霊に詳しんだよ」

ていうかなんでここまで来ちゃったんだっけ。外に出たまではいいとして……その後は……そうだ、遠野ちゃんの催促攻撃にいい加減耐えきれなくなったんだ。家からここまでぎりぎり徒歩圏内だから、それでアルタ行きたいアルタ行きたいアルタ行きたいと洗脳してくるかのようにリピートする遠野ちゃんにうっかり頷いてしまったのだ。

「じゃあさ」

ぴつと指を立てる。あそこまで頑なに拒んでいたアルタ前に来てしまったのだ。いつそ思いきったことをしてみてもいいだろう。

そもそも、外に出ようとすすめたのは鎖なしの幽霊を探すためでもアルタ前に来るためでもない。

遠野ちゃんという幽霊との関係を、もう一步推し進めるために来たのだ。

だから提案する。

「北海道、行ってみない？」

「……え？」

遠野ちゃんのおおはしゃぎがちょっと止まった。目を見開いて、まじまじとこっちを見る。

「……い、いきなり話が飛んだわね。ほ、北海道なんて行って、鎖なしとかいう幽霊はどうするのよ？」

「あやちゃんとの約束なんて忘れようよ」

「おい」

つつこみが入るけど、スルー。

だって実際構わないのだ。何度も言うけど、鎖なしの幽霊なんてどうせ見つからないとわかってているのだから。それに外に出たのは、そもそもこの提案をするためだったのだから、わたしの中では話が飛躍してはいない。

わたしは続ける。

「あやちゃんだって、できればって言うてたでしょう？ 無理してしなくてもいいだよ、あつちのほうは。それに、懸念材料だったお金もさ。バイトを多めに入れていた分、余裕があるの」

実を言うと、バイト代だけではない。ほのちゃんが先月分の家賃半分をわたしの口座に振り込んでおいてくれたのだ。バイト代を確かめるために通帳を見た時に気がついた。

「え……でも……」

「せっかくの夏休みだし、わたしも旅行行きたいんだよ。遊びたいの。北海道は行ったことないから、遠野ちゃんの観光案内であちこち回りたいよ」

いつもはガツガツしているくせに変なところで遠慮深い。わたしは遠野ちゃんのことを封じ込めるようたため、たたまかけるように申し出る。

「さすがにいますぐってわけにもいかないから、今日は旅行の準備
つてことであるいるまわってみよう。ね！」
「……わかった」

遠野ちゃんが沈黙していたのはちよつとの間だけだった。

「そこまでいうんなら、案内してあげるわよ！」
「そっか」

遠野ちゃんらしい堂々とした笑顔だった。

わたしはそれに、にっこり笑う。わたしから提案したこの旅行の
結末が、どうなるうとも後悔しないように。

「ありがとう」

あやちゃんの言ったことを、思い出す。
いつか、そのうちに。

わたしは、この子を被うことになるんだろうか。
そんなことを考えながらも、まだ笑えるこの時にわたしは笑顔で
そう言った。

素敵な旅行にしましょう(後書き)

三区切り目。次から北海道に行きますが、みりんは北海道に行ったことがないので描写は適当です。需要がないと思いますので、幕間は入りません。

限界を見極めましょう

気分が、悪かった。

新千歳空港。それは、北海道の入り口のひとつだ。陸海空あるうちの、空路。人がせわしなく行き交いアナウンスが響く様子は、さすがは世界と空の道を繋ぐ窓口だと納得させられる。

わたしはそこを、ふらふらとした足取りで歩いていった。

深刻な状態だった。初めて訪れる地に降り立ったのに、空気の違いなどわからない。自分が地面にしっかりと足をつけているかも定かではない。半ばキャリアケースに身を任せ、なんとか歩いているという呈だ。

感傷も感動も皆無。

なぜならば

「……飛行機でここまで酔うとはね」

遠野ちゃんだ。呆れ交じりの声が聞こえたけれど、答える余裕など一ミリグラムもない。顔を上げるのがおっくうで、遠野ちゃんがどんな表情しているかも見てられない。どうせ呆れているかさげすんでいるんだらうけど、空間から感覚が隔絶されている遠野ちゃんにはこの辛さがわかるまい。いやだって本気で気持ち悪いのだ。

まさか飛行機にここまで弱いとは自分でも思わなかった。生まれ二十二年、飛行機に乗る機会がなかったから知らなかった。車でも電車でもジェットコースターでも焼酎瓶一本のみほした後でもここまで酔ったことはなかった。ほんとのほんとにひどい状態なのだ。

「旅行前のテンションはどこいったのよ。殺したくなるほどキモいハイテンションだったけど、今よりはましだったわよ？」

そのテンションは、飛行機が飛び立った瞬間に、お空の遙か彼方へフライトして行っちゃったんだと思う。

「……ちよつと遠野ちゃん、ここで待ってて」

わたしは力を振り絞ってそれだけ伝え、よろよるとその場を離れる。トイレが混んでたら死亡確定だあとか思いながら、何とか歩く。

「え、ちよつと待ちなさいよ静香」

引き留める声が聞こえたけれど、今回は無視した。さすがにトイレでの醜態は、見られたくない。

限界を見極めましょう(後書き)

飛行機でものごく酔うのはわたしだけなのでしょうか……？

車の運転には細心の注意を払いますよう

「少し、楽になったかなあ……………」

トイレから帰還したわたしは、それでもまだ青いと自覚できる顔で呟いた。まだ少々の吐き気と頭痛が残っている。

「初っ端から情けないわね」

「面目ないよう……………」

今回ばかりは反論しない。というより、反論できるほどの気力がない。思考からしてテンションが低い。わたしはいま弱ってるのだ。弱者なのだ。優しくしてほしい。

「東京から北海道まででこれじゃあ、ほのちゃんとのハネムーンで海外旅行は夢のまた夢かなあ」

「だまりなさい、カス」

優しくしてほしいよう。そんな汚物を見るような目を向けないでほしいよう。

「まずは観光地まわろうって思ってたんだけど……………行ける？」

「しばらくムリだよ……………ベッドが恋しいよう……………横になって休みたいよう」

「……………とりあえず、予約したホテルいこっか」

うつうつと涙目を向けると、さすがの遠野ちゃんも気を使ってくれた。しかたがない、とでも言いたげだったけど、向けてくれた優しさがとってもありがたい。

「ホテルはすぐそこだからいいとして……休んだ後の移動はどうするのよ？ 電車とか使うの？」

「ああ、それなら大丈夫だよ」

心配ご無用だ。北海道に来る前に、ちゃんと事前に調べておいたのだ。

「レンタカー使うから」

レンタカーを借りられる場所を。

「は？」

遠野ちゃんが変な顔で振り返った。何て言うか、アライグマがその名の通りお洗濯をしているというありえない現場を目撃しちゃったような感じだ。

「……あなたが運転するの？」

「……他に誰かいるのかな？」

窓の景色が流れる。

ホテルで一休みしたあと、レンタカーを借りたのだ。いまはそれを運転して移動している。向かう先は、遠野ちゃんのプランにした

がって観光名所でもある動物園だ。

東京に慣れたからというのももちろんあるのだろうけど、北海道は本当に広い。というかあからさまに東京の道が狭すぎるうえに車が多すぎるだけなのだけど、それでも気持ちに余裕を持って運転できるありがたさは変わらない。

「まさか静香が免許を持つてるとはね……」

遠野ちゃんが呟く。いつもの毒舌ではなく、本気で意外なようだ。

「そんなに意外？」

「ええ。調理師免許を持っている野生のアライグマが森の仲間たちにフランス料理のフルコースを振る舞っているぐらい意外だわ」

「それはびつくりの意外性だねー」

遠野ちゃんたらわたしのことなんだろうと思ってるんだろうねー。その遠野ちゃんはそわそわと落ちつかない様子で助手席の辺りに浮いている。飛行機の時もそうだが、幽霊の面白いところは、物体には触れないくせに乗り物には乗れるというところだ。ちなみにいまの呪縛は車から伸びて遠野ちゃんをがんじらめになっている。

「車の免許は去年の夏休みにとったんだよー」

「ふうん。いつそ車で北海道まで来ようとは思わなかったの？」

「えへへ、東京から北海道までかかる時間を思うとね」

お金も時間も半端なくかかる。運転するのに使う体力だっているだろう。そりゃ飛行機で来るよりは安く上がるだろうけど、少し贅沢してみたのだ。……今回は予想外の乗り物酔いで裏目に出たけど。

「あっそう……でも、ねえ……」

免許持ちとはいえ交通網が発達している東京では、車を持たない女子大生が運転する機会なんかそうはない。車を動かすのは随分ひさしぶりだ。

そう。どのくらい久しぶりかといえば、エンジンキーの場所がよくわからなくて手間取り、出発時はアクセルの踏み加減を間違えて壁に突っ込みそうになり、遠野ちゃんから「あんたちよつとその免許偽造でしょう！」といわれぬ追及されたほどだ。大丈夫だよ。ちゃんと国家公安委員会から発行された第一種自動車免許（AT限定）だよ。

だから、何故だかさつきからずとおびえたようにそわそわしている様子の遠野ちゃんにきっちり断りを入れる。

「遠野ちゃん、事故っちゃったらごめんね」

「なんで大人しく電車とバスにしなかったのあんた!？」

その日は観光地を回りまくった。

動物園に行つて水族館をまわつてその途中で観光地を見て回るという超ハードスケジュールだった。途中ガソリンがなくなりかけるというプチハプニングが起こったけれども、おおよそ順調にはしゃぎまわった。

すごく、楽しかった。

車の運転には細心の注意を払いましょう(後書き)

最後の一文は、もちろんフラグです

秘密を晒しだしましょう

「綾瀬の頼みごと、ほんとにほっといて良かったのかしら」
「うん？」

いまはもう夜だ。日があるうちにさんざん遊びまくり、ホテルに帰った。そしてわたしがお風呂から戻ってくると、ホテルの一室で、遠野ちゃんがふと呟いた。

「うんとね、遠野ちゃん」

ちょうどいい機会だ。わたしは髪を拭きながら、ベッドに腰掛ける。位置的に、ちょうど遠野ちゃんの正面だ。

神妙な表情で、遠野ちゃんと目を合わせる。

「遠野ちゃんに告白します」

「なによ気持ち悪いわね。あたしはそんな趣味ないわよ」

「いやいや遠野ちゃん。わたしにもそんな趣味はないよ」

ぶんぶんと顔の前で手を振って否定する。なに気持ち悪いことを言ってるんだろう、この子は。

「何を勘違いしているのかな。わたしはあくまでほのちゃん個人を愛しているのであって、百合ではないんだよ？」

「こいつ、やっぱり真正の……！」

どうしたのだろう。何か遠野ちゃんが真っ青になってガチで引いてるけど、とりあえずスルーしておくのが吉だろう。

「例の鎖なしの幽霊だけどさ」

「ヤッパリヘンタイダツタノネアンタハコレカラノカンケイヲカンガエナオサナキヤ　ああ、うん。綾瀬に頼まれたでしょう？　あいついいやつだし」

「あれ、わたしです」

「は？」

遠野ちゃんの目が点になった。

「え、ん？　いや、どういうこと？」

「んー、そうだね。論より証拠。じゃん。幽体離脱の術うー」

わかりやすく、霊体を体から抜いて見せた。霊体の抜けたわたし体が、ぱたとベッドに倒れこむ。

遠野ちゃんの点になっていた目が、今度はまん丸になる。

体から抜けた霊体は、当たり前だけどわたしの体と寸分たりとも変わらない、二十歳の女子大生だ。遠野ちゃんから見れば、わたしが二人いるように見えるだろう。

「気が付かなかったわ……」

「うん。夜中にこっそり抜け出たからね。いやー、あやちゃんに幽霊捕まえてくれって言われた時は、あせったよ」

だって、捕まえてと言われるている幽霊が自分なのだ。あやちゃんと会話している時は心臓がばくばくだった。身元が特定できていないと聞いた時は安心した。夜空を飛びまわっていた時に顔を見られてなくて本当に良かったと思う。

「そうなの……でも、なんでそんなことしたのよ。騒ぎになるかも

って思わなかったわけでもないでしょう?」

「えへへ……その、ほのちゃんを捜しに」

何て言うか、耐えられなかったのだ。探せる手段があると思ったら、やらずにはおられなかったのだ。霊体になってあちこち飛び回ったけれども、結局ほのちゃんを見つけるとは出来なかった。見つからないようにと注意はしたんだけど……ま、あのさまです。あやちゃんに気付かれなかっただけましな結果だとも言えるのかな。

「なるほど」

ほのちゃんが得心したとばかりに頷く。

「バカだアホだ変態だとは思ってたけど、霊能関係に才能がある分に夕チが悪いのね」

「えへへー、遠野ちゃん、ちょーっと黙っててね」

遠野ちゃんたらあいかわらず言いたい放題だ。ひくひくと頬をひきつらせて笑いながら遠野ちゃんを殴りたい気持ちを自制する。

さて。いままでのは、状況説明だ。ここからは、少し違う。

わたしは自分の奥底に押し込めた秘密の告白を始める。

「才能あるって言うけどね。わたし、昔はこんなことはできなかつたんだよ」

「昔は? 修行でもしたの?」

「ううん」

首を横に振って否定する。いくら修行したって、普通、人はそんなことができるようにはならない。修行してできるようになるのは、被うことだけ。他は、せいぜい幽霊の気配がわかるようになるくら

いだ。視る聞く触るは、絶対的に生まれつきに因る。

「昔のわたしはね。霊体離脱どころか幽霊を被うこともその姿を視ることも声を聞くこともできなかつたんだ。できたのは、触れることだけ」

触れることしかできない人間。

それはとても危ない状態だ。

幽霊は人に触ることはできない。けれども、幽霊に触れる人に対しては例外なのだ。

鎖なしの幽霊が危ないと認識されている最大の理由は、人に触れるからだ。人に触れるからこそ危害を加えることができる。そして触れる人が危ないのは、幽霊に触られるからだ。

そうして、もうひとつ。

なぜ、触れる人が危ないかの理由が、もうひとつある。

わたしは、さりげない会話にとっておきの、下手をしたら自分までに及ぶ毒を混ぜる。

「幽霊はね、幽霊に触れる人に対してなら触ることができる。そして、触れる人が死ねば、その体に入ることができるの」

もし触れる人が死に、幽霊がその体に入れば。

あくまで疑似的にだけけれども、蘇ることができる。

肉体を持ち、成長し、社会に溶け込み人のように生きることでもできるのだ。

「……っ」

遠野ちゃんが、かすかに肩を震わせた。

その動揺は当然だ。生きている人間に蘇る手段を聞かされたのだ。

幽霊の遠野ちゃんが、それこそそのどから手が出るほど欲しかった情報だろう。

そして、その方法を叶えられるうってつけの人間が、目の前に一人いる。

わたしが死ねば、わたしを殺せば、幽霊は肉体を手に入れることができるのだ。

前の子は、その誘惑に耐えられなかった。さんざん迷った挙句、葛藤で壊れそうになってしまつてわたしの首を絞めた。

けれども遠野ちゃんに、教える。

わたしの一番の秘密の、わたしがなによりも話したくないこと。

何より一番奥に秘めていること。

世界でたったひとり、ほのちゃんだけが知っていること。

それら全てに起因すること。

それをわたしは言った。

「そして蘇った子はね、霊能に対して他の追随を許さないほど力を得れるの」

遠野ちゃんが、いままでで一番大きく目を見開いた。

わたしの言ったことが何を意味するのか、汲み取れなかったわけではないらしい。

十 十 十

そう。

ある日、わたしは死んだ。

そうして幽霊になつたわたしは蘇つた。

ある女の子を殺して蘇つた。

わたしが幽霊を拾うようになった原因は、ただ、それだけの話なのだ。

秘密を晒してしましよう(後書き)

転。

納得は、できません

しばらく、重苦しい沈黙がその場を支配した。

空気に鉛の塊をぶらさげて質量を付与したような、重い重い沈黙。部屋にいる人間が押し黙るだけでなぜこのような重みが生まれるのか、空気というものがどうしてこんなにも重くなるのか。心理というものが人体に影響を及ぼす不思議のひとつである。それを破り口火を切ったのは遠野ちゃんだった。

「……あなたは、一回死んだの？」

「うん」

わたしは頷く。

「それで、誰かを殺して生き返ったわけ……？」

「うん」

正直に、頷く。

遠野ちゃんが何を思ったのか。わたしにそんなことが正確にわかるわけがない。

ただ、何となくの予想はできた。

「そう……」

低く呟いておもむろに顔を上げた遠野ちゃんの目は、暗かった。彷彿とさせるものがある。幽霊のこういふ表情は何度も見てきた。遠野ちゃんのならば、始めて出会って問答した時の目にそっくりだった。

その、粘りつくような視線を気に留めず、わたしはいつもの調子で語りかけた。

「遠野ちゃんはさ、死ぬってどういうことだと思っ？」

「……」

「わたしは、一度死んで蘇ったわけだけど、いま幽霊である遠野ちゃんは、死ぬってどういうことだと思っ？」

遠野ちゃんは、すぐには答えなかった。わたしもそれ以上は語らず、その場に自然と沈黙が落ちた。わたしの言葉を反芻して、かみしめて、すりつぶして、何かを溜めるような沈黙の後に

「なんで……」

表情をきしませて、歯をくいしばって言葉を絞りだした。

「なんで、そんなこと聞くのよ……！」

遠野ちゃんは悔しがっていた。泣きたがっていた。怒鳴りたがっていた。憎んで恨んで羨んで、きつとわたしのことを殺したがつていた。

「生きること？　死ぬこと？　いま生きてるあんたに、何がわかるのよ……！」

それほどの感情を押し込めた怨嗟で、呪いだった。

「何も」

わたしは、ぴくりとも表情を動かさなかった。

「何も、わからないよ」

心は、小揺るぎもしなかった。遠野ちゃんの言葉に同情しようなんて思わなかった。おびえる気持ちは存在しなかった。ひるもうともしなかった。

だって、そんな反応は承知の上で、秘密を明かしたのだ。

「けどさ、例えばさ」

遠野ちゃんは、わかるのか、と聞いてきた。

でも、わからなければ、理解しなくては、声をかけてはいけないのだろうか。正しいことしか主張しなくてはいけないのだろうか。何も知らない他人には、話しかけてはいけないのだろうか。

それは、違うのだと思うのだ。

「遠野ちゃんはさ、誰かのお葬式に招待されたことはある？」

だからわたしは間違いを話す。残酷な言葉を淡々と吐きながら、後ろに手を組んで空を見上げる。

遠野ちゃんは十六歳。親戚に不幸があったとして、それはどれだけだろう。それに年の離れた親戚なんて、遠野ちゃんの年頃の子にとっては遠い血縁でしかない。ただ親について、大した感慨もなく焼香をあげるぐらいだ。

滔々と先を続ける。

「友達が知らないうちに死んだことは？ 両親のどちらかの余命宣告を受けたことは？」

遠野ちゃんにはきつとない。

それを考えたことすら、きつとない。

だって遠野ちゃんはまだ十六年しかこの世にいない。そんな世の中をよく知らず、大人を侮るような年代の彼女が生き死ににこだわること理由は。

ただ、死んだことがあるからというだけなのだ。だから。

「遠野ちゃんは人のいなくなる虚しさを知らない」

自分が死ぬとは思っていなかったとた遠野ちゃんは言った。けれども、違う。それは違うのだ。

他人が死ぬのは当然。自分が死ぬのは自然。

ただ当たり前すぎて考えず、ただただ恐ろしいから考えないだけなのだ。

そうして当たり前だったものが世界から抜けることは、悲しく、つらく、そしてどこまでもどこまでも、虚しい。

ただ、そんなことであってさえも。

「人が死ぬのは劇的なことじゃないんだよ」

もう一度、わたしは言う。

たった二十歳のわたしが知った口を聞くのは傲慢なのかもしれないけれど、死は特別なものではない。本当に、本当に特別なものではないのだ。

だって。

「人は、知人が死んだ次の日には笑って暮らせる」

「……！」

耐えきれなくなったのだろう。がつりと、遠野ちゃんが肩を掴ん

できた。万力のように、ぎりぎりと締め付けてきた。

ひどい表情だった。悪鬼のような形相ですらあった。地獄の餓鬼はこんな顔をしているのだろうと想像できた。

でも事實は翻らない。

人は、笑っていないと生きていけない。

どんなにつらくても、どんなに悲しくても、どんなに虚しくても、笑わなければいけない。誤魔化すために、乗り越えるために、忘れるために。

だから人は人が死んだ翌日には笑う。無理にでも笑う。わたしはそうしてきたし、誰だってそうするだろう。事実、ここの家の人は笑っていた。

けれども。

それは決して悪いことではない。むしろ必要なことだ。それを責めるのは何も知らない子供だけである。三日も四日も泣き続けるのは、それしかやることのない人間だけが許されるのだ。生きるために動く人間は、止まり続けることは許されない。

わたしは表情を変えずに続けた。

「そんなことも知らないんだね、遠野ちゃん。自分の死に、いったい何を期待してたの？」

「違う！」

「違うない」

切って捨てる。違うだなんて言わせない。

自分の死に何かを期待しない人間なんていない。それが遠野ちゃんの年頃ならばなおさらだ。それに、遠野ちゃん自身もさっき言っていたではないか。

けれども、死ぬってことは特別ではないのだ。

「人が死んだくらいで、世界は悼まない。社会は小揺るぎもしない。

家の一軒ですら、倒れはしない」

それが、正しい世の中というものだ。

あんたに、なにがわかるの、と遠野ちゃんは問うた。

わからないのかもしれない。いや、わかるわけがない。幽霊のさみしさを、わたしが語るだなんて驕がましい。もう二度と自分の身体に戻ることの叶わない遠野ちゃんの辛さを、幸運なわたしが体感することは、きっとできない。

でも、それでもわたしが負けるわけにはいかない。

ここで、今の自分から目をそらし続けている彼女に死というものを突きつけてやらなければならない。死に向かいあう彼女を、受け止めてやりたいと思う。

けれども、それを遠野ちゃんにも望むのは、無理だったのだから。

「……ふざけんな」

どん、と。

遠野ちゃんは、霊体のわたしを突き飛ばした。

「うわっ」

不意をつかれて、よろめく……どこの話ではない。わたしの霊体は、遠野ちゃんと違って鎖で固定されていない。真の意味で、何にも囚われていないのだ。押された衝撃のまま壁をすり抜け、部屋の外に放り出されてしまった。

慌てて急制動をかけ、空中で止まる。上から見る辺りの景色は壮観の一言だが、見とれている場合ではない。すぐに部屋に戻る。

だが、戻った時にはもう遠野ちゃんが身体に入っていた。わたしの身体を奪った遠野ちゃんは身を起こす。

「遠野ちゃんっ」

呼びとめるも、止まらない。振り返りもしない。

わたしの身体に入った遠野ちゃんは、置いてあつた財布だけひつつかんで、あつという間に部屋から逃げ出した。

しばらく、身じろぎ一つ出来なかった。

体中から、力が抜けていた。だらりと手足がたれ、宙空に放り出される。

ただ、無性に悲しかった。

わたしは、くしゃりと顔を歪めた。

「遠野ちゃんの、ばかあ」

遠野ちゃんは、分かっているのだろうか。それとも、なにも考えずに衝動のまま身を任せたのだろうか。どちらでも、変わらない。

遠野ちゃんは、わたしに彼女を除霊させるに足る理由を与えた。

そして、それはわたしにしてみればたやすいことなのだ。もしかして、遠野ちゃんはわたしから身体を奪えば何も出来なくなると思ったのだろうか。

それは、ない。もしそうならば、勘違いも甚だしい。

だって、わたしは霊体でいる時のほうが、身体を持っている時よりずっと万能になれるのだ。

盗撮盗聴をしましょう

「……」

涙をぬぐって、右目を閉じる。

部屋に残されたわたしは焦ってなどいなかった。わたしは鎖に縛られて動けない遠野ちゃんとは違う。霊体でも自由に動ける鎖なしで、その中ですら別格の存在なのである。

それに、いくら離れようとあれはわたしの身体だ。わたしが一度死んで、蘇って十年。その十年で完全に支配しきっている。霊体が抜け出そうと遠野ちゃんが入っていようとなんだろうと、その感覚をつなげることができる。

閉じた右目の視界を、離れた身体につなげる。

遠野ちゃんが見ているものをのぞき見る。

景色が、映った。視界の半分が、遠野ちゃんと同じものになる。ちょうどタクシーに乗り込んだところだった。ホテルの前はタクシー乗り場になっていたから、わりと遅い時間のいまでもすぐに乗れたのだろう。

なるほど逃げるのにタクシーを使うのは当然の発想だ。好きな場所に、速くかつ遠くまで行ける。

だが、このタイミングはむしろ都合が良い。

そのまま聴覚もつなげ、遠野ちゃんの言葉を盗み聞く。

『まじ』

さて。これで遠野ちゃんの行き先の名前はわかった。

だけど、残念ながら土地勘がないからそれがどこなのかわからな。直接追いかけるのも難しい。霊体のわたしはそこそこの速度で

飛ぶことはできるけれど、さすがに車には追い付けない。

はつきりいつて地の果てまで逃げられようと捕まえられる確信はあるけれど、あれはわたしの身体だ。遠野ちゃんの好きにさせておく道理はない。

まあ、行き先の名前はわかっているのだから、同じくタクシーで追いかければいいのだ。

「これは疲れるから嫌なんだけどなあ」

心底からばやきながらも、意識を集中させる。足の爪先から神経の通っていない髪の毛一本一本の先まで、自分という存在を自覚する。その重さを、作りを、動きを全て実感できるほどに想像する。

息を、吸って吐いた。空中に浮いていた足が、地面に着いた。反動で、髪の毛が揺れる。

霊体であるときは左右されなかったあらゆる物理法則に束縛される。いまのわたしは姿を人に見てもらえ、声は届き、触れることもできる。

それが、霊体が実体を持つということだ。

「よし、成功」

これで、いまのわたしは普通の人と変わらない存在になった。タクシーを取って追いかけよう。

右目を閉じたまま、歩きだす。視界の半分がまったく違うというのは奇妙な感覚だけど、その内なれるだろう。

ただ、それよりも問題なのが、消耗具合だ。じりじりと体力が削られていくのがはつきりわかった。正直、実体化と感覚の共有を同時で行使するのはかなり無理がある。行き先は分かっているのだから、いったん感覚の共有を解いても良かった。

だけれども、見続ける。

遠野ちゃんがなにをしよつとしているか、見たかった。

消しましょう

まさか視覚と聴覚をわたしに共有されているとは思っていない遠野ちゃんは、住宅街に向かっているようだった。たまに運転手さんに細かい指示を出している。わたしはそれを逐一頭に叩きこみながらも、眉をひそめる。

勢いで飛び出したとはいえ、逃げるなら駅か空港に向かうと思うただけでも、何のために住宅地など行くのだろう。

そんな疑問は、すぐに氷解した。

遠野ちゃんが辿り着いたのは、一軒家だった。ちらりと『遠野』と銘打たれた表札が見える。それで、わたしはそこがどこだか理解する。

あそこは、遠野ちゃんの家だ。

しかし、いま遠野ちゃんはわたしの身体にいるのだ。自分の家とはいえ、他人なのだ。さすがにそれを忘れてるわけではないだろう。

どうする気なのだろうと思っていると、遠野ちゃんは何とそのまま堂々と正面から入った。

「……っつえ!?!」

ちよ、遠野ちゃん、それわたしの身体だよ。もし見つかったら、社会的信用が地に落ちるのは、わたしなんだよ! ていうか、鍵がかかってないのあの一軒家は!?!

「どうかしましたか?」

「いえ、何でもありませんっ……!」

思わず漏れてしまった声にタクシーの運転手さんが反応するが、まさか事情を話すわけにもいかない。わたしの身体がよその家に不法侵入しているんですー、何てこと、口が裂けても言うにはいかないのだ……！

はらはらするわたしを余所に、そおつと忍び込んだ遠野ちゃんは見つからなかった。そのまま居間に行き、足を止めた。勝手知ったる、という奴だろうか。いいのか悪いのか、順調に進んでいく。

途中ドアが開く音がして、遠野ちゃんがびくつと肩を震わせた。

あからさまに慌てている。「お、お母さんっ？」とか小声でうろたえたのが聞こえた。鼻をすすするような音が聞こえるが、風邪でも引いているからだろうか。わたしにとっても遠野ちゃんにとってもありがたいことに、鉢合わせはしないですんだようだ。

遠野ちゃんがほつと胸をなでおろし、忍び足でそのまま二階に……って、アホなの！？ 遠野ちゃん、やっぱりバカなの！？ もうさっさと逃げなよ！

「着きました……えっ」

いまのは、遠野ちゃんではなくわたしが聞いた声だ。

到着を知らせ、マジックミラーを確認した運転手さんが息を飲む。

「え、あれっ」

後部座席を映す鏡に、わたしはいない。うろたえた様子でこちらを振り返るが、もう運転手さんの目にそこにいるわたしは映らなくなっている。

実体化を解いたのだ。

空になった席を確認し、みるみるうちに運転手さんの顔が青ざめる。ごくり、と唾を飲んだのが上下するのが見えた。

「変な怪談とかにならないといいんだけどね……」

ちくちくと罪悪感にさいなまれながらも、そのまますると扉を抜ける。呟く声も、もちろん運転手さんには届かない。

「ごめんなさい」

無賃乗車だ。いや立派な犯罪だっていうのは分かっているけど、遠野ちゃんが財布を持って行っちゃったから……えっと、すみません。頭を切り替えて、遠野ちゃんを追う。道順はちゃんと頭に入れておいた。

「……あそこかな？」

一軒家だし、外からだの間取りがつかみづらいけど、多分間違っていないだろう。間違っているとしても、いまの遠野ちゃんと違って、わたしは普通の人には見えないのだから心配することはない。壁を抜けて当て推量で入ってみると

「えっ？」

ビンゴ。強襲成功だ。入ったその部屋に、遠野ちゃんがいた。びつくりと目を見開いているが、容赦はしないよ。

「ていや」

わたしの身体ではなく、呆然としている遠野ちゃんの霊体にけりを入れる。遠野ちゃんは、ほとんど何の抵抗もなく強制的に追い出された。

よし、これで会話をしても、家の人には声が届かない。わたしの

身体が床に倒れているから、家の人が入ってきたらとっても困る事態に陥るけど、大丈夫だよ、きつと！ どさつ、とかけっこう重たい音がしたけど、様子を見に来たりしないよね、たぶん！

「……静香？」

「イエス。万能靈感少女、静香ちゃんだよ」

「……少女とか、厚かましいわよ」

いいの。厚かましくないの。二十歳はまだ少女を自称できるの。わたしの身体から追い出されたというのに、意外と落ちついていて。下手したら何の反応もしてくれないかもしれないと思っていたのに、案外と会話が成立していた。

「で、なんか用？」

まさかそれがわからないわけないだろうに、遠野ちゃんが聞いてきた。

「わたしが何しに来たか、わからない？」

「わかるわよ」

あっさり答えてから、でも、と言葉をつなげる。

「悪いことをしたとは、思わないわ」

わたしの身体を奪って逃げて、それでも彼女はそう言った。

「わたし的には、許せないことなんだけどね？」

「あんたがしたことと、あたしがしていることに、なんか差があるの？」

遠野ちゃんの目が、まっすぐわたしを射抜いた。

「人を殺すのを許さないあんたが、人殺しなんじゃない」

冷たく、言葉を突き刺してくる。

もちろん、それぐらいはわかっている。けれども、わたしにだって言い分はあるのだ。

「だって、わたしは生きたいもん」

「は？」

「わたしはね、遠野ちゃん。人を殺したって生きたい。昔に、そう決めたの。だから、遠野ちゃんに身体を奪われたままのわけにはいかないの」

「なによ、それ」

遠野ちゃんが、呆れたように肩を落とした。

「すごい自分勝手ね」

「知らないの？ 自分勝手じゃないと、生きていけないんだよ？」

少なくとも、わたしはそうだった。

矛盾を押し通すのは、いつだって強引な人の意思なのだ。人の意思の前には、正論なんて紙きれに等しい。だからわたしは、正論なんて信じない。行動あるのみ。それがわたしの信念だ。

「そっか……」

力なく遠野ちゃんが笑った。

からからと味気も水気もない、乾ききった笑い声だった。

「……で？ あんた、あたしをどうするの？」

虚無すら感じるその問い。きつと自分の死を覚悟しているそれに、わたしは聞き返した。

「遠野ちゃんは、何がしたかったの？」

わたしの身体を乗っ取りまでして、はたして何がしたかったのだろう。

「見たかったのよ」

力なく、それでも返答してくれた。たぶん、北海道に来たがっていたそもそもの理由も、それだけなのだろう。

「死んだ先を、見てみたかったの」

遠野ちゃんは、きつと自分が死んだあとがどうなっているか、見たかったのだ。あの話を聞かなかったら、遠野ちゃんは普通にわたしに頼んできたのだろう。

だから、いままで聞けなかったことを聞いた。

「遠野ちゃんって、何で、死んじゃったの？」

「……あたしね、生まれつき心臓が悪かったのよ。高校行くときもね、医者からは、学校行かないほうがいいって言われてたんだ」

それでも通ったのだという。

病弱のようには見えなかったけれど、むしろそう見せていたのだろう。高校の教室でも、活発に振る舞っていたに違いない。

遠野ちゃんの性格の根源が、何となく見えた気がする。

「何でそこまでして行きたかったのか、自分でも理由は良く解らないわ。でも、行きたかったの。それで、実際に入学したわ。あたしはね、静香。自分が死ぬなんて、これっぽっちも思っていなかったの」

淡々と、告白する。

「生きていられると思っていた。高校を卒業できると思ってたっ。大学に入学できるんだって思っていた！ 人生はまだまだ続くんだって信じていたっ！ なのに！！」

死んじやった。

そう、遠野ちゃんが叫ぶ。

「あなたは、死んだくせに、なんで生きてるのよ！！」

言葉足らずに、感情のまま本心を叩きつけてくる。

「あなたは幽霊でも生きてるって言ったわね。だったら、よこしなさいよ。この身体、あたしに開けわたしなさいよ！ あたしは、とても生きてるだなんて思えないもの！ この、健康な体を、ちよっうだいよ！」

わたしにしか聞こえない要求が、響いて、消えた。

そのわがままは、当然だ。

だけれども

「遠野ちゃん。一個だけ、聞くよ」

遠野ちゃんの頼みを聞く気なんて、これっぽっちもないけれど、それでも尋ねる。

「遠野ちゃんは、わたしを殺してでも、生きたい？」

「……っ」

予想外だったのだろう。遠野ちゃんの言葉を遮ったわたしに、彼女は息を飲んだ。

わたしはいまひどいことをしている。最低な言葉を投げかけている。それを自覚してなお、構わず追い打ちをかけた。

「選んで。勢いじゃなくて、衝動じゃなくて、感情だけじゃなくて、理性も、自制も、全部をひっくりくるめた遠野ちゃんを、言葉にしてみ
て」

「あたしはっ」

「遠野ちゃんは？」

「あたしに、は……」

言葉の力が抜ける。反論の声は震えて、立ち向かっていた顔はゆ
っくりとうなだれた。ぎりぎりと肩を圧迫していた力が抜け、腕は
だらりと下ろされた。

「……ねえ、静香」

悪鬼のような勢いは消え、呪詛のような濁りも薄れ、ひとりの女
の子が弱々しく祈るように言葉を零す。泣きそうな声で、ささやかな
な問いを結ぶ。

「っん」

わたしは遠野ちゃんに一步近づいた。

「あたしの周りの人って、つらかったのかな……」
「なんで、そう思うの？」

二歩近づいた。

「身体の弱い娘で、お母さんもお父さんも、苦労したよね……。友達も、ロクに遊びに付き合えないあたしの相手なんて、めんどくさかったよね……。だからあたし、周りの人にずっと申し訳なかったんだ。すがらなきや生きていけないのに、合わせることもできないんだもの。生きててごめんさいって、思ったこともある」

「おバカだね、遠野ちゃん」

三歩近づいて、腕を伸ばす。

わたしは、年相応に悲観的で自意識過剰な少女を、ぎゅっと抱きよせた。

「でもさ、お母さん、泣いてたの……。家に入った時ね、リビングで、お母さん、泣いてたの。沙織って、名前呼んでてね、あたしね、それ聞いて、すごい胸が痛くなった。でもね、ちよっと嬉しかったの」

「わかったよ、わかってるよ」

わかっている。わかっているのだ。

わたし達は世界に悼まれたいわけじゃない。社会を揺るがしたいわけじゃない。自分の家を壊したいわけじゃない。わたし達は、死んでも生きている幽霊たちは、ただ、墓標に名前が刻まれるように、関わった人に覚えていてほしいだけなのだ。

「あたしみたいなお荷物がいなくなって喜んでるんじゃないかって、

そんな最悪なこと考えてたのに、お、お母さんは……で、でも、あたひ、それが、うれしくてえ」

「大丈夫だよ。それが、普通なの」

涙声になっている遠野ちゃんを腕に抱き、言う。

わたしは。

かつてのわたしは、死んだことすら気がついてもらえなかった。すべてを取られ、何も残さずわたしは死んだ。

それは悔しくて、さみしくて、憎たらしくて、人を殺したくなるほどの激情を生んだ。

でも。

「遠野ちゃん」

でも、遠野ちゃんはわたしと違うのだ。

「みんな、忘れてないから。記憶の片隅にかもしれないけど、遠野ちゃんは残っているから。友達も、兄妹も、両親も誰もかも。みんな悲しんだんだよ。けれどもそれを乗り越えた。遠野ちゃんのお母さんも、きつと、これから乗り越える。それは喜ぶべきことなんだ。遠野ちゃんの人生は、無駄じゃなかったんだよ」

遠野ちゃんは、わたしを殺したがらなかった。

他人を殺してまで生き返ったわたしとは、違う。

だから、遠野ちゃんは大丈夫なのだ。

「だから、これからも生きていこう？ 胸を張って、自分勝手に、生きていこう」

わたしには、そんな当たり前のことしかいえない。けれども、そ

んな当たり前のことが言えればいいのだ。幽霊には、そんな当たり前の一言でも、心にしみわたる時があるのだ。ぼろりと。

涙が、こぼれた。

幽霊が泣いていた。遠野ちゃんが泣いていた。

遠野ちゃんから流れた涙は、どこへいくのか虚空で消えて見えなくなった。

「それでね」

わたしは遠野ちゃんをぎゅううっと抱きしめる。

「わたしは、絶対に。遠野ちゃんのことを忘れないよ」

「うあ、うあああああああん！」

そうやって、わんわんと泣けばいい。

泣いて、泣いて、泣いて、寝て起きて。そうしたら次の日には、きつと笑えるはずだから。

十 十 十

遠野ちゃんがすすうすと寝息を立て始めた。

あの後ホテルに戻ると、すぐに遠野ちゃんは眠り始めた。

実は幽霊も寝る。霊体でも動きまわれば疲れるし、頭を使えば眠くなるものなのだ。それを癒すために、寝る。なるほど睡眠とは必要なものなのだ。なつくづく思う。

「ふふ、やつぱりかわいいなあ」

遠野ちゃんが眠ったのを確認して、わたしは微笑む。

遠野ちゃんは、寝ている時が一等かわいい。膝立ちになって、なでなでと起こさないようにそつと撫でる。

今日の遠野ちゃんはよく耐えた。わたしの予想を越えて、本当によく耐えた。

偉い。ほんとうに偉い。

わたしはすつと立ち上がった。

「さて、と」

ぱちん、と部屋の電気を消す。

わたしも、疲れた。らしくもなく気を張りつばなしかったのだ。

けれども、遠野ちゃんとの関係で大きなひと山を越えたのだ。遠野ちゃんは、わたしを殺そうとしなかった。わたしを殺せば蘇られると教え、彼女の生きる意志を募らせ、わたしへの憎しみと羨望を煽つてもなお彼女は耐えた。

幽霊と暮らすのならば、それは重要なことだ。

何故ならば、幽霊は試そうとする。幽霊が人間の身体にとりつけることを、誰だって知っているのだ。だから触れる人間がいると試そうとする。正確な知識を知らなくとも、蘇れる手段があるならばと試そうとするのだ。

触れる人がいると、とり憑こうと試してみようとする。

わたしはそれを経験からそれを知っている。

だから、わたしは遠野ちゃんに教えた。正確な知識を教えて、わたしのことを教えて煽つて、それでも遠野ちゃんがわたしを殺そうとしないか試した。

それに耐えきれない子も、もちろんいる。前の子は耐えられなかった。あんな最後を迎えてしまった。

わたしは、幽霊を抜うのが、ひとつの救いとして正しいと理解している。だから、もし遠野ちゃんがわたしの首に手を伸ばしたら、わたしはその方法で遠野ちゃんを救っていたら。

けれども、遠野ちゃんはわたしを殺さなかった。

その結果を得られたのだ。やった甲斐はあった。結局、真実を隠したままでも、崩れ去ってしまうのだ。ならば、全てを打ち明けるのが吉というものだ。

もちろん、これから先も遠野ちゃんがわたしを殺さないだなんて保証はない。むしろこれからが本番だろう。成長するわたしたちと止まったままの遠野ちゃん。いやがおうにも、比べてしまい、苦しむことになる。

けれども、それは全部、これから。

いまは、まだ。

ふわわ、とあくびが漏れた。うん、眠い。

「ねよっ」と

もぞもぞとベッドにもぐりこむと、すぐに睡魔が襲ってきた。

消しましゅう(後書き)

消(灯)しましゅう、といふことです。

夢を見たら帰りましょう(前書き)

幕間ではない過去編です。

この物語で一番重要な話ですが、同時にこの物語で一番暗くてきつめの描写がある話なので、そういうのがダメな人はこれ以上読まないことをお勧めします。

夢を見たら帰りましょう

雨が、降っていた。

ざあざあと雨が降っていた。ぽつぽつと地面をたたいていた。その中を、わたしはぽつんと立っていた。

わたしは雨に濡れない。わたしは風に靡かない。わたしはこの世の何にも影響しない。幽霊になったわたしは、虚ろな目をしてただただ立っていた。

わたしは、立っていた。何かを期待して立っていた。そう、見つけてくれるとずっと期待していた。幽霊になってしまったけれども、確かに希望があった。普通の人には気がついてもらえないが、だつてわたしには視える友達がいるのだ。幽霊になった場所は何故か死んだ場所とは違ったけれども、偶然にもここは学校からそう遠くない。だからその子が見つけてくれると、それを心のよりどころにしてずっとそこにいたのだ。

そうして待つこと、一カ月。

わたしはもう期待なんてしていなかった。なんで期待をしたのかすら覚えていなかった。無為に偶然を待っていたとしか思えなかった。何を待っていたのかすら忘れてしまった。自分がなんなのかも忘れてしまったかった。

ただただもう、いなくなりたかった。

ここ数日は、ぴくりとも動いていなかった。動く意味が何にもなかった。体よりも心が先に動きを止めてしまっていた。それでも何かを考えようとする思考が邪魔だった。もう、なくなりたかった。成仏できるものならさっさと天国に送ってほしかった。とつと地獄に落として欲しかった。冥途でもどこにでも、いまずぐ連れて行ってほしかった。除霊できる人がいるっていうなら、いっそ消して

欲しかった。

死んでいなくなりたかった。

そうして、たったの一月で絶望が積み重なった。

それは一日一日ごとに増えていき、いまや十重二重になってわたしを覆っていた。延々と続き永遠になくならないと確信するには十分な重みだった。だから、諦め、悲観し、絶望し、心が風化して塵になり、擦り減っていくのだと思っていたのだけれども

「……え？ あんた……」

そんな未来は、あっさりかき消えた。

「……！」

背後から響いた声に、わたしは目を見開く。瞬きすらまばらでうつろだった眼球が、耳に入った声に反応して久しぶりに動いた。

この声は。

「しず……？」

後ろから、名前を、呼ばれた。ありえないものを見たような、そんな驚愕を含んだ声だった。

わたしは、ぱつと振り返る。もうそこに誰がいるかはわかっていたけれども、確認せずにはいられなかった。

そうして、風化しかけていた心が、潤った。

胸がいつぱいになって、じわりと涙が浮かんだ。

幻聴じゃ、なかった。

ほのちゃんが、そこにいた。

わたしを視たほのちゃんが、傘を落とした。

「え、え？　なんで、どうして」

呆けたように、目を見開いていた。ほのちゃんのかわいい服が濡れる。長くて綺麗でさらさらした髪が、雨でみるみる濡れていく。ほのちゃんは傘も拾わず一歩二歩、よろよろと足を踏み出した。

「なんで、しずが……？」

「ほのちゃあん」

ほのちゃんにわたしの声は聞こえなかったはずだ。

だっていまのわたしは幽霊になっている。ほのちゃんは視れるだけの霊能力者なのだ。だからわたしの声は聞こえない。

「……………！」

けれどもほのちゃんは弾けたように駆け寄ってきた。わたしに抱きつこうとして、触れない彼女は通り抜けてしまう。

わたしはそれにぼろぼろと涙を流してしまった。

「あんだ、しず……？」

「うん」

「ほんとにほんとのしずなの？」

「うんっ」

「絶対の絶対に！？」

「うん！」

勢いよく頷く。ぼろぼろと涙を流しながら何度も頷く。何度も頷くごとに涙がこぼれる。そうして涙が落ちるたびに、いままで諦め

ていたものが戻ってくる気がした。

「……なんで？ どうして……いえ、もしかして……」

まだほのちゃんは混乱しているようだ。それも無理はない。だが、それよりも聞きたいことがやまほどあった。

ぶつぶつとうつぶつぶいて考え事を始めたほのちゃんに、問いかける。

「ねえほのちゃん。わたしのお葬式とか、どんなだった……？ クラスのみんなとか、お母さんとかお父さん、どうしてる……？」

勇気を振り絞って聞いた。自分の死んだ後のことを、少しでも知りたかった。身振り手振りですらにかそれ伝えた。

でも、返ってきた答えはあまりに予想外だった。

「どうもして、ないの」

「え？」

一瞬、意味がわからなかった。

ぼかんと間抜けに口を開くわたしに、ほのちゃんが顔をあげて続ける。

「葬式なんて、やってないの。だって、しずは死んでないもの。いままで通り学校に通って家で過ごしてるの。友達と笑って遊んで疲れたら家に帰ってご飯を食べて眠ってる」

「なに、いつてるの……？」

そんなはずはない。だって、いま現にわたしはここにいる。幽霊のわたしがここにいる。そのわたしが死んでいないはずがない。

「だって、ほのちゃん、そんな」

「ほんとなの。それとね、しず。あいつがいなくなった」

あ、と。

口を開く。

あいつというのが誰かはすぐ察することができた。幽霊だ。わたしは視ることも聞くこともできなかったが、ほのちゃんに紹介されて知り合った女の子の幽霊だ。

わたしを殺した、幽霊だ。

それがいなくなったという。わたしが死んですぐに、彼女がいなくなったという。それが意味することは、考えるまでもない。

そうだ。なんでいままで考えなかったのだろう。何故、彼女がわたしを殺したのかを。自分が死んだということばかりに気を取られていた。

「最近、あなたの様子が少しおかしいとは思ってたの。でもあいつが……っ、よりよってあいつが……っ、なに喰わない顔してしらばつてくれてえ……！」

ほのちゃんもわかつているみたいだ。

彼女がわたしを殺したのは、もう一度生きるためだったのだ。肉体を得るためだったのだ。

彼女がわたしの肉体を乗っ取って、わたしのふりをしているのだ。あまりのことに、また涙がこぼれた。

「ひい、ひどい……」

「泣いちゃダメ、しず」

ほのちゃんが、きつと顔を上げる。その表情に、迷いはなかった。

ただ泣くばかりのわたしなんかとちがって、真っ直ぐに灼熱の怒りをたぎらせている。

「私に任せて」

それからわたしは待った。ほのちゃんを信じて待った。きっとほのちゃんがどうにかしてくれると希望を抱いて待った。

それしかできなかった。

さして動けもせず、人に視てもらえず、叫べども声は届かず、手を伸ばしても触れない。それがこの一カ月だった。

さみしかった。気が狂いそうなくらい、さみしかった。

それを閉じ込めるために蓋をしていたけれども、ほのちゃんにであつたことで感情が開いてしまった。ひとりが、嫌だった。諦めていたものを取り戻し、希望がはつきりと形になつた途端に我がままになつた。

雨が上がり、日をまたぎ、はたしてどのくらい待つただろう。実際、せいぜい一日だったはずだ。けれどもそれはこの一カ月に等しい程、しかしそれとは別種に焦がれる時間だった。

そうしてようやく、ほのちゃんが来た。

二人で歩いている。もう一人は『わたし』の体。ほのちゃんと『わたし』はなにかおしゃべりをしながらこっちにくる。

『わたし』が顔を上げた。元のわたしだったら幽霊を視ることはできなかつたけど、『わたし』は違うらしい。

はつきりと目が合った。

さあつと『わたし』の顔色が変わる。わたしを認識した彼女は、

すぐさま身を翻した。しかしすぐほのちゃんにはがいじめにされて止められる。

「しずー！」

ほのちゃんがわたしを呼ぶ。わたしは一気に近づいた。動ける範囲には限りがある。『わたし』がいるのはその範囲ぎりぎりだ。

逃がすかとばかりに、わたしは全力で彼女の手を掴んだ。ここで逃げられたらお終いだ。

けれどもほのちゃんが転んだ。『わたし』がめちゃくちやに暴れていたせいだ。突き飛ばされた格好で転び、コンクリートの地面に頭を打った。

「あつっ」

ほのちゃんがちいさく悲鳴を上げて、そのまま起きない。かあつと頭に血がのぼった。

「放せ！」

「放さない！」

振りほどこうとする彼女の腕に必死にしがみつく。ぎちり、と彼女は顔を歪めた。

ほのちゃんのこととは心配だけれども、身体のないわたしには助けをあげることすらできないのだ。それに彼女を放したらもう二度とここには来ないだろう。ほのちゃんがいくら主張したって信じてくれないに決まっている。わたしの身体を持った彼女がわたしでないなんて、どうあっても信用されない。

「返して！ わたしの体、返してよお！」

「うるさい！ うるさい！ うるさい！」

傍からは見ることも聞くこともできない、醜い争いをする。わたしも彼女もそれだけ必死だった。外聞なんて、目にも耳にも入らなかった。

むしゃぶりつくようにしがみついて、わたしは叫ぶ。

「人を殺して体に乗っ取って！ そこまでして生きたいの！？」
「生きたい！」

弾けるような、いつそ小気味よい即答だった。

「生きたい。生きたい。生きたい！ そんなの当然だ！ 人を殺して乗っ取って、そこまでして、生きたい！」

叫び、叫び、叫び、言葉を叩きつける。

その言葉をひとつひとつを聞いたたびに、臓腑の奥から怒りがわき出る。なんて勝手に、迷惑で、暴力的で、わきまえない、開き直った発言なのだ。

あまりの言い草に顔を真っ赤にして、言い返してやるうとしたその瞬間

「それは、あんただって一緒でしょう！？」

「え？」

思いもよらない言葉に戸惑う。

「い、っしょ……？」

「そっだよ。あんただって私を殺そうとしてるじゃない！」

「な……っ」

なんてことを言うのだ。わけのわからない言い分に、くらりとめまいすらした気がする。

「だってそれはわたしの体だもん！」

「いまは私のだあ！」

寸断なく彼女はわたしの言葉をねじり伏せた。

「いまは私が生きてる人間であんたが幽霊だ！ 何だ何だ何だ！

あんたが私を殺そうとしてるんじゃない！」

「そんなのっ」

反論が口について出る。

だってそんなのは、自己を正当化しているだけの屁理屈で。信じられないほど勝手に。

呆氣にとられるほどわがままで。

筋がないほど幼稚で。

いくらでも論破できそう。

「そんなのは、そんなのわあ……」

そんな。

あまりにも、真っ直ぐな叫び。

「あ、あ、あ、あ」

おかしい。そんなのおかしい。絶対におかしい。いまの状況を見れば百人いれば百人がわたしの味方になってくれるはずだ。彼女の論理なんて蹴っ飛ばしてくれるはずだ。

でも。

ばきん、と何かがひび割れるような音がした。

「ああああ」

何でか、ぼろぼろと涙がこぼれた。彼女にしがみついたまま、わたしは泣いた。悔しくて、悲しくて、憎たらしくてわたしは泣いた。ぼろぼろとこぼれた涙はどこにいくのか、虚空でかき消えた。

ばきん、と、また金属的な音がした。

彼女の主張はおかしい。

でも、でも。

彼女の言う通りなのだ。

わたしの言っていたことなんて、ただの綺麗事なのだ。客観的に正しく倫理的で、人の良心にそっていて、世間にいる善人の大半から賛同を得られる綺麗事だ。

でもそんなのは、必死な相手に、一度死んだ相手に通じるはずもない。

彼女に言われて始めて気がついた。

わたしは、彼女を殺そうとしていたんだ。

わたしが彼女に殺されて乗っ取られたから、体を取り戻す？ なるほど正当な理由だ。綺麗で自分が正しいことをしていると信じるに足るよりどころだ。

でも、理由があればいいのだろうか。正しければ、それは許されるのだろうか。

馬鹿だろうか、わたしは。

違うのだ。理由があるうが無かるうが、正しかろうが何だろうが、そういうものではないのだ。人を殺すのに、正当な理由なんてない。人を殺していい正当な理由なんて、あつていいはずがない。

ならば。

理由にすぎらず、例え正しくなくとも、わたしは彼女を殺せるの

だろうか。真っ直ぐに死というものを見つめ、それでもわたしは彼女を殺せるのだろうか。なにより。

彼女を殺してまで、わたしは生きていけるのだろうか。

ばきん。

ああ。さつきからなんだろう。ばきんばきんと何かが砕ける音がある。答えを出せず、反論する言葉を失くし、ただ彼女にしがみつきながらもぶんぶん振り回され、そんなことを思った。

「もう、いいや」

わたしを引き離そうとしていた彼女の動きが、突然ぴたりと止まった。

何故だろう。なかばぼんやりと彼女の顔を見て。

「……！」

びくうつと身をすくませる。

まるで鬼のような、般若のような、死神のような、悪魔のような、けれども人間以外の何物でもない、底の知れない悪意を湛えた凄絶な表情が、そこにあった。

「被ってやる」

彼女が、低く呟いた。

わたしはしがみついたまま、目を見開く。

被う。それは。幽霊を。殺す？ いまなら。それは。わたし。そんな。いやだ。だって。わたしは

「消える」

わたしの思考など斟酌されない。彼女が、腕を振り上げわたしを

「あ」

死にたく、ない。

「う、わ、あああああああ！」

叫んだ。全部の力を使って彼女を引つ張る。生きたい。だから、全力で彼女の行動を邪魔する。なのにビクともしない。大樹を、大石をひっぱっているようだ。でも、死にたくない。諦めなかった。死に物狂いで、抵抗した。だって、生きたい。生きることを、諦めたくなかった。死力を尽くして、彼女を阻もうとした。彼女はうるさげに顔をしかめ、邪魔だと言わんばかりに腕を振り下ろそうとして。

ぱきんパキンパきんぱきんぱきんパキンパきん

その瞬間、音が連鎖的に連なりわたしの体を縛っていた何かが砕けた。

「あああああああああ！」

唐突に、わたしの力が彼女に勝った。大樹が一瞬で燃え尽きぼろぼろになり、大石がばらばらに砕かれて路傍の小石になったようだった。

「あああああああああ！」

わたしの全力に、いともあっさり彼女の霊体が引きずり出される。

「え？」

ずるりと出てきた彼女が、どことなくまぬけた声を上げる。

しかし容赦しない。そんな考えいっぺんも浮かばない。

そうだ。

わたしだって生きたい。人を殺したって、生きたい。罪があるからってなんだ。罰がのしかかってくるからどうなんだ。例えば人を殺すことになっても、他人の生を奪うことになっても、それでもわたしは生きたい。意地汚く、全力で生にしがみついてやる！そのまま思いつきり、霊体となった彼女を力の限りに突き飛ばす。どさりと、わたしの体が倒れた。わたしはささず体に入った。夢中だった。彼女よりも早く。それしか頭になかった。

「ああああああああ……あ」

気がつく、わたしは肉体に戻っていた。のどを振るわせ大気を振動させ大声で叫んでいた。

「ああ……」

また滂沱と涙が流れる。今日は、泣いてばかりだ。けれども、今日だけはいくらないでもないやと思える。

空気の流れを感じる。温度を感じる。湿度が存在する。足が地面についている。重力が身にのしかかり、風が髪を揺らしている、呼吸をすれば肺に空気が送られる。幽霊にはなかった全てを感じる。

蘇ったのだ。

涙が、溢れる。止める気もなく流れた涙は、頬を伝ってあごに流

れ宙に落ち、虚空で消えずに地面を濡らして広がった。
そうして、身体を取り戻した感動をかみしめていると

「え」

ぼん、とお腹を押す感触があつた。
視ると、彼女だった。

「え、え」

ぼすんぼすんと彼女の手がわたしのお腹を押す。彼女がわたしの体に入ろうとしていた。けれども、わたしがもう中にいる。その行為は無駄だ。

「え、え、え、え、」

なのに、なんで入れないのか心底不思議そうにしていた。首を傾げて、何度も何度もわたしの中に入ろうとしていた。疑問の声を上げ、壊れたように繰り返しわたしのお腹を押していた。

「え、え、え、え、あ」

彼女がわたしの顔を見る。わたしが彼女の顔を見る。
くしゃり、と彼女の顔が歪んだ。

「なんで、私、だって……………しにたく、
ないよう」

彼女が、言う。

もう、ぼろぼろだった。ぼろぼろと涙をこぼし、鼻水をたらし、

表情は虚ろで、絶望し、終わりを悟っているのに、それでも目の前
にある肉体にすがらずにはいられないようだった。

彼女が、のろのろとわたしの首に手を伸ばしてきた。

「いきたい、よう」

思わず目を反らしたくなる有様だった。見るに堪えない表情だっ
た。ひどくひどく、酷かった。

「そうだね」

けれど、わたしは目をそらさなかった。

これは、さっきまでのわたしだ。

そうしてこれからやるうとすることは、もしかしたらわたしがや
られるかもしれないことだ。

「けど、それはさ」

彼女の手がわたしの首にかかるのに合わせ、すつと手を伸ばす。
どうすればいいのかは、なぜかわかっていた。

彼女は、もう耐えきれない。自身が幽霊であることに、とうてい
耐えることはできない。

だから。

わたしは、しっかりと彼女と目を合わせて言った。

「わたしも、だよ」

夢を、見ていたらしい。

むくりとベッドから起き上がる。

なつかしい夢だ。昔はよく見ていた。昨日あんなことがあったせいで、さきほどまでの夢を見てしまったのだろう。

わたしはそのそと起き上がり着替える。

あの後、わたしは彼女を被った。それまではただ触れるだけだったわたしは、自分の肉体に戻ることによって比類ない程の霊力を得た。

鎖なしになる条件は『一度蘇ること』なのだ。

彼女も当然鎖なしになっていたはずだが、自分の体で蘇ったわたしと所詮は他人でしかないわたしの体で蘇った彼女とは、力の差があまりにあった。なにせわたしを縛っていた呪縛は、わたしが自分の肉体に触っただけで砕けたのだ。幽霊にとって、自分の体と他人の体というのは、憑代としてあまりに差があるものらしい。

とにもかくにも、彼女は死んだ。わたしが被って彼女を殺した。そうしてわたしは蘇った。

ほのちゃんは、あれから少しして目を覚ました。救急車を呼ぶまでもない軽傷だった。わたしが体を取り戻したことを喜んでくれて、むしろけがをしたほのちゃんのほうが私のことを心配していた。

わたしはその日のことを書きとめようとして、それから日記を書くようになった。わたしの考えたこと、体験したこと感じたこと、自分の生を刻み込むように記した。何かを遺したい。いみじくも、遠野ちゃんがいったことと同じ心情だったのだ。

そうして、しみじみと思ったことがある。

わたしは、成長する。

普通の人に触れて喋れて、見てもらえる。社会的な立場があり、ひとところにいることができる。それがわかって嬉しい半面、ふと思うことがある。

しかし、わたしは幽霊なのだ。

わたしは一度死んだ。肉体があっても、それは絶対に変わらない。だから、考えてしまう。

わたしは、生きているのだろうか。それもやはり、死んでるのだろうか。

わからない。どうしても答えが出なかった。わたしはあまりに中途半端な存在だ。だからわたしは幽霊と話し始めた。一緒に住み始めた。人とも幽霊とも友達になることで、幽霊も人と変わらないんだと思うとした。人と幽霊が変わらないんだということを納得して、その間にいる自分も変わらないんだということを確かめたかった。色々と理由もきっかけもあるが、幽霊と住むようになったのは、そういうことだ。

そうして失敗した。

自分から、幽霊を抜いたくなんてなかった。なのに、結局みんな抜うことになった。

殺されそうになり、抜った。幽霊でいるのが嫌だと泣きつかれて抜った。わたしの不注意で、他の霊能力者に抜われてしまった子もいた。

けれども、今度の今度こそは。

「さー、朝だよ遠野ちゃん！」

空中に浮かぶ遠野ちゃんをゆさゆさ揺する。

「うつん……」

遠野ちゃんは寝ぼけ眼で挨拶をする。

「おはよふう、しずかあ」

「おはよう、遠野ちゃん」

ちよつとろれつの回ってない挨拶に微笑む。遠野ちゃんは目をこすりこすり、くわあとあくびをしていた。

飛行機発着まで、あと三時間と三十四分。

「ちよ、帰るよ?」

北海道にいる時間は、それで終わる。

夢を見たら帰りましょう(後書き)

家出娘が帰っていないので、まだ終わりません。

幕間 夢見る子供

「ねえほのちゃん。生きてるってなんなんだろうね」

「……どうしたの、いきなり？」

「んー、なんとなく」

ほのちゃんの問いを、はぐらかす。

実は昨夜に母親から、ガンで入院している父親の余命を聞かされたのだ。もちろん、そのことはほのちゃんには話していないし、話すつもりもない。

わたしは決して父親思いの娘ではなかったけど、三か月で父親が死んでしまうかもしれないということを知り、ぼつかりと胸に穴が空いていた。自分が死んだときも違う、自分が殺したときも違う。それは、いままで体験したどの悲しみとも異なり、怒りも憎しみといった激情がまったく入る余地がない。いまもこうして平気な顔してほのちゃんと話すことができる。

でも、ただただ純粹に悲しく、痛かった。

胸の内がきりきり痛んでいた。ぼつかり空いた穴に、立ちすくんでいた。死ぬっていうことを、わたしは知らなかったのだ。なるほど、一回自分が死んだくらいでは、それは全然理解できるものではないらしい。一回死んだというのに、死ぬということの重みをわたしはちっとも理解していなかった。これは、うん。

すごく、つらい。

「死ぬってなんなんだろうね」

悲しみに、底なんてないのかもしれない。苦しみに、限度はない

のかもしれない。自分が死んだ経験があつてなお、他人を殺したことがあつてすらなお、それよりつらいことがあるだなんて考えたこともなかった。

「生きるつて、なんなんだろうね」

「さあ。そんなの、知らない。けど」

言葉を重ねるわたしに、ほのちゃんがほんの少し目を細めた。

「しずは、それを知りたいの？」

「うん」

頷く。

知りたかった。

わたしは、この世界に地獄があるというのを知っていた。人が悪魔になれるということを感じていた。自覚すらしていない打算と欺瞞と悪意。それを上手に隠して自分のいいよう振りかざし、強者が弱者を蹂躪する。実際わたしもそうしていま生き残っている。

そうしてまで、わたし達は死にたくないのだ。

わたし達がそこまでして受け入れたくない死というものは何なのだろう。

「そう。だったら」

わたしのそんな疑問をほのちゃんは真正面から受け止めてくれた。そういえば、ほのちゃんは小学生のころから性格が変わった。前まではクールな外面とは裏腹に、あふれんばかりの正義感でリーダーシップをとっていた。なのに、中学生になつたいまでは口数が減つて、人付き合いを避けている気がする。見た目通り、身も心もクールビューティーになった、といえはいいのだろうか。男子からす

「ごいもてている。」

それでも、ほのちゃんの根っこは変わっていない。

「だったら、証明してみせる」

はっきりと言う。

「えっと、なにを？」

「生きていると、死んでいるとの定義を」

「……どうやって？」

「え。んとそれは……」

具体的なことは考えていなかったようで、口ごもる。だけでも必死に必死に頭を悩ませて

「ええっと、ほら。法律とかいっぱい勉強する。そうやって、権利とかをはっきりさせて、それで証明してみせるの」

どう、と首を傾げてくる彼女は、すごくかわいくて、なにより力ツコよかった。わたしは、ほのちゃんほど欺瞞も、打算もない人を他に知らない。

「そっか。それじゃあ、わたしもわたしなりに証明してみせる！」

そうしてちょっとだけ気持ちが上がってきた帰り道。

わたしは初めて同居することになる幽霊を見つけたのだ。

幕間 夢見る子供（後書き）

あと一週間ほどで完結します。

狂喜に身をゆだねましょう

「さーて我が家！」

わたしはマンションのドアの前で声を上げた。二日ぶりになつき我が家に帰ってきたのだ。飛行機は二回目で慣れていたので、思ったより酔わずにすぐに回復した。

やあ、それにしても旅の帰りってテンションあがるよね！

「そうねー」

対して遠野ちゃんはまだちょっと元気がない。毒舌も栄えないし、そもそも口数が少ない。

少し、眉をひそめる。

らしくない。ちょっと心配だけど、北海道でのことを乗り越えた余韻なのだろう。そっとしておくべきだ。

「なにはともあれたっだいまー！」

「ただいま……」

遠野ちゃんと一緒なんだから、もちろん中には誰もいないんだけど「おかえり」そこは気分でおおう！？

「……ん？」

うなだれ気味だった遠野ちゃんが、ないはずの返事にふと顔を上げる。

「誰よあのびじうわああっ」

疑問の声をあげた遠野ちゃんをびりつと引きはがして放る。悲鳴が上がった気もするけど、あんまり耳に入ってこなかった。どうでも良いことだった。

なぜならば、わたしは部屋にいた人物に全神経を集中させたからだ。

部屋にはすばらしくかわいらしい女の子がいた。

「ほ

年の頃は二十。わたしを見上げる瞳は冷めきっていないがらどこまでも澄み切っている。ただの黒目でなく黒曜石のように美しい色合いでありながらも透明度の高い冬の湖畔を彷彿とさせるその瞳は、見えざるものすら写しとる神秘の瞳でもある。

「の

髪は一見そっけなく見えてしまうショートカットだけれども、その手入れは抜くところが一切ない最上級の黒髪だ。幾種類ものシャンプーとリンスを使い分けて磨かれている。彼女が少し顔を動かすだけで、絹か金糸かと思まごうほどなめらかに揺れた。

「ちや

彼女がそこにいるだけで、何の変哲もない壁が、家具が、背景のすべてが輝きだした。それでいてそのすべてが彼女の引き立て役となっている。人間を形作る黄金比が存在するというならば、彼女はそれにぴたりと当てはまるに違いないと確信できる。

「ー

彼女がすつと立ち上がる。何気ない動きすらひとつひとつの所作によどみはなく、迷いもなく、典雅で美しい。そう。彼女は至高。神のつくりたもう美の結晶。人類の生んだ最高の奇跡。どこまでもどこまでもそして何よりも、わたしが愛する唯一の人。

「ん」

「うざい」

「ええ!？」

ほのちゃんって呼んだだけなのに、凜と響く声ではっさりだった。一カ月ぶりの再開だっていうのに冷たい! でもほのちゃんらしくてそれがいい!

ほのちゃんの声を聞いてもともと一気にマックスだったテンションがゲージをふりきった。脳みそが沸騰しそうなくらいに湯だって熱を帯び、頭がすこしパーになる。

「心配したんだよこの一カ月どこで暮らしてたの悪い虫とかついてないよねほのちゃんは清いままだよねうんわかつてるよそんなこと聞くまでもなかったね疑ってなんかないもんでもどうしたの急いちゃ違うよ嬉しいんだよただサプライズにちょっとびっくりしただけでありがとう帰ってきてくれてわたしベリーベリーハッピーだよおかえりほのちゃん!」

「まだ、幽霊はいるの」

総スルー! でもいいの。だってほのちゃんだもん!

「うん。遠野ちゃんはやっぱりいい子だよ!」

「あ……遠野です」

遠野ちゃんが借りてきた猫みたいにかしこまる。わたしの態度からほのちゃんが霊能力者だと察していたのだろう。あやちゃんの時といい、この子、意外と初対面の相手には猫を被るみたいだ。

ほのちゃんは幽霊の声を聞くことができない。当然遠野ちゃんの声も聞こえないから、わたしが通訳代わりをする。

「遠野ちゃんもよろしくって言うてるよ！」

「うるさい。だまれ」

ほのちゃんたらやつぱり冷たい！でも一月ぶりともなる、その冷たさもいつそ気持ちいい！

身悶えていると、ほのちゃんは遠野ちゃんになんて目もくれず、わたしのことをぎろりと睨んできた。やった！やつぱりほのちゃんはいっだってわたしのことを優先してくれるんだ！

「しず。私に隠していることがあるよね」

「何のこと？わたしが愛するほのちゃんに隠し事なんてするわけが」

「最近、夜空に幽霊が飛んでみたいね」

ぎくうっ。

摂氏零度を保てる冷凍機能がある視線に、わたしの心臓が凍りついた。ハイテンションで熱くなっていた脳がちよっと冷却される。

「ば、ばれてる！？幽体離脱して飛びまわっていたことが、露見しているですと！？いや！まだしっかり誤魔化せば何とかかなるはずだ！」

「なななななんのことうっ？わわわわわたしには書く仕事なんてちっともないんだから何の事だかさっぱりだよっ！」

「それに、除霊が後天的に身につけられるってことも隠してた」

「ただだからわたし学生だし各仕事なんて一切ないからわからない
ようー!」

誤字を駆使した言い訳がまったく通じてない。ていうか、除霊の
ほうまでほのちゃんが知っているなんて、いったい誰の陰謀なの!

「……………」

無言で睨んでくるほのちゃんの前にはもう猜疑心とかいうものは
なく、こっちの罪を完全に確信して責めてきている。

「あああああああああああああああああああああああああああ
わああわあ」

どうしよう。ほのちゃんに責められるなんて。どうしようどうし
よう。万が一これではほのちゃんが「もう二度と帰ってこない」とか
「しずなんてだいつきらいっ」とかそんな世界が崩壊する呪文を唱
えちゃったらどうしようどうしようどうしよう!

「だからほのちゃん違うんだよ嘘とかはついてんないんだよお願い
だからわたしのこと捨てないでようー!」

必死に必死にすがりつくように言葉を振り絞る。もはや泣きそう
だ。自分の表情はわからないけど、遠野ちゃんの『何この気の毒な
残念さんは』と言わんばかりの視線から察するに、相当ひどいこと
になってるのはわかる。けれどもなりふりなんて構ってられない。
ほのちゃんにがばつと抱きつこうとして「うざい」と邪険に蹴飛ば
された。

「……………何の修羅場よ」

おいてけぼりとなつた遠野ちゃんがぼつりと呟く。けれども第二次世界大戦、もしくはキューバ危機を発端とした米ソ冷戦時代以来の世界の危機を前にして思考の混乱を極めるわたしには、遠野ちゃんをかまっている余裕はなかった。

「ほのちゃんほのちゃんごめんごめんなさいもうしわけないようゆるしてくださいおゆるしてくださいだってわたしほのちゃんのことですきでだいすきであいしてだからちよつとむりしてでもあいたくてさみしくてなきそつであたまぱーになりそつだったからすこしくらいいつかなーってききかんのねじがゆるんでほのちゃんをさがしにいつちゃって」

「しず」

そうしてすがりついていると、ほのちゃんがふつと口をあけた。

「ひとつ条件がある」

「え、何の条件？ そつかもしかして結婚の！？ わかった何でも言つてオツケーだよ！」

「ちよつと頭の中組み立てなおしたほうがいいわよあんたは……」

横から入る遠野ちゃんのツツコミ。うん。確かに混乱の余り思考回路が少し混線している気はする。

ほのちゃんが、遠野ちゃんにずいっと顔を近づけた。

「うわっ……え、と」

世界で一番美人のドアップだ。遠野ちゃんはてきめんにつるたえた。

「え、ほのちゃん何やってるの!? 遠野ちゃんに顔近づけるぐら
いならわたしに! わたしにプリーズスキスミー!」

「うっさいわよあんたは!」

「……しず」

わたしの正当なる要求も遠野ちゃんの騒がしいツッコミも、ほの
ちゃんはごく自然にスルーした。

「こいつを、被え。もしくはどっかに捨てるだけでもいい。そした
ら戻ってあげる」

ぴしり、と空気が凍った。

「……………え?」

ほのちゃん帰還というハッピーで、ハイテンションのうかれぼん
ちになっていたわたしですら固まったのだ。さすがはほのちゃんとい
わざるを得ない。いままで一気にテンションが平常時まで下がっ
た。

耐性のない遠野ちゃんなんて、体どころか思考まで凍りついてい
る様子だ。

「え……………えつと?」

空気を和ませようと、にぱつと笑う。

「冗談、だよね」

当然のように無視された。

凍りついて動けないわたしと遠野ちゃんの横を通り抜け、ほのち

やんはすたすたと玄関に向かった。フリーズ状態のわたしは、それでもぎぎと首を動かしてほのちゃんの動きをトレースする。だって、ほのちゃんが大好きなんだもん！

「……そうだ」

その熱視線が功をせいしたのか、ほのちゃんはドアノブに手をかけたところで、ふと思い出したというように振り返った。

「それと、もう二度と、どっかのバカで危機管理のネジが緩みやすいらしいこの上なく迂闊な幽霊が町を飛び回ったりしないようするために言うておく。私はいま、綾瀬の神社で修行中なの」

そう言うって、今度こそドアを開けて外に出る。

「じゃあ」

いってきません、とは言わなかった。

狂喜に身をゆだねましよう(後書き)

シリアスやっていない主人公の書きやすさときたら！

憤怒に突き動かされましよう

ほのちゃん消失から約三分後。

「なっ、にっ、あの女あ！」

解凍された遠野ちゃんが、どっかーんと噴火した。

「あの態度はないでしょうっ。出てけ？ あまつさえ、被え？ はあ？ なにいつてんのばっつかじゃないっ？ こっちは一応家主の了解得てんのよ！ だっつーのにああもっつ。マジで何よっ。ちよつと美人だからって調子に乗ってんじゃないの？ 自分を何様だと思っつてんのよあのビッチ！」

口汚い罵倒は止まらない。まだ続くそれをわたしは聞き流した。ほのちゃんへの悪口は普段なら絶対許さないんだけど、今だけは見逃そう。

だって、遠野ちゃんなんかにかかずらっつている時間も惜しい。わたしは携帯をとりだしてあるところへ電話をかけた。

『んー、何、静香。私、いま二日酔い中で気分も機嫌も良くないから、さっさとすませて』

電話口から、大変だるそうな声が聞こえる。

わたしはすぐには答えず、息を吐いて、大きく吸う。お腹に空気を送るように息を身体に入れる。大きな声を出すために、最も大事な腹式呼吸の基本だ。お腹を、肺を限界まで膨らませ、その臨界点で一瞬止める。

ツケー？ はいオツケーね」
「……」

なんかすつごく腹立つものいいけど、いまあやちゃんに電話を切られるのは、困る。

『えつとですなー』

とりあえず黙ると、二日酔いでくたばっているらしいあやちゃんが、くだらだと説明を始めた。

『安藤さんみたいな天性で除霊できる人は知らないかもしれないですけど、うちに限らず全国の神社仏閣はあー、除霊の修行に来る人拒まずなんですー。除霊を習いたって人が来たらあー、住み込み可で受け入れるつてえー、そう決められてる義務なんですー。それと誰が修行してるとかの秘密はあー、厳守なんですー。だから嘘をつきましたですー。一か月前の食堂の時はあー、うなだれていた安藤さんを見て内心爆笑してましたですー。乃ノがちにいないとかあー、嘘なのにいー』
「あやちゃんなんてぶっ殺してやるううううう！」

呪いの！ 呪いの準備をしなくちゃ！ あの許されざる愉快犯型嘘つきピノキ子千野綾瀬に、天罰という名の呪殺を！

わたしが部屋をひっくり返して五寸釘と藁人形を探していると、電話の向こうから声が響いた。

『ああ、マジで頭痛い……。静香と話してたら、うぶ、吐きそうになつてきた……。叫び声きんきん頭に刺さるしさあ……。くだらないこと聞いてくんなよクソが……。ああ、もう酒なんて飲まない……これからは、規則正しく健康的な生活を送るんだ……』

「守る気ないこと言わないの！ ていうか、頭が痛くなるのはこっ

ちだよ！ なに頭痛の種増やしてくれてんの！？ ほんと呪うよ！
「？」
『うつせー、呪返ししてやんよ』

ほんとのほんとに呪ってくれようか、この子は。

『てか、静香の頭がイタイことになってんのはいつものことじゃんかさ………ていうか、別に除霊を覚えたっていいじゃん。んな怒ることか？』

「ほのちゃんはそんなことを覚えなくてもよかつたの！」

『はあ？』

「ほのちゃんはっ………、だってほのちゃんは………！」

『………ちよつと静香。からかつたのは悪かつたから落ち着けよ。いまのあんたはどう考えても感情的になりすぎだ』

携帯を、握りつぶしそうになった。

「……………」

けど、正論だ。わたしが感情的になっていて、あやちゃんは落ち着いている。原因がどっちにあったにせよ、あれだけの暴言を一方的にぶつけたら怒って当然だ。しかも、自業自得とはいえあやちゃんはいま体調が悪い。なのに、電話に付き合ってくれているし、冷静な対応を見せている。

あやちゃんは、人間が大きい。

息を、吸って吐いて落ち着く。

いまのは、わたしが悪い。

「ごめん、あやちゃん」

『ん、わかればよし。とりあえず、電話越しに呪い殺される心配は

ないかな』

思わず笑みがこぼれる。

「うん、ごめんね」

『じゃあ、事情を話させて』

「グッバイ」

『ちょ、面白そうな話なんだから』

電話の向こうで今日初めての必死さを見せてきたけど、知るもんかい。

「シーユーアゲインお大事に」

ブツ。ツ、ツ、ツ。

よし、これでもう電話が鳴らないことを祈ろう。

あやちゃんは頼りがいがある反面、物事を任せるにはおそろしく不安が残るといふ両極端な性質を持ち合わせているのだ。気まぐれに世話も焼くし、実際できる人間なだけで、基本的に無責任である。好きなようにした結果に対して、責任を持たないのだ。しかも普段は他人に対して、自分にさして害が及ばないように動き回る。……幽霊相手だと、すごく真面目なだけだね。

「やてと」

電源を切った携帯をぽいと投げ捨ててわたしは遠野ちゃんに向き直る。

遠野ちゃんは、いままでにないぐらい不機嫌面をしていた。

「これからどうするかだけど」

「その一。あの女がもう二度とここに帰ってこない」
「それはないよ。そんな選択肢は存在しないよ」

遠野ちゃんはたまに物理法則反した訳のわからないことをいうなあ。世界の常識をお父さんやお母さんに教わらなかったのだろうか。今度、わたしがしつかり教えてあげないといけない。

「ちつ。んじゃあどうするのよ」

「だからその一。遠野ちゃんを除霊しちゃう」
「ないないないない！」

わたしの提案に、遠野ちゃんがぶんぶんと慌てて首をふる。

「ていうかあの女が戻ってこない選択肢はないのに、あたしを抜うのはありなんかいい！」

「いやまあさすがにわたしもそんなことはしたくないよ？ だからその二」

わたしは指をぴつと立てる。

「遠野ちゃんをどっかにポイしちゃう」

「あんたが出てけこのアホがあああ！」

遠野ちゃんの右ストレートが火を噴いた。

「あんたあたしのことなんだと思ってんのよ！ とりついて殺してやるつか！ ていうか、いますぐ殴り殺してくれようかこのド阿保がああああ！」

「い、いや、もう、ギブだよ遠野ちゃん……」

怒り狂う遠野ちゃんに白旗を上げる。ナイスパンチだよ。鼻血が出たよ。

とりあえず、ティッシュ箱に手を伸ばす。それにしても幽霊って体重的ないから基本的に相手を危害加えるときは絞め技を繰り出そうとしてくるんだけど、何で遠野ちゃんは殴る蹴るに発想が行くのかな。

「いやでもね、遠野ちゃん」

顔を突き出して、唾を吐き散らさんばかりに怒鳴る遠野ちゃんを、どろどろと収める。

ティッシュで鼻血を拭きとりながら、ぼつりと心の底からの本音を一言。

「ほのちゃんが、そうしろってえ」

「だまりなさいこのアホ！ その頭に常識と倫理を叩きこんでくれるわ！ 拳で！」

「そんな遠野ちゃん。霊能力者の常識だと幽霊っていうのは抜くのが……ふえっ？ と、遠野ちゃん。いたって！ キックはちょっと、あ、だからってパンチも、違うの頭突きなら良いってわけじゃないんだよ暴れないでよいたいよう！」

現状を打破しましょう

「でもそうなるともうどうしようもないよね」
「諦め早いわね」

ポルターガイスト的なドメスティック・バイオレンスがひと段落した後に呟くと、遠野ちゃんが呆れた風のため息をついた。

「まったくあんたはバカね」

遠野ちゃんは偉そうに腕組みをして言う。

「逆を考えればいいのよ」
「逆？」

わたしの疑問符に遠野ちゃんが頷いた。

「そう。あたしたちがどうするかじゃなくて、ほのちゃんとやらをどうにかしてやるうってわけよ」

「ほ、ほのちゃんをどうにかするなんて、ふ、不潔だよ!」
「顔を赤らめるな気持ち悪い!」

遠野ちゃんの攻撃!

わたしの頭に遠野ちゃんチョップが振り下ろされた!
わたしは50のダメージを受けた!

「いたいよう。理不尽だよ」
「うるさいわよ。バカに対する正当な制裁よ」

うづくまつて頭を押さえるわたしに、遠野ちゃんは冷やかな視線を浴びせる。

「あたしが言ったのは、原因を考えようってことよ。なんであいつはあたしがここにいるのを良く思っていないわけ？」

「？」

それは。

わたしは上目遣いで遠野ちゃんを見る。遠野ちゃんが「何よ」といわんばかりに見下してくる。うん、見下ろしてないんだよ。見下してるんだよこの子。

「言いたくないんだけど……」

「別にあたしはいいわよ。ただ絶対、あの女が原因で出ていく気はないけどね。そんでもってあの女と和解する気もちつともないわ。徹底抗戦するわ。いつそあの女をこの部屋から追い出す気概でやってやるわよ。あんたとあの女が和解することもないわね。あはは、いい気味じゃない！」

「今回ほのちゃんが戻ってきたのは、突きつめれば心配してくれたからだよ。霊体のわたしが見つければ、冗談じゃすまないもん。ましてやその鎖なしがわたしだと分かれば、このあたりの霊能力関係は未曾有の大騒ぎになるだろうね！ 復活だなんてことは、それだけの珍事でおおごとだもん。だからわたしが霊体のままうるちよろしないように釘を刺しに来たんだと思う。さすがほのちゃん！ すっごい優しいよね！」

「簡単に脅せるわね、あんた……」

遠野ちゃんのお望み通りぺらぺらと自供したっていうのに、何故だか白眼視されている。いやだって、ほのちゃんを秤に乗っけられ

たら、そっちに傾くにきまってるじゃん！

「そしてさっきの提案も根源は同じだよ。ほのちゃんはわたしが幽霊と暮らすことに不安を覚えているの。だって……」

滑らかに紡いでいた言葉を、初めて滞らせる。口に出すのはためらわれたが、躊躇を捨てる。

「わたし、前に拾った幽霊の子に殺されかけたから」

遠野ちゃんが目を見張った。これは、遠野ちゃんには言っていないかった。幽霊たる遠野ちゃんには、言いづらかったのだ。

あの時わたしは、寝込みを襲われ殺されかけた。ほのちゃんの、真横で。

彼女は、大学に入ってほのちゃんと同居をしはじめてから初めて拾った幽霊だった。それまでは幽霊は拾っていても、殺されかけたことがあるのは黙っていた。だがその騒動で、ほのちゃんは気がついた。拾った幽霊が、何故いなくなっただか。

わたしを殺そうとして抜われたということに、ほのちゃんははつきりと気がついた。

啞然としている遠野ちゃんに、わたしは言う。

「だからほのちゃんは嫌なんだと思う。ほのちゃんは触れる人じゃないから被害に及ぶことはないけど、それでも隣で人が首絞められているのを見せられるなんていやでしょ？」

簡単なことである。

ほのちゃんは、またわたしが殺されるかもしれないと勘ぐって、それを防ごうとしているのだ。

「あんたは……」

遠野ちゃんは呆然としていたが、しばらくして、ぴん、とわたしの額を弾いた。

「あつっ」

ちょっと痛い。自供したんだからカツ井ぐらいご褒美でくれたっていいのに、デコピンとは。

何をすると睨むが、遠野ちゃんはあきれ顔をしていた。そうやってからため息をつく。

「……まぎれもなくアホね、そりゃ『ほのちゃん』も心配するわよ……」

ぼそりと呟いた声は聞こえなかった。

「え？　なんか言った？」

「別に……じゃあ、根くらべしかないわね」

仕方がない、といったように遠野ちゃんが結論を出した。

テレビのチャンネルを変えましょう

根比べと言っても、ほのちゃんがあやちゃんの家にいられるのは除霊の修行をしている間だけだ。あやちゃんの家を出ればほのちゃんの家出も持たない。そうすればまた交渉ができる。そうして待てばいい。

まあ、その間にやることあるし、ちよつどいつか。

「ということ、遠野ちゃんに罰ゲームを与えます」

「罰ゲーム？」

「そう。ちよつとエッチな緊縛ありのとびっきりの罰ゲー」

はい、らっしやいませえ！ お客様、ご注文はいかがいたしますか？

ボディブローで。

はい、ボディブローはいりましたー！

へい、ボディブロー一丁、お待ちい！

「で、なにか言いたいことはあるかしら？」

「と、遠野ちゃん……いまのは、ガチで……」

たぶん、いままで遠野ちゃんから受けたダメージの中で、一番痛かった……！ うっかりつまない脳内劇場開いちゃうぐらいに……！

「はいはい、で、罰ゲームってなによ」

お腹を抱えてうづくまるわたしに聞いてくる。

わたしは手のひらを遠野ちゃんに開いて見せる。

「これ」

じゃらん、と、わたしの手のひらから鎖が出た。

「え？」

あまりに唐突だったおかげで、ついてこれないらしい。ぽかんとしている。遠野ちゃんも、視えるみたいだ。とりあえず、合格。北海道に行く前は、この鎖は視えていなかったんだけどね。

鎖を操って、びっくりしてる遠野ちゃんの手首にぐるっと巻きつける。遠野ちゃんはしばらく物珍しげにしていたが

「えへへ、手錠プレイぶあ」

余計なこと言ったら、殴られた。

「これって、あんたの言ってた呪縛とかいうやつ？」

「ま、まあ厳密には違っただけど、似たようなものだよ」

遠野ちゃんから受けたダメージにややよろよろしながらも答える。呪縛はあくまで自然の摂理としての現象だけど、これはわたしが遠野ちゃんを縛っているのだ。どちらかというと呪詛に近い。霊能力の中では珍しい、生きている人間にも影響を及ぼせる禁術だ。

わたしの手にくっついていては切り離して、壁に埋め込む。わたしの手につけたままだと、遠野ちゃんを引きずりまわすだけになるからね。

「この前の北海道での時のことに対する、罰。これで、遠野ちゃん

の動ける範囲は昔と同じ、わたしの部屋の中に限られるよ」

まあ罰とか言ってるけど、自由に動き回れるようになった遠野ちゃんに対する家出防止の措置だ。それにいまの状態の遠野ちゃんがあやちゃんとかにでも見つかりでもすれば、あつという間に除霊されてしまう。理由をつけて閉じ込めておいた方がいいのだ。それでも、つながれた鎖を見て複雑そうな顔をしている。

「あと、実体化の練習もしようか」
「えっ」

きらりんと遠野ちゃんの目が輝いた。

「ほんと!？」
「ほんとほんと」

弾んだ声を肯定する。うん、やっぱり実体化っていうのは格別に嬉しいよね。

「どのくらいで出来るのっ?」
「目測で、三年!」

きらきら目を輝かせる遠野ちゃんに倣って、わたしもとびつきりの笑顔で返す。

「わたしは三カ月で出来たけどね! 遠野ちゃんは、才能ないから無理! そもそも下地からして違」

ピンポン。

あ、いらっしやいませ。こちら安藤静香の脳内ですけど、なにか

ご用でしょうか。

ええ、ご注文のローキックから発生した激痛をお届けにあがりま
した。

え、すみません、頼んでません。受け取り拒否は……あ、ちよっ
と、押しつけは困ります！ 引き取ってくださいよ！

いやあ、うちもそんなものいららないんで……！

「で？ 人をガツカリさせるガツカリ人間によるガツカリな自慢は
終わった？」

「もう、ほんと痛いからやめてよ……。遠野ちゃん、自覚ないだろ
うけど霊力かなり上がってるんだからね……！」

打撃が、すっごく重くなってるんだよね。うっかり涙目になっ
ちゃうくらい。

泣きそうになってるわたしの台詞に、遠野ちゃんはやっぱり自覚
がなかったのかぱちくりとまばたき。

「そうなの？」

「そうなの！」

じゃなきゃ、実体化を教えようとも思わないよ。ていうか、遠野
ちゃん、暴力の頻度が上がってない？ なんか吹っ切れるようなこ
とでもあったの？

「まあ、全身を実体化させるのはたぶん三年以上かかるけど……人
差し指一本を一瞬だけ、ぐらいならわりとすぐに出来るんじゃない
かな？」

「人差し指一本で何ができるのよ」

わたしの情報提供に、遠野ちゃんは不満そうに口をへの字に曲げ

る。

ふっふっふ、遠野ちゃん、わかってないなあ。人差し指の偉大さをちっとも思い知っていない。人差し指のあるなしじゃ、人生はまったく違うものになるというのに。

これは教えてあげなくてはいけないねえ。

「なんと！ テレビのリモコンが、使えます！」

「よし！ やるわ！」

遠野ちゃんが、ものすごいやる気を出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9503w/>

彼女は、生きている

2011年10月21日01時02分発行